

三田市

北摂ニュータウン内
遺跡調査報告書 VIII

かじ しも が なに
梶 下 ケ 谷 遺 跡

2000年3月

兵庫県教育委員会

三田市

北摂ニュータウン内 遺跡調査報告書 VIII

かじ しも が たに
梶 下 ケ 谷 遺 跡

2000年3月

兵庫県教育委員会



昭和62年度 調査区航空写真（南東上空から）



昭和62年度 調査区航空写真（南東上空から）

カラー図版 2



昭和62年度 調査区全景航空写真（東上空から）



SB-3 全景（南西から）



SK-31 全景 (西から)

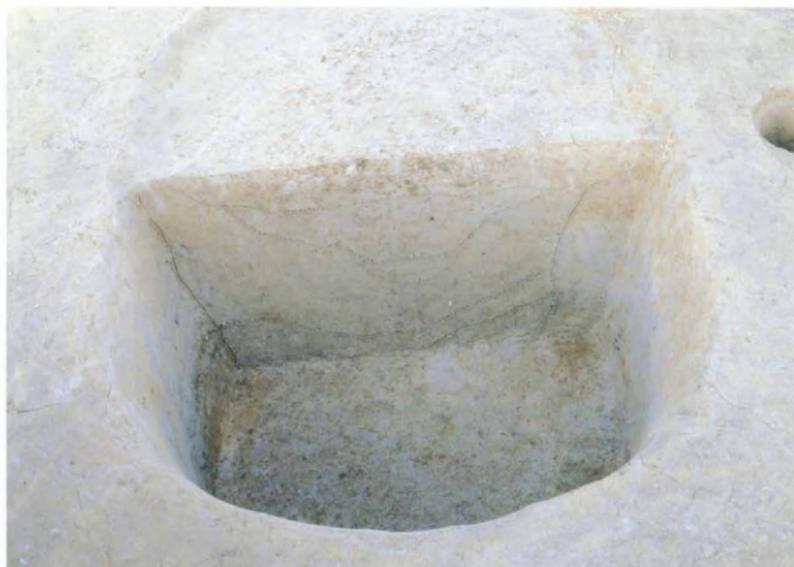


SK-33 全景 (北から)

カラー図版 4



SK-15 底部 (北から)



SK-25 土層断面 (南西から)



SX-1 全景 (南東から)



SE-1 全景 (東から)

カラー図版 6



谷部全景 (南東から)



谷部土層断面 (東から)

例 言

1. 本書は北摂ニュータウン中央地区（ウッディタウン）建設事業に伴う樋下ヶ谷遺跡の発掘調査報告書である。現地調査および整理作業は住宅・都市整備公園の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
2. 遺跡は三田市すずかけ台3丁目に所在し、開発前の旧字名は三田市貴志字樋下ヶ谷であった。
3. 発掘調査は確認調査を含めて昭和53（1978）・62（1987）・63（1988）年度に行い、現地調査にあたっては、関西建設工業株式会社と請負契約を結んで実施した。
4. 遺跡の航空写真は、昭和62年度調査分が国際航業株式会社、昭和63年度調査分のうち気球による空中写真は関西航測株式会社、ヘリコプターによる空中写真はワールド航測株式会社にそれぞれ委託して撮影を行った。
5. 遺構図に使用した方位は阿土座標（第IV系）にもとづくものである。また、標高は東京湾平均海水準（T. P.）を基準とした海拔高度である。
6. 使用した写真のうち、遺構については各遺跡の調査担当職員が撮影したが、遺物写真については、平成3年度に株式会社日の出写真に委託して撮影したものを使用した。
7. 本書の遺物の番号は図面・写真図版とも一致し、土器は通し番号のみ、鉄器類はT、石器はSを冠し通し番号としている。また、土器のうち、須恵器は断面を黒塗り、土師器は白抜きとしている。
8. 土器の色調および遺跡の土層色名は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。また、土層堆積物の粒度区分については『新版地学ハンドブック』（大久保雅弘・藤田至剛編著、築地書館株式会社発行）により、調査担当者が経験的に触感により判断したものである。
9. 本書の編集は、八木和子・中筋貴美子の補助を得て岸本一宏が行い、執筆もすべて行う予定であったが、事情により、一部を分担とした。分担は池田正男（歴史的環境および鉄器）、森内秀造（須恵器関係）、村上泰樹（鍛冶関係遺物）、藤田 淳（石器）、菱田津子（地理的環境）、池田征弘（土師器関係）が行い、目次に記した。
なお、土壌の残存脂肪酸分析についての玉稱を株式会社北海道測量図工社（中野益男博士監修）から戴き、掲載した。
10. 出土遺物および作成した図面、撮影した写真はすべて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
11. 発掘調査および整理作業・報告書作成にあたっては、下記の諸氏・機関にご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表する。
高島信之（三田市教育委員会）・高橋 学（立命館大学）・中野益男（帯広畜産大学）・西脇対名夫（財団法人北海道埋蔵文化財センター）・広岡公夫（富山大学）・山崎敏昭（三田市教育委員会）
・榊地球科学研究所（50音順）

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と体制

- 1 調査にいたる経過…………… (岸本) 1
- 2 調査の経過と体制…………… (岸本) 2

第2節 地理的環境…………… (菱田) 5

第3節 歴史的環境…………… (池田正) 6

第2章 調査の結果

第1節 遺構…………… (岸本) 11

1. 確認調査…………… (岸本) 11
2. 全面調査の概要…………… (岸本) 21
3. 縄紋時代の遺構と遺物…………… (岸本) 25
4. 奈良時代以降
 - A. 全体の概要…………… (岸本) 40
 - B. 竪穴住居跡 (SB-3)…………… (岸本) 44
 - C. 掘立柱建物跡…………… (岸本) 47
 - D. 井戸・溝…………… (岸本) 62
 - E. 鍛冶炉 (SX-1)…………… (岸本) 64
 - F. 木棺墓…………… (岸本) 65
 - G. 溝…………… (岸本) 67
 - H. 谷部…………… (岸本) 69

第2節 遺物

1. 遺構出土遺物…………… (森内・池田征・村上) 72
2. 包含層出土土器…………… (森内・池田征) 79
3. 金属器…………… (池田正・村上) 81
4. 石器…………… (藤田) 83

第3章 まとめ

第1節 陥し穴について…………… (岸本) 87

第2節 奈良時代の遺構について…………… (岸本) 89

第3節 土器について…………… (森内・池田征) 91

第4章 自然科学

第1節 梶下ヶ谷遺跡遺構群に残存する脂肪酸の分析…………… (北海遺訓製図工社) 93

カラー写真図版目次

カラー図版1上	昭和62年度調査区航空写真 (南東上空から)	カラー図版3上	SK-31全景(西から)
			下 SK-33全景(北から)
	下 昭和62年度調査区航空写真 (南東上空から)	カラー図版4上	SK-15底部(北から)
			下 SK-25上層断面(南西から)
カラー図版2上	昭和62年度調査区航空写真 (東上空から)	カラー図版5上	SX-1全景(南東から)
			下 SE-1全景(東から)
	下 SB-3全景(南西から)	カラー図版6上	谷部全景(南東から)
			下 谷部土層断面(東から)

挿 図 目 次

第1図	北摂ニュータウン内の遺跡……………12	第23図	SB-8実測図……………54
第2図	調査前地形と全面調査範囲……………13	第24図	SB-9実測図……………56
第3図	確認トレンチ設定図……………15	第25図	SB-10実測図……………57
第4図	遺構全体図……………19	第26図	SE-1・SD-17実測図……………59
第5図	土層断面図……………23	第27図	SE-1実測図……………61
第6図	縄紋時代遺構全体図……………27	第28図	SX-1位置図……………63
第7図	陥し穴実測図1……………29	第29図	SX-1実測図……………64
第8図	陥し穴実測図2……………31	第30図	木棺墓実測図……………66
第9図	陥し穴実測図3……………33	第31図	SD-2・3実測図……………68
第10図	陥し穴実測図4……………35	第32図	谷部実測図……………70
第11図	陥し穴実測図5……………37	第32図	谷部土器出土状況実測図……………71
第12図	陥し穴実測図6……………38	第34図	遺構出土土器……………73
第13図	包含層出土縄紋土器……………39	第35図	谷部最下層出土須恵器(1)……………74
第14図	奈良時代以降の遺構全体図……………41	第36図	谷部最下層出土須恵器(2)……………75
第15図	樹立柱建物跡等配置概略図……………43	第37図	谷部最下層出土土器(3)……………76
第16図	SB-3実測図……………45	第38図	谷部最下層・下層出土土器……………78
第17図	SB-3部分実測図……………46	第39図	包含層出土土器……………80
第18図	SB-1実測図……………48	第40図	SB-3出土金属器他……………82
第19図	SB-2実測図……………49	第41図	出土石器(1)……………84
第20図	SB-4・5実測図……………51	第42図	出土石器(2)他……………85
第21図	SB-6・7平面図……………52	第43図	陥し穴の存在状況とけものみち推定図……………88
第22図	SB-6・7断面図……………53		

写真図版目次

- | | | | | | |
|------|---|-----------------------------|------|---|-------------------------------|
| 図版1 | 上 | 昭和62年度調査区 調査前全景
(南東から) | 図版15 | 上 | SK-33底部 (南から) |
| | 下 | 昭和62年度調査区 調査前全景
(南から) | | 下 | SK-34 (西から) |
| 図版2 | 上 | 昭和63年度調査区 調査前全景
(南から) | 図版16 | 上 | SB-3 (堅穴住居跡) 全景
(南西から) |
| | 下 | 昭和63年度調査区 調査後全景
(南から) | | 下 | SB-3 竈 (南西から) |
| 図版3 | 上 | 昭和63年度調査区 調査後全景
(東南東から) | 図版17 | 上 | SB-3 竈 (南西から) |
| | 下 | 昭和62年度調査区 調査後全景
(南東上空から) | | 下 | SB-3 南西隅鉄器出土状況
(北東から) |
| 図版4 | 上 | 昭和62年度調査区 調査後全景
(南西上空から) | 図版18 | 上 | SB-1 (北から) |
| | 下 | 昭和62年度調査区 調査後全景
(東上空から) | | 下 | SB-1 (西から) |
| 図版5 | 上 | SK-4 (北から) | 図版19 | 上 | SB-2 身倉部分 (南から) |
| | 下 | SK-8 (北から) | | 下 | SB-2 (東から) |
| 図版6 | 上 | SK-11 (北から) | 図版20 | 上 | SB-4 (東から) |
| | 下 | SK-25土層断面 (南西から) | | 下 | SB-5 (南から) |
| 図版7 | 上 | SK-12土層断面 (西から) | 図版21 | 上 | SB-6・7 (東から) |
| | 下 | SK-12底部 (西から) | | 下 | SB-6・7 (東から) |
| 図版8 | 上 | SK-14土層断面 (西から) | 図版22 | 上 | SE-1 (東から) |
| | 下 | SK-14 (南から) | | 下 | SE-1 土層断面 (東から) |
| 図版9 | 上 | SK-15土層断面 (西から) | 図版23 | 上 | SE-1 周辺 (南から) |
| | 下 | SK-15 (西から) | | 下 | SX-1 検出状況 (南東から) |
| 図版10 | 上 | SK-15底部 (北から) | 図版24 | 上 | SX-1 炭滓状状況 (南東から) |
| | 下 | SK-27 (東から) | | 下 | SX-1 完掘状況 (南東から) |
| 図版11 | 上 | SK-30土層断面 (西から) | 図版25 | 上 | SX-2 (北から) |
| | 下 | SK-30 (北から) | | 下 | SX-2 (東から) |
| 図版12 | 上 | SK-31土層断面 (西から) | 図版26 | 上 | SX-3 土層断面 (北西から) |
| | 下 | SK-31 (西から) | | 下 | SX-3 (南から) |
| 図版13 | 上 | SK-28 (北から) | 図版27 | 上 | SX-4 (西から) |
| | 下 | SK-32 (南から) | | 下 | SX-4 完掘状況 (西から) |
| 図版14 | 上 | SK-33土層断面 (北西から) | 図版28 | 上 | SX-5 (南東から) |
| | 下 | SK-33 (南から) | | 下 | SX-5 完掘状況 (南東から) |
| | | | 図版29 | 上 | SD-2 J-J'土層断面 (南から) |
| | | | | 下 | SD-2 I-I'土層断面 (南から) |
| | | | 図版30 | 上 | SD-3 北東部土器出土状況と土
層断面 (西から) |
| | | | | 下 | SD-3 北東部土器出土状況
(南西から) |

- 図版31 上 SD-5 土器出土状況 (東から)
 下 SD-8 土器出土状況 (北から)
- 図版32 上 SD-10 土器出土状況 (西から)
 下 SD-11 土層断面 (北から)
- 図版33 上 谷部全景 (南東から)
 下 谷部全景 (南東から)
- 図版34 上 谷部北端土層断面 (東から)
 下 谷部A-A' 土層断面 (南東から)
- 図版35 上 谷部B-B' 土層断面 (南東から)
 下 谷部D-D' 土層断面 (東から)
- 図版36 上 谷部中央須恵器甕出土状況 (東から)
 下 谷部中央須恵器甕出土状況 (東から)
- 図版37 上 谷部中央須恵器甕下層土器出土状況
 (北西から)
- 図版37 下 谷部南東土器出土状況 (南から)
- 図版38 上 調査区南端畝状遺構 (南から)
 下 調査区畝状遺構 (北から)
- 図版39 遺構出土土器他
- 図版40 谷部最下層出土須恵器 1
- 図版41 谷部最下層出土須恵器 2
- 図版42 谷部最下層出土須恵器 3
- 図版43 上 谷部最下層出土土器
 下 谷部最下層出土土師器 1
- 図版44 上 谷部最下層出土土師器 2
 下 谷部最下層出土土師器 3
- 図版45 上 谷部下層出土須恵器
 下 谷部出土土器
- 図版46 上 谷部出土須恵器
 下 谷部他出土土器
- 図版47 上 谷部出土土師器
 下 包含層出土須恵器
- 図版48 上 出土縄紋土器・韃羽口
 下 出土石器
- 図版49 上 SB-3 出土鉄釘
 下 出土鉄滓

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と体制

1. 調査にいたる経過

北摂ニュータウン

神戸市北区から三田市にまたがる地域に所在する神戸三田国際公園都市のうち、三田盆地西北部の丘陵上に建設されているのが北摂ニュータウンである。事業は主として住宅・都市整備公団が担い、その面積は1,244haにおよぶ。このうち中央地区をウッドイタウンと称し、開発面積は598haである。

北摂ニュータウン建設地は標高200m前後の丘陵に小さな谷が入り込んだ緩やかな地形が大平で、谷部には農地や溜池が存在していた。

埋蔵文化財

北摂ニュータウン建設予定地内の埋蔵文化財分布調査は、昭和44・45年に高井悌三郎氏を調査主任として実施され、その結果と事業計画に合わせて昭和46年度から発掘調査が実施された。

昭和49年にはニュータウン関連事業に伴い、故磯崎正彦氏らによって奈良山1号墳の全面調査が実施され、昭和51年～昭和53年には故藤井祐介氏を団長に、西山古墳群1～8号墳・西山遺跡・奈良山7・12号墳の調査が実施され、昭和58年に「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ」として調査報告書が刊行されている。

昭和53年度以降は兵庫県教育委員会による確認・全面調査が始まっている。ただし、溝口遺跡については平安博物館が主体となり、昭和60年度に全面調査が実施され、昭和61年に調査報告書が刊行されている。

兵庫県教育委員会による全面調査では、昭和53～56年度に奈カリ与遺跡・奈カリ与古墳・釜屋城跡、昭和53年度に五良谷11号墳の調査を実施しており、昭和58年度に「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ」として調査報告書を刊行している。

奈良山遺跡は昭和55・57・59年度に調査を実施し、中西山古墳・中西山遺跡は昭和56・62年度に、平方遺跡・平方古墳は昭和62年度・平成2年度に、平方西遺跡は平成元年度にそれぞれ全面調査を行い、それらは平成5年に「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ」として調査報告書を刊行している。

昭和62・63年度には西山古墳群2・9～20号墳、西山遺跡と西山西遺跡・西山西古墳は平成3年度に全面調査を実施し、「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅴ」として平成11年に報告書を刊行している。

有鼻遺跡は平成7・9年度に調査を実施し、平成7年度調査分は「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅳ」として平成11年に報告書を刊行し、平成9年度調査分については「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅵ」として平成12年に報告書刊行の予定である。

下西山遺跡は平成5年度に全面調査を実施し、平成12年に「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅶ」として報告書刊行の予定である。

ここに報告する榎下ヶ谷遺跡は、No107地点として昭和53年度に確認調査を実施し、奈良時代の掘立柱状遺構が確認された。次いで昭和62年度に確認調査・全面調査、昭和63年度にも全面調査・確認調査を実施したものである。

2. 調査の経過と体制

A. 発掘調査

梶下ヶ谷遺跡の発掘調査は4次にわたる確認調査と2次にわたる全面調査を行った。調査の経過と体制は下記の通りである。

①確認調査

第1次確認調査

北摂ニュータウン計画地域内の分布調査の結果（高井第三郎・橋本 久「北摂ニュータウン計画地域内 埋蔵文化財分布調査遺跡地図及地名表」第1・2集 兵庫県教育委員会 1970・1971年）、No107地点として「長楽寺跡」の名称で登録されていた部分についての確認調査である。

確認調査の結果、奈良時代の柱穴状遺構を検出し、約2,400㎡について全面調査が必要であるとの判断が行われた。

調査主体・調査担当者および調査期間は次の通りである。ただし、梶下ヶ谷遺跡の第1次確認調査は奈カリ与遺跡・五良谷11号墳の全面調査や他地点の確認調査とともに実施したため、期間・担当者は厳密なものではない。

調査期間	昭和53年12月～昭和54年3月
調査主体	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課
調査担当者	榎本誠一 井守徳男 水口富夫 渡辺 昇

第2次確認調査

第1次確認調査後約8年が経過し、ニュータウン工事による遺跡破壊の可能性が生じたため、対象地の確認調査を再度実施することとなった。調査は約1,500㎡部分について第1次確認調査の坪（グリッド）の再確認を兼ねてトレンチを設定し、さらに西側には4箇所の坪（グリッド）を設定し、調査を行った。トレンチは幅2m、長さ30mのものを十字形に設定し、グリッドは2m四方のものである。

調査の結果、トレンチ部分で平安時代の独立柱建物跡や土壁を検出し、須志器・土師器が出土した。また、縄文土器も出土したため、その時代の遺構も存在する可能性が指摘された。一方、西部のグリッドでは、4箇所のうちの2箇所で遺構や遺物が出土した。その結果、約2,300㎡の全面調査の範囲が決定した。一方、遺跡西側の範囲についてはさらに広がることが予想され、さらに確認調査を実施する必要があるとの判断に至った。

第2次確認調査の調査期間・調査主体・調査担当者は下記の通りであるが、調査は中西山遺跡の全面調査、平方遺跡の確認調査と同時に行われたため、期間については厳密なものではない。また、梶下ヶ谷遺跡調査の主担当は篠宮である。なお、兵庫県教育委員会が設定した遺跡調査番号は870008である。

調査期間	昭和62年5月～昭和62年6月
調査主体	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課
調査担当者	兵庫県埋蔵文化財調査事務所 深井明比古 中川 沙 菱田淳子 篠宮 正

第3次確認調査

第3次確認調査は、第2次確認調査で決定した部分の全面調査と並行して実施した。調査は第2次確認調査の結果、遺跡が広がるかと予想された西部について実施し、トレンチによる調査を行った。

調査は幅2mのトレンチを東西方向に3本、南北方向に2本の合計5本を設定した。東西方向のものは北からA～Cトレンチ、南北方向のものは西からD・Eトレンチと呼称した。A～Eトレンチの長さそれぞれ27m、51m、37m、58m、55mで、調査対象面積は約7,400㎡、調査面積は440㎡である。

調査は表土より重機で掘削した後、人力で包含層掘削・遺構検出・遺構精査を行った。調査の結果、すべてのトレンチで遺構・遺物が検出された。検出した遺構は独立柱建物跡・柱穴・土塀・溝があり、出土遺物には奈良～平安時代の須恵器・土師器がある。また、第1次全面調査と同時に調査を行ったことにより、検出した土塀には縄紋時代の陥し穴も含まれていることも予想された。

第3次確認調査の結果、確認調査を実施した部分全体に遺跡が広がっていることが判明し、全面調査が必要であると判断された。ただし、遺跡の北西部については遺跡範囲を確定するには至らず、さらに確認調査が必要であるとの判断に至った。

第3次確認調査の調査期間・調査主体・調査担当者は下記の通りであるが、調査は西山古墳群・平方遺跡・梶下ヶ谷遺跡の全面調査、西山西遺跡・下西山遺跡の確認調査と同時に進められたため、期間については厳密なものではない。また、梶下ヶ谷遺跡調査の主担当は岸本である。なお、兵庫県教育委員会が設定した遺跡調査番号は870049である。

調査期間	昭和62年11月～昭和63年3月
調査主体	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課
調査担当者	兵庫県埋蔵文化財調査事務所 深井明比古 岸本一宏 中川 渉 姜田淳子 篠宮 正

第4次確認調査

梶下ヶ谷遺跡の第2次全面調査の初期に並行して実施した。遺跡北西部の範囲を限定する目的の確認調査である。調査は幅2mのトレンチを設定し掘削を行った。トレンチは全面調査区の北西部に南北方向2本、東西方向1本の合計3本で、北西のものから南東へ順にF～Hトレンチと呼称した。なお、Hトレンチは第3次確認調査Dトレンチの北側につながる形で設定した。

調査は表土から重機で掘削し、遺構面と思われる直上から人力により掘削・精査を行った。その結果、いずれのトレンチにおいても遺構・遺物は検出されず、遺跡は北西方へは広がっていないことが判明し、第2次全面調査範囲が遺跡の北西範囲であるとの認識に至った。

第4次確認調査の調査期間・調査主体・調査担当者は下記の通りである。なお、兵庫県教育委員会が設定した遺跡調査番号は880024である。

調査期間	昭和63年11月
調査主体	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課
調査担当者	兵庫県埋蔵文化財調査事務所 岡崎正雄 岸本一宏

②全面調査

第1次全面調査

第1・2次確認調査の結果を受け実施した、遺跡東部の全面調査である。調査面積は約2,300㎡で、検出した遺構は奈良時代の独立柱建物跡2棟・竪穴住居跡1棟・溝などのほか、縄紋時代の陥し穴と考えられる土塀群である。竪穴住居跡からは鉄釘がまとまって出土した。

第1次全面調査の調査期間・調査主体・調査担当者は下記の通りであるが、調査は西山古墳群・平方遺跡の全面調査、西山西遺跡・下西山遺跡の確認調査と同時に行われたため、期間については厳密なものではない。また、屍下ヶ谷遺跡調査の主担当は岸本である。なお、兵庫県教育委員会が設定した遺跡調査番号は870049である。

調査期間	昭和62年11月～昭和63年3月
調査主体	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課
調査担当者	兵庫県埋蔵文化財調査事務所 深井明比古 岸本一宏 中川 渉 菱田淳子 篠宮 正

第2次全面調査

第2・3次確認調査の結果を受け実施した、遺跡西部の全面調査である。調査面積は約6,100㎡で、検出した遺構は奈良・平安時代の掘立柱建物跡7棟・鍛冶炉・井戸・溝・木棺墓・谷状遺構などのほか、縄紋時代の陥し穴と考えられる土壌群である。

第2次全面調査の調査期間・調査主体・調査担当者は下記の通りである。なお、兵庫県教育委員会が設定した遺跡調査番号は880024である。

調査期間	昭和63年11月
調査主体	兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課
調査担当者	兵庫県埋蔵文化財調査事務所 岡崎正雄 岸本一宏

以上が発掘調査の経過と体制であるが、調査については関西建設工業㈱に作業委託し、調査時には、今村直子・斉木 巖・佐伯博光・田中 勝・堂ノ下康子・西本寿子・藤井太郎の補助を得た。

B. 出土品整理

屍下ヶ谷遺跡の出土品整理は合計4年度にわたり、平成2年度から開始し、3・10・11年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。洗浄・ネーミングについては現地で行ったため、埋蔵文化財調査事務所では接合・復元作業から実施した。4年度にわたる出土品整理作業の年度別作業内容と主体・担当者は下記の通りである。

出土品整理作業

作業内容	平成2年度・接合・復元作業 平成3年度・実測作業・遺物写真撮影 平成10年度・トレース作業 平成11年度・レイアウト作業・印刷
主体	兵庫県教育委員会
担当者	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 岸本一宏(土器・遺構) 加古千恵子(金属器保存処理) (嘱託員) 広戸紀子・八木和子・中筋貴美子・長浜幸子・片岡喜久子・ 井内ゆり・茨木恵美子・香川フジ子・本塚出英子

第2節 地理的環境

兵庫県三田市は、兵庫県の東南部に位置し、六甲山の北側、丹波山系との間にあり、盆地を形成している。旧国名では摂津国の西北部を占めているために、北摂地区と呼ばれるが、本来は有馬郡に属していた地域である。古くは金心寺の門前町として成立しており、戦国時代に至って有馬氏～荒木氏らの居城である新瀬城が築かれ、さらには江戸時代には三田藩九鬼氏の陣屋が置かれたことにより、以後城下町として栄えた。そして、近年までは、丹波地域への玄関口としての役割を担ってきた田園都市であったが、昭和45年の中岡自動車道の開通、昭和63年のJR福知山線の複線電化により、飛躍的に交通路が整備された結果、大阪・阪神方面への通勤圏となっており、ベッドタウンとしての役割が増している。このために、三田市から神戸市北区にかけては急ピッチでニュータウン建設が進められ、人工増加率では日本一を誇った時期もある。北摂ニュータウンは、そうした流れの中で、兵庫県と日本住宅公団（後に住宅・都市整備公団）が昭和40年代より計画し、人口10万人規模の街づくりを目指したものであった。南地区（フラワータウン）・中央地区（ウッドイタウン）は市の新しい中核になりつつある。また、西地区（カルチャータウン）には関西学院大学の一部が移転し、北地区（テクノパーク）にもハイテク関連企業などの誘致が進行中である。

地質的にみれば、三田市の南西部は、六甲山地が隆起する以前に六甲北麓一帯に堆積した湖木成の神戸層群からなる丘陵地からなっている。一方で、北東部は流紋岩からなる急峻な山地となっている。この境界部を削り、市の中央部を武庫川が流れている。武庫川は丹波高地の白鬚岳（標高741m）付近を源としており、約66kmで大阪湾に至る。三田盆地は、この武庫川のほぼ中流域にあたる。なお、広義の三田盆地は旧有馬郡の武庫川・有馬川・有野川・八多川・長尾川流域の平野部をさすが、現在三田盆地と呼ぶ場合は狭義の三田市の武庫川流域の平野部をさすことが多い。

北摂ニュータウン中央地区は、三田盆地北西部、東方山地の裾部を北から南に流れる武庫川の西側に平地との比高約50～70m、標高約220mの丘陵が広がる。この丘陵は神戸層群が平たく堆積したものであり、柔らかい地層であるためかなり浸食が進み、小さな解析谷が網目状に広がっている。この丘陵は大規模なニュータウンの造成が可能であった。

裾下ケ谷道跡は武庫川に向かう大きな谷とそこから派生する小さな谷に挟まれた台地上にあたり、台地の幅が広く傾斜が緩やかで、南面するという遺跡立地の好条件に恵まれた位置にあった。また、北摂ニュータウン内の遺跡の中では、谷部で見つかった唯一の遺跡である。

第3節 歴史的環境

広義の意味における三田盆地は、1965(昭和40)年以後に始まる大規模開発事業、高速道路建設事業などによって、もっとも大きく変容した地域といえる。

この盆地における埋蔵文化財調査の経緯を見ると、武庫川右岸の丘陵地帯を対象とする北摂ニュータウンの建設に伴い予定地内の埋蔵文化財分布調査が1969・70(昭和44・45)年に実施され、その後確認調査、本発掘調査が実施された。その調査結果は、『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ～Ⅳ』として刊行された⁹⁷⁾。一方武庫川左岸、青野川・黒川の流れを利用した多目的ダム「青野ダム」の建設が計画された。1974(昭和49)年分布調査が実施され、続いて確認調査、本発掘調査を行った。これらの調査は『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)(2)』として刊行された⁹⁸⁾。また、1977(昭和52)年、武庫川右岸の丘陵地帯を繞るように近畿自動車道舞鶴線が青川町から三田市内を経て篠山市へと通ずる計画路線が発表され、1979(昭和54)年に分布調査を実施されたのち、確認調査、本発掘調査が行われ、近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書⁹⁹⁾が刊行された¹⁰⁰⁾。

このような大きな開発事業以外の開発行為に対し、開発事業者に応じて兵庫県教育委員会、三田市教育委員会、そして調査団等が主体となって調査を行い、記録保存を図り、報告書が刊行された。

原始・古代における三田盆地の歴史は、前掲した各報告書等に詳述されている。そこで本報告書では、掘下ヶ谷遺跡が、縄文時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代を中心として営まれた遺跡であることから、この時代に関係する三田盆地の遺跡を取り上げて、歴史的環境としたい。

なお三田盆地の地形は、概ね南北に貫流する武庫川によって形成された沖積地と東西の丘陵とに大別することができる。ここでは武庫川右岸、左岸の丘陵について「右岸」、「左岸」と記述していきたい。

(1) 縄文時代

縄文時代の三田盆地には、前期を除く、草創期、早期から晩期まで各時期の遺跡が点在している。草創期の遺跡として、左岸に位置する木器荘園内遺跡(三田市木器)¹⁰¹⁾、右岸に位置する下西山遺跡¹⁰²⁾・平方遺跡群(三田市けやき台)¹⁰³⁾からは、有舌尖頭器が出土している。同じく右岸に位置する溝口遺跡(三田市下相野)は、武庫川の支流である相野川の右岸、丘陵上に立地し、石鏃77点、楔形石器6点、削器1点が出土している¹⁰⁴⁾。

早期の遺跡として、左岸に位置する東村(井上)遺跡(三田市小楠)は、丘陵の末端部に立地する。黒ボク層中より楕円型押型土器片とチャート製石鏃が出土した¹⁰⁵⁾。弘遺跡(三田市下青野)は、独立丘陵上に立地する厩館土壘の下層より山形文を施した押型土器が出土した¹⁰⁶⁾。川端遺跡(三田市末野)は、青野川と黒川の合流点付近に開口する小支谷に立地する。ナイフ形石器、異形局部磨製石器、石鏃、石錐、楔形石器、削器などの石器が多数出土した¹⁰⁷⁾。北台遺跡(三田市末西)は、青野川の東岸に広がる洪積台地の先端部に立地し、土壘76基、溝2基などの遺構がある。土壘は大きく円形、長楕円形、馬蹄形、小型ピットに分けられる。遺構からは、縄文土器片、石製品の剥片が出土したが、多くは包含層中から有舌尖頭器、削器、尖頭器、楔形石器、石核などが出土している¹⁰⁸⁾。早期に前後する時期と考えられている。

中期の遺跡には、左岸に位置する桑原遺跡(三田市桑原)がある。この遺跡は武庫川の沖積地に立地し、中期末の北白川C式4期の深鉢口縁が出土している¹⁰⁹⁾。

後期の遺跡は、東・西の丘陵上に点在する。左岸に位置する遺跡として、大蔵遺跡(三田市上横瀬)

は、羽束川中流域の扇状地末端部に立地する。出土した遺物は、縄文土器片7点、石鏃2点、不定形刃器1点である。土器は、後期初頭の中津式、天理K式である。なお隣接する大歳神社の境内から縄文土器片、石鏃、刃器が採集されるところから、境内を中心として縄文遺跡が存在するものと推定される⁶⁶。北台遺跡は、石鏃や後期中葉の北白川上層の磨消縄文を施す鉢の胴部、条痕文系の深鉢口縁部が出土した⁶⁷。川端遺跡は、埋蔵として後期の深鉢形土器が出土している⁶⁸。伊勢貝遺跡（三田市小野）は、黒川の河岸段丘上に立地する。G17より後期の粗製深鉢の口縁部が出土した⁶⁹。

右岸に位置する遺跡として有鼻遺跡（三田市けやき台）は、丘陵上より後期前半の貝殻条痕文を口縁部にもつ深鉢が出土している⁷⁰。内神下井沢遺跡（三田市下井沢）は、平谷川と内神川との合流地点に位置し、川底より、後期の元住吉山I式の深鉢と石刀断片が出土した⁷¹。

晩期の遺跡として、対中遺跡（三田市対中町）は、対中地区と広畑地区に分かれている。広畑地区は武庫川右岸に広がる沖積地の段丘上に立地する。弥生時代の溝などから、晩期終末の凸帯文を有する深鉢の破片8点が出土し、なかには河内産の可能性を含む長原式土器と考えられる土器がある⁷²。堂ノ前遺跡（三田市布木）は、沖積地に立地する。土壌内に深鉢を納めた状態で発見された⁷³。

遺構の時期は明確ではないが、右岸に位置する梶下ヶ谷遺跡で確認された陥穴と同様の陥穴が、平方西遺跡⁷⁴・有鼻遺跡⁷⁵において、共に陥穴1基を検出している。

縄文時代の三田盆地は、東・西の丘陵地帯、武庫川が流れる沖積地に遺跡が点在する。

(2) 飛鳥時代

武庫川の右岸、標高200m前後の丘陵には、北摂ニュータウンの建設に伴い調査された遺跡が点在する。その中には、飛鳥時代に属する集落遺跡・工房跡と推測される遺跡がある。

集落遺跡として、奈良山遺跡（三田市けやき台）は、堅穴建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、土塼4基を検出した。継続して奈良時代には、掘立柱建物跡1棟が検出されている⁷⁶。

工房跡と推測される遺跡には、小鍛冶跡と土器生産跡を示すものがある。下西山遺跡は、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて斜面を計画的に造成した集落である。堅穴建物跡10棟、掘立柱建物跡2棟、遺跡1、土塼、溝を検出し、床面等より鉄滓、鉄製品、砥石、須恵器杯・坏蓋・甕・甗・鉢・鉢、土師器壺等が出土している。小鍛冶を含む工房跡的な集落と想定されている⁷⁷。西山遺跡（三田市けやき台）は、飛鳥時代から平安時代にかけて掘立柱建物跡14棟、土塼、溝を検出した。平坦な丘陵から南西に延びる標高180m前後の南斜面に位置し、2箇所に分かれて遺構群がある。a地区からは、掘立柱建物7棟、柱穴、溝、土塼、焼土面が、b地区からは、掘立柱建物7棟、溝を検出している。遺物には、須恵器杯身・坏蓋・甕、金属器（鉄鏃、鉄鏃）、砥石がある。これらの掘立柱建物群は、飛鳥の時期にはa地区において掘立柱建物2箇所と屋外に1箇所の計3箇所焼土面が確認されている。また、出土遺物の中には須恵器的な技法を用いた土師器や鉄滓といった遺物が含まれている⁷⁸。

須恵器の生産遺跡として平方跡群（三田市けやき台）がある。3基の窯跡、堅穴住居跡4棟、掘立柱建物跡1棟で構成されるもので、6世紀後半を中心に採集を行っている⁷⁹。

(3) 奈良時代

奈良時代に入ると、三田市に隣接する神戸市⁸⁰北區原遺跡（神戸市北區長尾）において、「評」、「五十戸」と記した墨書土器や伎楽面が出土し、律令期の地方機関である有馬評衙の候補地として推定されている⁸¹。そして、右岸の丘陵上に、7世紀末に創建された三田盆地唯一の古代寺院・金心寺跡廃寺（三田市屋敷町）が存在する。この廃寺については主要伽藍等不明であるが、八葉複弁蓋華文軒丸瓦、偏行唐

草文軒平瓦などが出土している⁹⁷⁾。

集落遺跡として、右岸に位置する有鼻遺跡は、丘陵の尾根頂部に立地し、段状遺構3基、土壌を検出した。出土遺物は、須恵器杯である。平安時代前半にまで継続する⁹⁸⁾。西山西遺跡(三田市けやき台)は、丘陵の急斜面に立地する。掘立柱建物跡4棟、柱穴、土壌を検出した。出土遺物は、須恵器坏蓋・碗、土師器甕、鉄斧である⁹⁹⁾。対中遺跡は、掘立柱建物跡3棟、井戸1基、溝、土壌が出土している¹⁰⁰⁾。左岸に位置する南台遺跡(三田市末西)は、丘陵の緩斜面に立地する集落遺跡であり、掘立柱建物跡2棟、溝、土壌5基他が出土した¹⁰¹⁾。

次に、右岸に於いて小鍛冶が行われている。奈良山遺跡(三田市けやき台)では、掘立柱建物跡1棟と神功開寶3枚、椀形鍛冶滓・羽口、鉄製品、砥石が出土した。また下西山遺跡からは、小鍛冶炉と考えられる土壇2基と、その中より椀形鍛冶滓、粒状滓、羽口が出土している¹⁰²⁾。

左岸には、青野川、黒川の流域には多数の須恵器を生産した窯跡が点在し、三田盆地における須恵器生産の一大生産地であった。奈良時代から平安時代下ばに操業した末古窯跡群¹⁰³⁾(落合窯、貝谷窯、井ノ方窯、みどり池窯、地福窯、川端窯、乾窯)他18基以上の存在が確認されている。郡塚1号窯跡は5世紀後半にまで遡り、県下でも最古の窯跡の一つである。この窯跡群は8世紀後半から9世紀初頭に操業のピークを迎える。この後には9世紀末から10世紀初頭の貝谷窯跡が繁栄している¹⁰⁴⁾。

これらの窯業地帯の中に位置する溝ノ尾遺跡(三田市末西)は、台地の先端付近に立地する集落遺跡である。奈良時代の建物跡には、7世紀後半から8世紀にかけて建てられた16棟がある。青野川流域の窯跡に最も近く、窯業と密接に結びついた大きな集落であったと考えられる¹⁰⁵⁾。

律令期にはいと地方の行政機関や古代寺院が繁栄し、拠点となる集落が点在する。そして、武庫川の右岸の丘陵には鍛冶関係の工房跡が、左岸には、須恵器の生産を行う窯業地帯が営まれた。

(4)平安時代

平安時代にはいと、右岸の遺跡として、対中遺跡は、対中地区において平安時代後期から鎌倉時代初期の遺構として掘立柱建物跡9棟、井戸1基、溝23が検出された。同時期の遺物として、「咒」、「利定」、「上」、「上料」、「常口」、「大房」などと墨書された土器36点(須恵器35点、磁器1点)が出土した。また、井戸からは、「南口奈口化」大□□□蘇民□□子孫也□□と書かれた蘇民将来の呪符木簡が出土している。遺跡の性格として、建物跡の規模、呪符木簡を伴う木組井戸、銅製丸柄の出土、また墨書土器等から一般的集落ではなく官衙施設や寺院跡の可能性が示唆される¹⁰⁶⁾。

貴志・下所遺跡(三田市貴志)は「溝」を刻んだ銅印や厚手砲弾形を呈する製塩土器、須恵器坏・坏蓋・高台坏・碗・皿・鉢・片口・壺・甕、土師器坏、碗、緑釉陶器が出土した。貴志遺跡は、「向」、「久安」墨書と記した土器¹⁰⁷⁾が出土している。これらの集落遺跡は、この地域における中核的な役割を担う集落遺跡であろうか。

左岸の遺跡として、乾遺跡(三田市末西)は、青野川左岸に開析された段丘上に立地する。飛鳥時代の後半から平安時代中期にいたる掘立柱建物7棟、土壇5基、溝が出土した。遺物は須恵器坏・碗、土師器甕が出土している¹⁰⁸⁾。溝ノ尾遺跡(三田市末西)は、東地区において、平安時代から鎌倉時代にかけて営まれた掘立柱建物が5棟検出され、須恵器の坏身・碗、土師器小皿が出土している¹⁰⁹⁾。

そして、乾窯跡(三田市末西)は、独立丘陵の南側斜面に立地する。わずかに煙道の上端が残存しているだけであるが、須恵器円面甕、杯身、杯蓋、椀を焼成していた。窯の操業時期は8世紀代と考えられる¹¹⁰⁾。このようにして奈良時代の、8世紀後半から9世紀初頭にかけて、末西、末、末東地区を中心

に、平安時代後半には木戸窯、古城窯、西谷池窯、中池ノ内窯、向上古城窯、寄合谷窯、萩ノ尾窯など相野古窯跡群が窯業生産を開始した¹⁰⁶。

北摂ニュータウン等の建設に伴う発掘調査の結果、武庫川右岸の丘陵上には、6世紀末の飛鳥時代から奈良時代にかけて小鍛冶等が行われ、左岸においては、末地区を中心として奈良時代から平安時代、そして中世の丹波焼きにつながる須恵器生産が展開されていく。武庫川の沖積地には、律令期に地方機関等を推測せしめる拠点集落が営まれた。

註

- (1) 三田市教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ」1983(昭和58)年3月
- (2) 兵庫県教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ」1983(昭和58)年3月
- (3) 兵庫県教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ」1993(平成5)年3月
- (4) 兵庫県教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅳ-右鼻遺跡(1)-」1999(平成11)年3月
- (5) 兵庫県教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅴ」1999(平成11)年3月
- (6) 兵庫県教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅵ-右鼻遺跡(2)-」2000(平成12)年3月刊行予定
- (7) 兵庫県教育委員会「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅶ-下西山遺跡-」2000(平成12)年3月刊行予定
- (8) 兵庫県教育委員会「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)」1987(昭和62)年3月
- (9) 兵庫県教育委員会「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)」1988(昭和63)年3月
- (10) 兵庫県教育委員会「相野古窯跡群-近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(XⅧ)」1992(平成4)年3月
- (11) 兵庫県教育委員会「対中」1988(昭和63)年3月
- (12) 兵庫県教育委員会「桑原遺跡」1986(昭和61)年12月
- (13) 三田市教育委員会「三田市の文化財-発掘調査された遺跡を中心として-」1981(昭和56)年8月
- (14) 高島信之「三田市木器・木器荘園内遺跡出土の有舌尖頭器」『三田考古』第1号 1981(昭和56)年8月
- (15) 高島信之「三田市下井沢・内神下井沢遺跡出土の縄文土器片の再報告」『三田考古』第3号 1982(昭和57)年3月
- (16) 高島信之「三田市上槻瀬、大藪遺跡採集の縄文土器片」『三田考古』第6号 1983(昭和58)年2月
- (17) 三田市教育委員会「武庫川下土地改良区両場整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録'81~'87」1988(昭和63)年
- (18) 三田市教育委員会「埋蔵文化財調査の記録'81~'89」1990(平成2)年3月
- (19) 三田市教育委員会「さんだのいせき」26~36号 1997(平成9)年3月
- (20) (財)古代学協会他「溝口遺跡-北摂工業地区」1986(昭和61)年10月
- (21) 妙見山麓遺跡調査会「宅原遺跡-宮之元地区の調査(1986年)」1988(昭和63)年3月

第2章 調査の結果

第1節 遺構

全面調査時には周囲がすでに開発され、周辺地形・地目が大きく改変されており、調査中にもその変化は進行していった。そこで、この遺跡を理解するために旧地形について観察してみることにする。

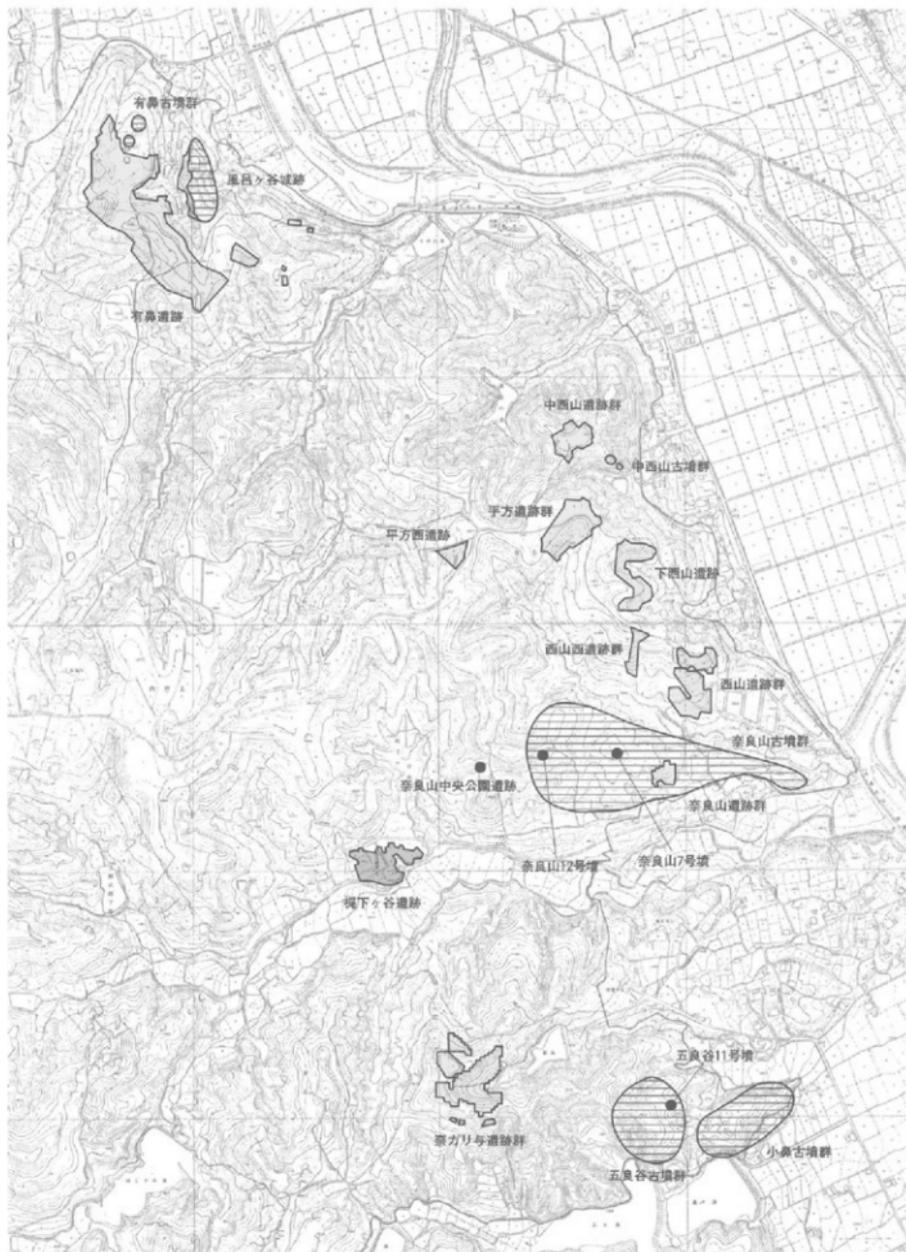
屍下ヶ谷遺跡は南東向きの丘陵端の緩斜面上に存在するが、直下には東に開析するほぼ東西方向の谷がある。この谷は東側の武庫川まではほぼ一直線で、100m前後の幅で約1.4km続く。谷の奥ではさらに小支谷が3方向に分かれている。また、谷の途中でも南北には小支谷がいくつも存在し、複雑な地形となっている。なお、ニュータウン開発前の谷底部分は谷水田となっており、地元では通称「かじがだに」であった。

遺跡はこの谷の中央やや西寄りの北側に存在し、南東にのびる丘陵の端である。すぐ東には同じ方向の小谷が存在している。この丘陵端は緩斜面で、中央部には南東方向に開析する小支谷が入り込んでおり、2つの丘陵に分けられる。東側の丘陵は上面が幅広く、かなり緩やかな傾斜で、台地状を呈している。地目は山林であったが、台地の北端近くを旧道が東西に走っている。小支谷を挟んだ西側の丘陵では、東半部に「伍生織維」工場、南端には住宅が建てられ、西半部は水田として利用されていた。発掘調査時には工場・住宅は更地、水田は荒地となっていた。なお、遺跡南側の大きな谷は埋め立てられ、遺跡に最も近い部分は調整池となっていた。遺跡の西半分はこのように地形の改変を受けていたが、発掘調査により、旧地形をある程度復元することができた。水田部分では、斜面山麓を削って斜面下に盛り出す方法で構築されており、盛り出されているのは主として南側であるが、西端にも少し盛り出されているようであった。「伍生織維」工場部分の造成は、西・北部分を削り、南・南東部分に盛り出す方法が採られたようで、北西端では4m程度削平され、南東端では3m以上盛り出されていた。工場造成前には水田が広がっていたようで、盛り出された部分の下部に水田境の段差が認められた。宅地部分も元は水田であったようで、大きな造成は行われていないが、基礎部分のみ深く設置され、南～東側にかけては少し盛り出されている。調査区の西半部については、水田や工場など後世の改変が行われていたが、概ね旧地形を復元することができた。西半部も東半部と同様、概ね緩やかな傾斜の台地状地形に近く、傾斜が変換する北西端よりも北側には遺構は存在していない。また、台地の主軸は調査区北西隅あたりから南東の最も張り出した部分に向かう方向で、やや弓なりに曲がっている。なお、この台地上にも小規模な谷状地形があり、窪んでいる部分には溝が認められる。いずれにしても、台地の幅は広く、傾斜が緩やかで、南東に向いているという遺跡立地の好条件のところに位置している。

1. 確認調査

A. 第1次確認調査

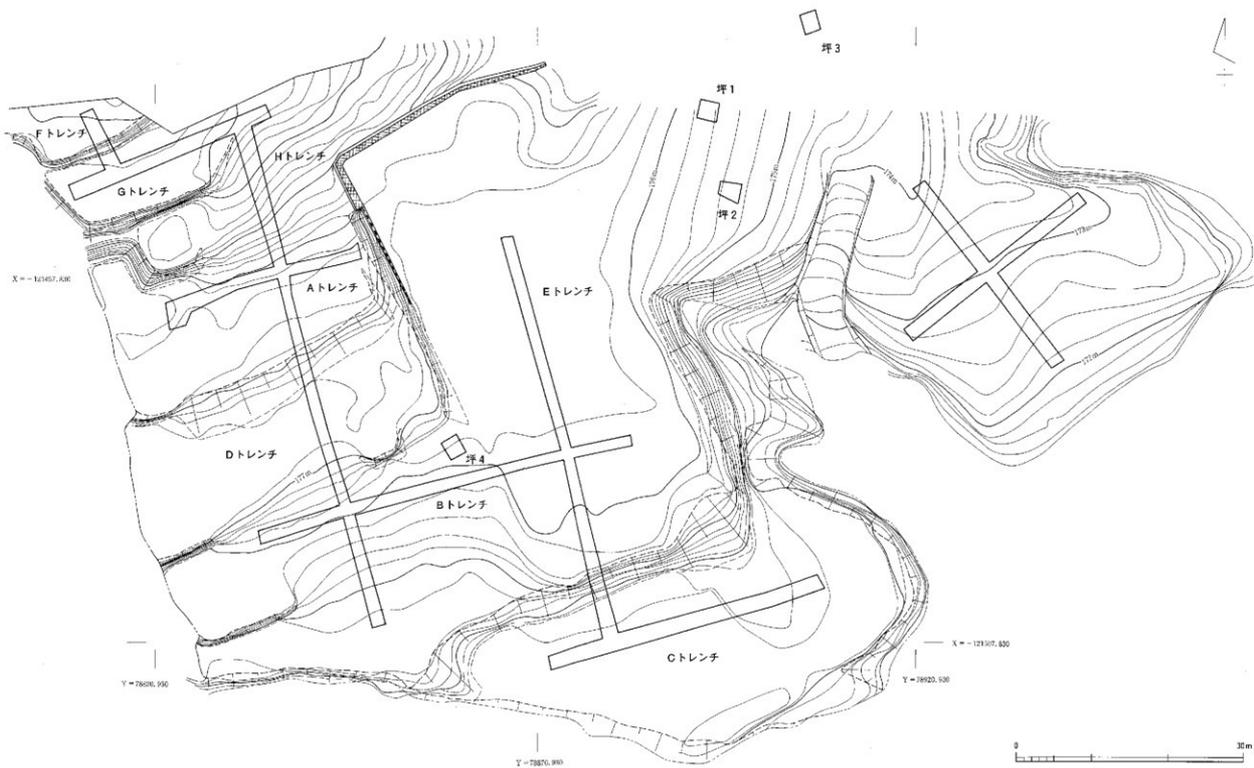
第1次確認調査は昭和53年度にNo107地点として調査を兵庫県教育委員会が実施した。この地点は長楽寺跡として登録されていたが、山腹の急斜面地にドットされており、根拠に乏しく、寺跡の存在は疑わしかった。確認調査の結果、奈良時代の柱穴状遺構を検出したため、約2,400㎡について全面調査が必要と判断された。しかし、さしあたっての工事計画がないことから、調査は将来にゆだねられることとなった。



第1図 北摂ニュータウン内の遺跡 (1/10,000)



第2図 調査前地形と全面調査範囲



第3図 確認トレンチ設定図

B. 第2次確認調査

昭和62年度5～6月に実施した第2次の確認調査は、工事による遺跡破壊の可能性が生じたため実施した。

確認調査対象箇所は全面調査区内では東端部分の約1,500mにあたる。調査は、立地からみた遺跡の中心部分と考えられる箇所（当時）に幅2m、長さ30mのトレンチを十字形に設定して掘削を行った。また、周辺4箇所では2m四方のグリッド（坪）による調査も行った。

その結果、トレンチ部分では、地表からの深さ約45cmの検出面から、建物跡として考えられる柱穴の並びと土壌を検出した。柱穴掘り形は一辺50cm前後の隅丸方形で、深さは50cm前後であった。この掘立柱建物跡は全面調査のS B-2にあたる。確認調査時出土の遺物としては須恵器の甕・杯、土師器などがあるが、細片のため、確認調査時では平安時代のものであるとの認識であった。ほかに縄紋時代中期初頭と考えられる爪形紋土器が出土したが、検出した土壌がこの時期であるとの認識には至っておらず、掘立柱建物跡と同時期の土壌であると判断され、縄紋時代の遺構は検出されなかったと判断された。なお、南西にのびるトレンチの中央部で検出された土壌は全面調査時のS K-12にあたる。また、サヌカイト製の剥片も出土している。

グリッド（坪）による調査部分のうち、坪1では地形の削平が著しく、遺構面まで削平が及んでいた。坪2では、地表面からの深さが50cmの面で遺構を検出した。検出した遺構は円形の土塚で、直径は80cmであった。全面調査時のS K-19にあたる。坪3は旧道路より北の山側に位置し、土層の堆積状況・土壌などが明らかに遺構を検出している場所のものとは異なり、遺物も出土しなかった。坪4は「伍生織維」の工場跡の西側に位置する。地表からの深さ40cmのところに遺構検出面があり、一辺約1mの不整形の上層を検出した。この遺構は全面調査の結果、長さ3m、幅1mの細長い楕円形の窪まり状遺構となった。坪4からの遺物は平安時代の須恵器・土師器が出土している。

第2次確認調査の結果、本遺跡が平安時代（奈良時代）を中心とした集落跡で、一部縄紋時代の遺構の存在も考えられるようになった。遺跡の範囲はグリッド調査の状況からみて、旧道路より南側、等高線の変化から考えて標高172m以上であるとの判断がなされた。また、坪1の状況から、標高176m以上は削平を受けていると考えられた。そのことにより、全面調査の範囲は旧道路より南側で、標高172mから176mの間と決定された。ただし、西側の範囲については「伍生織維」工場跡より東側までは確実であるが、それより西側は等高線を復元して検討した結果、緩傾斜の台地であり、坪4で遺構を検出していることを考えれば、遺跡の範囲はさらに西側に広がると考えられた。そして、確実を期すために「伍生織維」工場跡以西の部分について再度確認調査の必要があると判断された。

C. 第3次確認調査

第3次確認調査は第2次確認調査の結果を受けて、トレンチによる調査を行った。確認調査は、第2次確認調査の結果に基づいて実施した東部の約2,300m部分の全面調査と並行して、昭和62年11月～昭和63年3月の期間内に実施した。

確認調査箇所は、「伍生織維」工場跡地以西の台地部分で、工場跡地とその西横の旧水田地および住宅跡地にあたる。確認調査対象面積は約7,400m²である。

調査は幅2mのトレンチを5本設定し、A～Eトレンチと呼称した。A～Eトレンチの長さはそれぞれ27m、51m、37m、58m、55mであった。

調査の結果、すべてのトレンチで遺構が確認され、褐色の土層中に土器を包含しており、その下層の明褐色～黄褐色の上層に遺構が存在していることが判明した。

A トレンチは西側の東西方向のもので、中央部で溝、東端部で土壌を検出した。この溝は全面調査のSD-2、土壌はSD-3の溜まり部である。

B トレンチは中央部の東西方向のもので、西半部で柱穴を検出した。この柱穴は全面調査のSB-10の一部である。

C トレンチは南部の東西方向のもので、柱穴と溝を検出した。

D トレンチは西側の南北方向のもので、多数の柱穴と土壌を検出した。柱穴は3箇所まで3個が一直線に並んでおり、建物跡の可能性が高いと判断され、全面調査のSB-4～6の一部であった。

E トレンチは東部にある南北方向のもので、工場造成のため北部はかなり削平を受けていたが、南部は盛土がなされており、柱穴の存在が認められた。

遺物を包含している褐色土層は、A・Bトレンチ東半部およびD・Eトレンチ南半部では40cmと厚いが、A～Cトレンチ西半部では非常に薄くなっていた。包含層より出土した遺物には奈良・平安時代の須恵器・土師器と室町時代以降と思われる陶器があるが、遺物量は多くはなかった。

第3次確認調査の結果、確認調査を実施した全面に遺跡が広がっていることが判明し、全面調査が必要であると判断された。一方、Dトレンチの北端で遺構を検出しているため、さらに北側にも遺跡が広がっている可能性があり、遺跡西部の北限についてさらに範囲確定の調査が必要であると判断された。

D. 第4次確認調査

第3次確認調査で判断した部分の全面調査を実施した昭和63年11月に、遺跡西部北限を確定するための確認調査を実施した。

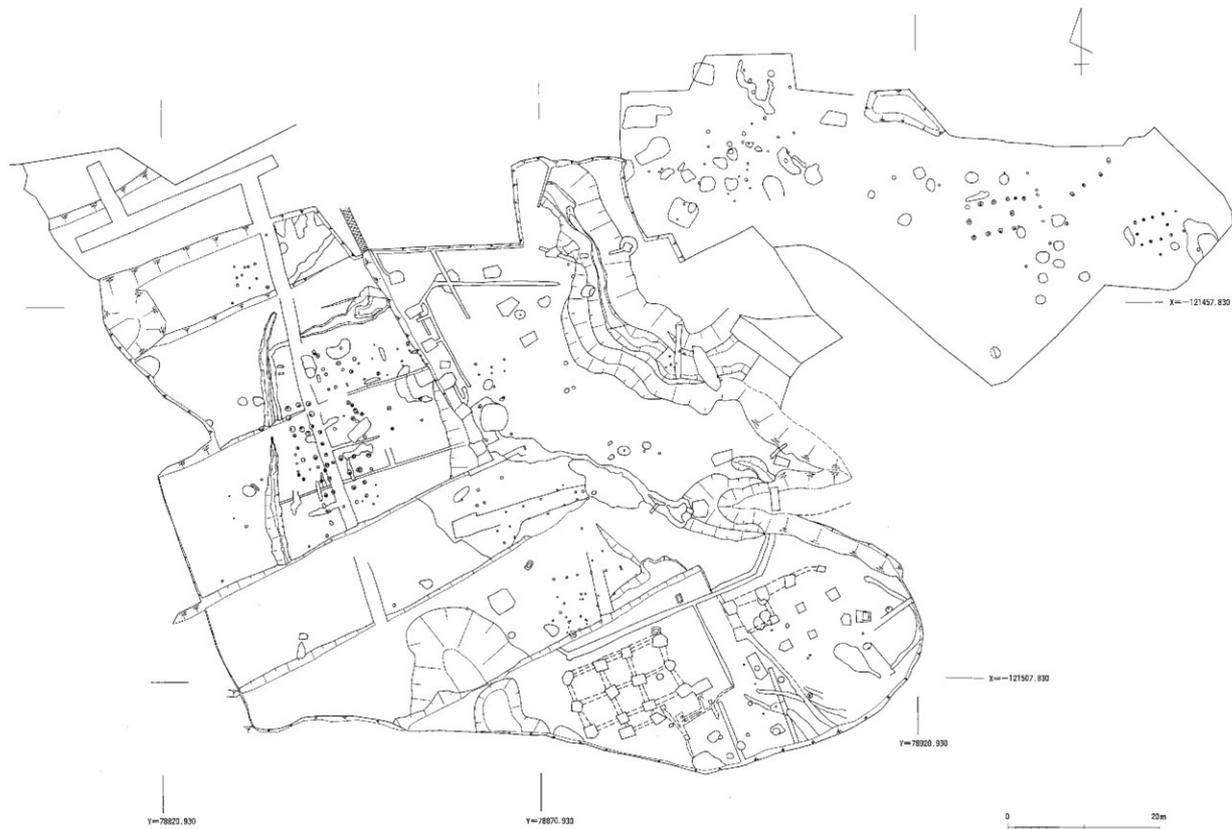
調査はトレンチを3本設定して行った。トレンチは北から順にF～Hトレンチと呼称し、それぞれの長さは7.5m、29m、7.5mで、いずれも幅2mであった。

土層はFトレンチが2面の棚田にまたがっているため、北半と南半では土層が違っていた。北半では上から浅黄色細粒砂の盛土があり、次に旧耕土、旧床土と続き、その下層には山からの自然流入と考えられる浅黄色の粗粒シルト～中粒砂が堆積していた。その下層には全面調査区の遺物包含層にあたる灰黄褐色の旧表土が存在していたが、遺物は全く出土しなかった。その下層は明黄褐色極細粒砂のいわゆる「地山」で、全面調査区の遺構面にあたるが、トレンチ内では遺構は検出されなかった。また、Fトレンチの南半では水田構築による地山の削平が著しく、旧耕土と盛土層しか残っていなかった。

G トレンチは東西方向のトレンチで、上端は西が高く東が低くなっており、西半では上から盛土・旧耕土・地山と続くが、旧表土が認められるのは東半部に限られていた。しかし、遺構・遺物は全く検出されなかった。また、トレンチ中央部東寄りには旧表土を切り込んで旧谷川状と思われる砂礫の地積が認められた。

H トレンチは、Gトレンチと第3次確認調査のDトレンチをつなぐ南北方向のトレンチで、深さ約80cm掘削した。土層はGトレンチ東部と全く同じであった。遺構・遺物は全く検出されなかった。

以上の確認調査結果により、遺跡は北方へは広がっていないことが判明し、昭和63年度の調査により、遺跡のほぼ全体を調査したことになると考えられる。



第4图 遺構全体図

2. 全面調査の概要

A. 検出遺構

遺跡の調査は昭和53年度の確認調査に始まり、第4次確認調査まで実施し、2次にわたる全面調査の結果、各時期にわたる多くの遺構を検出した。遺構検出面はすべて同一面である。

全面調査の面積は合計約8,400㎡で、縄紋時代の陥し穴と考えられる土壌多数、奈良時代の掘立柱建物跡8棟と竪穴住居跡1棟のほか溝・井戸・溝・土壌・柱穴・谷状遺構・橋状遺構を検出した。また、木棺墓もこの時期の可能性がある。他に、平安時代中期の掘立柱建物跡や欄列なども認められた。

縄紋時代の土壌は調査区全域にわたって分布しているが、いくつかのまとまりがあるようである。土壌内には杭穴が存在するものも認められ、埴土などの土壌の残存脂肪についての分析を依頼した。また、土壌の時期を決定する根拠が包含層出土の縄紋土器細片1点のみであったことから、土壌埋土中に含まれていた微細炭化物について、放射性炭素年代測定についても依頼した。

奈良時代の遺構では、調査区中央部の谷部を挟んだ西側には、緩い傾斜面を削ってさらに微傾斜に加丁している部分があり、そこに掘立柱建物跡が「コ」の字形に配置され、その空間部分には鍛冶炉と考えられる長方形の土壌が存在し、掘立柱建物跡・鍛冶炉を「L」字形に囲むように溝が巡っていた。建物の柱穴はその規模に比べて非常に大きいことが特徴である。これら遺構群のすぐ東には井戸があり、そこから谷部へと流れる溝も検出した。谷部では橋状遺構も存在した。谷部の東には竪穴住居跡1棟と掘立柱建物跡2棟が存在している。奈良時代の竪穴住居跡は前代の伝統を残すものとして数少ない例であり、あるいは住居跡とするよりも別の機能を考える方が良いかもしれない。

平安時代中期の遺構では、谷部はこの時代にも存続しており、埋土から多くの土器を検出した。掘立柱建物跡は総柱のもので、柱穴は他の時期の建物に比べて小さいことが特徴である。

B. 土層関係

調査区内の土層関係については、全面調査が多年度に分かれたこともあり、調査区全体を通して横断する形の土層断面図は作成していない。調査区東半部分の昭和62年度全面調査区では、確認調査トレンチが地形に沿った形で設定されており、しかも昭和62年度調査区のほぼ全体を横断しているため、確認調査トレンチの断面図を使用することとし、新たに土層断面図を作成しなかった。また、昭和62年度全面調査区は比較的単純な丘陵地形であるため、大きな土層堆積の変化が認められなかったこと、昭和62年度全面調査区の西半部では、「佐牛横瀬」工場の解体に伴って重機等が走行したために、削平・擾乱された箇所が多く認められたことも新たに土層断面図を作成しなかった理由である。

一方、全面調査区西半部の昭和63年度調査区においても、確認調査トレンチがほぼ地形に沿った形で設定されており、しかも西半部と東半部にそれぞれ南北方向に1本ずつ存在し、全面調査区の南北両端に近い部分までのびている。また、東西方向については、確認調査のBトレンチが全面調査区を横断する形で設定されているが、東端まではのびていない。東端については造成盛土部分にかかる地形の大きな変化が認められたが、下層にある遺跡関係の土層はすでに削平を受けており、表土から遺構面までの高低差は3m以上あり、畦を残して土層を観察する重要度と調査上の手間を秤にかけた結果、調査の進行を優先することとし、土層観察用の畦は残さなかった。ただし、確認調査トレンチでは細かい地形部分まではカバーできていなかったため、谷部や窪んだ部分などについて全面調査時に適宜土層観察用の畦を設定し、記録を残した。

全面調査区東部の土層関係は第6図に示した。北西-南東方向トレンチと北東-南西方向トレンチでは土層関係に変化はなく、北東-南西方向トレンチが等高線に並行であるため、ほぼ水平の堆積状況である。一方、北西-南東方向トレンチでは等高線に直交方向で、ほぼ6%の勾配で、南東傾が低い。堆積土層は、表面から5層に分けられ、第1層の盛土、第2層は昭和53年度の試掘調査盛土、第3層は2.5Y5/2黄褐色の表土、第4層は2.5Y6/4にぶい黄色のシルト質極細粒砂、第5層は10YR6/4にぶい黄褐色のシルト質極細粒砂であり、第6層は遺構ベースである、10YR6/6明黄褐色のシルト質極細粒砂となっている。第6層上面は遺構検出面であるが、本来、遺構が切り込まれている面は第5層上面のようである。ただし、第5層は第6層の土壌化層であり、遺構埋土の最上層がほぼ似た層となっている部分が多いため、遺構を検出するには困難を伴うことから、全面調査時には第6層上面で遺構検出を行った。

調査区西半部の土層関係も第6図に示した。南北方向のDトレンチでは、第1層が客土盛土で、第2層が10YR4/1褐色で極細粒砂の旧耕土、第3層は堆積土で水田構築により削られている部分が多い。10YR7/6明黄褐色の極細粒砂で細泥混じりである。第4層のうち、第4a層が遺物包含層で、7.5YR5/3にぶい褐色のシルト質極細粒砂に1-20cm大の卑円礫を含んでいる。第4b層は遺物を含まないが第4a層とはほぼ同色の層で、10YR6/4にぶい黄褐色の極細粒砂である。第5層は遺構ベース面となる層で、基本的に花崗岩の風化土壌層である。土色には変化があるが、すべてシルト質極細粒砂である。第6-第8層は調査区南端付近にのみ認められる層であり、遺構ベースよりも上層である。第6層は10YR7/3にぶい黄褐色の極細粒砂、第7層は10YR5/4にぶい黄褐色のシルト質極細粒砂、第8層は10YR7/4にぶい黄褐色の極細粒砂である。これらの3層については遺構ベース土の変化部分であるのか、遺構ベース土が削られてここに盛られたものかの判断ができなかった。

Dトレンチと同じく南北方向であるが、「佐牛線維」工場跡地部分のEトレンチでは、厚い造成盛土があり、その下層には旧耕土の第2層、さらにその下層には部分的に遺物包含層の第4a層が存在する。トレンチ南端付近では遺物包含層の上部に水田構築時の盛土である、第16層の7.5GY7/1明緑灰色のシルト質極細粒砂があり、遺物包含層の下層には遺構ベース土が変色した10GY6/1緑灰色のシルト質極細粒砂である、第15層が認められる。

東西方向で最も長いBトレンチでは、西部で客土盛土の第1層があり、その下には第2層の旧耕土、遺構ベース土である第5e層の7.5YR6/8橙色と7.5Y8/1灰白色のシルト質極細粒砂があるが、遺物包含層である第4a層は削平されたと思われる、認められない。トレンチの東部では工場造成盛土の第10層の下層に遺物包含層の第4a層、その下に遺構ベース土が変色した第15層が認められる。なお、トレンチの中央部分では、遺物包含層の下に遺構ベース土の変化部である第11-第14層が認められる。これらの遺構ベース土は花崗岩の風化土壌層である。

東西方向のAトレンチ西半部では、上から第1層の客土盛土、第2層の旧耕土、第5e層の遺構ベース土と続き、遺物包含層は存在しない。一方、東部では、第5層上面が東に低いかたちで斜めになっており、この傾斜が旧地形と思われる。その上層には遺物包含層の第4層と、遺物包含層の下部ないし遺構ベース土の上部と思われる第9層が認められ、その上面も第5層上面とはほぼ同じ傾斜になっている。したがって、第9層の東部上層に認められる第3層と第4層は水田構築時に動かされた盛土と思われる。なお、第9層は10YR6/4にぶい黄褐色のシルト質極細粒砂である。

東西方向のトレンチでは最も南に位置するCトレンチでは、遺構ベース土の上には客土盛土が認められるのみで、その他の土層は認められなかった。

3. 縄紋時代の遺構と遺物

A. 縄紋時代の遺構

以下に記述する土壌は、後述する土器が包含層から出土しているため、縄紋時代と判断しているが、確証はない。ただし、本遺跡から出土した遺物には他に飛鳥・奈良時代の上器しか認められない。

S K-1

調査区東端部に位置し、標高172.2mで、S K-2～10の群とは11mの距離を隔てて単独で存する。

平面形は上面でやや楕円形、下面でも同様で、底面は丸い。上面での規模は長軸1.08m、短軸0.96mを測り、底面は長軸58cm、短軸44cmである。検出面からの深さは50cmで、土壌壁は「V」字形に近い。埋土は壁が崩落した後埋まっていた状況を呈する。地山は10YR7/6明黄褐色のシルト質極細粒砂である。土壌内からは遺物は全く出土していない。

S K-2

調査区東部に位置し、標高は171.7mである。S K-3～10とともに群集している。

平面形は上面で長方形に近く、下面も同様で、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.3m、短軸1mを測り、底面は長軸85cm、短軸60cmである。検出面からの深さは80cmで、土壌壁の幅は15cmで垂直に近い。埋土は第1層が10YR6/6明黄褐色のシルト、第2層が10YR5/6黄褐色でシルト質極細粒砂、第3層は2.5Y8/4淡黄色で極細粒砂～細粒砂、第4層は2.5Y8/3淡黄色でシルト質極細粒砂、第5層は10YR6/4にぶい黄褐色でシルト～極細粒砂、第6層は10YR7/3にぶい黄褐色でシルト質極細粒砂、最下層の第7層は5Y8/3淡黄色のシルト質極細粒砂である。土壌内からは遺物は出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

S K-3

調査区東部に位置し、標高は171.9mである。S K-2・4～10とともに群集している。

平面形は上面で卵形、下面では長方形に近く、底面はやや丸い。上面での規模は長軸1.55m、短軸1.3mを測り、底面は長軸110cm、短軸65cmである。検出面からの深さは80cmで、土壌壁の法の幅は20～40cmで、断面は「U」字形に近い。埋土は第1層が10YR6/4にぶい黄褐色で極細粒砂、第2層が10YR5/4にぶい黄褐色でシルト質極細粒砂、第3層は10YR5/6黄褐色の極細粒砂である。遺物は出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

S K-4

調査区東部に位置し、標高は171.9mである。S K-2・3・5～10とともに群集している。

平面形は上面で長円形、下面で楕円形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.35m、短軸1.25mを測り、底面は長軸70cm、短軸60cmである。検出面からの深さは80cmで、土壌壁の法幅は25～35cmで、一度狭まった後はほぼ垂直に落ちる。埋土は第1層が10YR5/4にぶい黄褐色の極細粒砂で細かい炭化物が混じっている。第2層は10YR6/4にぶい黄褐色のシルト質極細粒砂、第3層は10YR5/6黄褐色の極細粒砂である。底面中央に径15cmの杭穴があり、約5cmの深さである。遺物は出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-5

調査区東部に位置し、標高は172.1mである。SK-2~4・6~10とともに群集している。

平面形は上面で歪な楕円形、下面で矩形を呈し、底面は平坦である。北側に大きく広がる形で、上面での規模は長軸1.8m、短軸1.35mを測り、底面は長軸90cm、短軸70cmである。検出面からの深さは65cmで、土壌壁の法の幅は約10cmで、北側以外は垂直に近い。埋土は第1層が10YR5/4にぶい黄褐色の極細粒砂で微細炭化物を含み、第2層は10YR6/4にぶい黄褐色の極細粒砂、第3層は10YR6/6明黄褐色でシルト質極細粒砂、第4層は2.5Y6/4にぶい黄色でシルト質極細粒砂、第5層は10YR6/4にぶい黄褐色の極細粒砂で、地山は2.5Y6/3にぶい黄色のシルト質極細粒砂である。遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-6

調査区東部に位置し、標高は172.4mである。SK-2~5・7~10とともに群集している。

平面形は上面で円形に近く、下面でやや角張る円形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.6m、短軸1.4mを測り、底面は長軸90cm、短軸60cmである。検出面からの深さは85cmで、土壌壁の法の幅は25cmで垂直に近い。埋土は第1層が2.5Y8/6黄色の極細粒砂～粗粒砂で微細炭化物が点在する。第2層は2.5Y7/4浅黄色のシルト質極細粒砂で微細炭化物が多く含まれる。第3層は2.5Y7/6明黄褐色のシルト質極細粒砂で微細炭化物が少量含まれる。第4層は2.5Y7/8黄色のシルト質極細粒砂で微細炭化物が微量含まれる。土壌内からは遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-7

調査区東部に位置し、標高は172.3mである。SK-2~6・8~10とともに群集している。

平面形は上面で矩形に近く、下面では上面とはやや方向がずれる長方形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.4~1.85m、短軸1.4~1.5mを測り、底面は長軸1.2m、短軸0.8mである。検出面からの深さは75cmで、土壌壁の法幅は25~45cmで、一度狭まった後ほぼ垂直に落ちる。土壌内からは遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

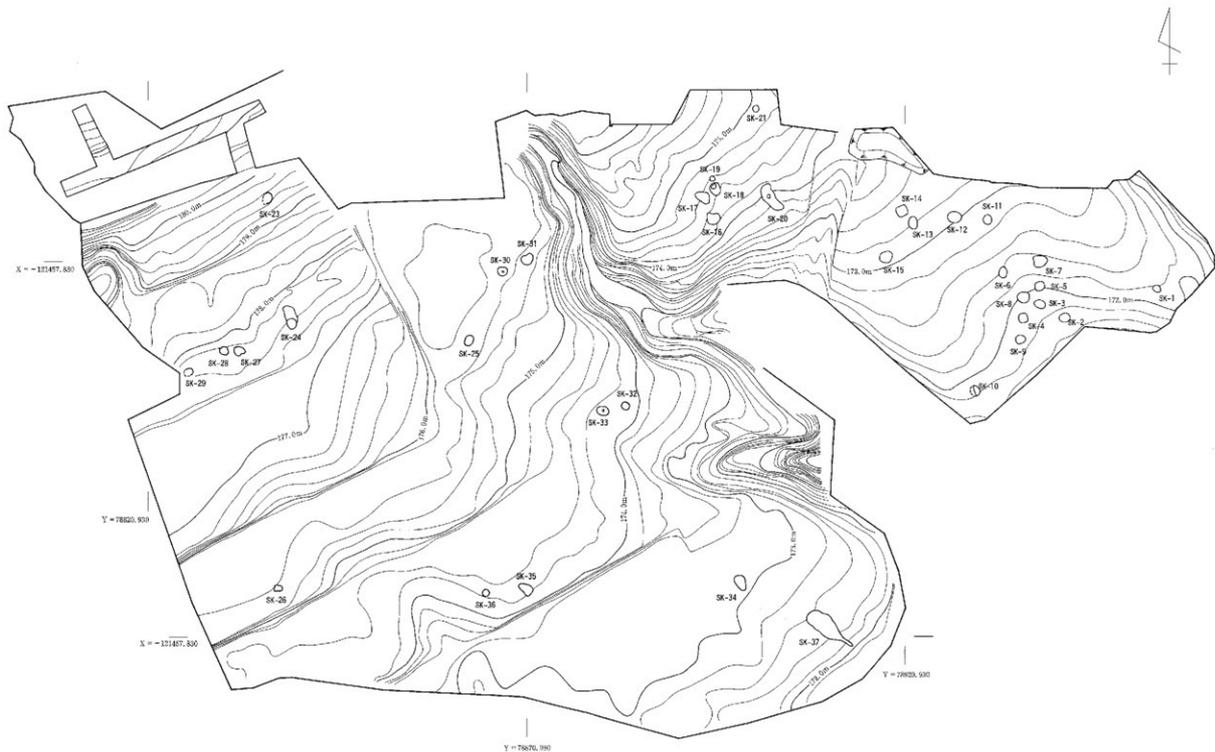
SK-8

調査区東部に位置し、標高は172.0mである。SK-2~7・9・10とともに群集している。

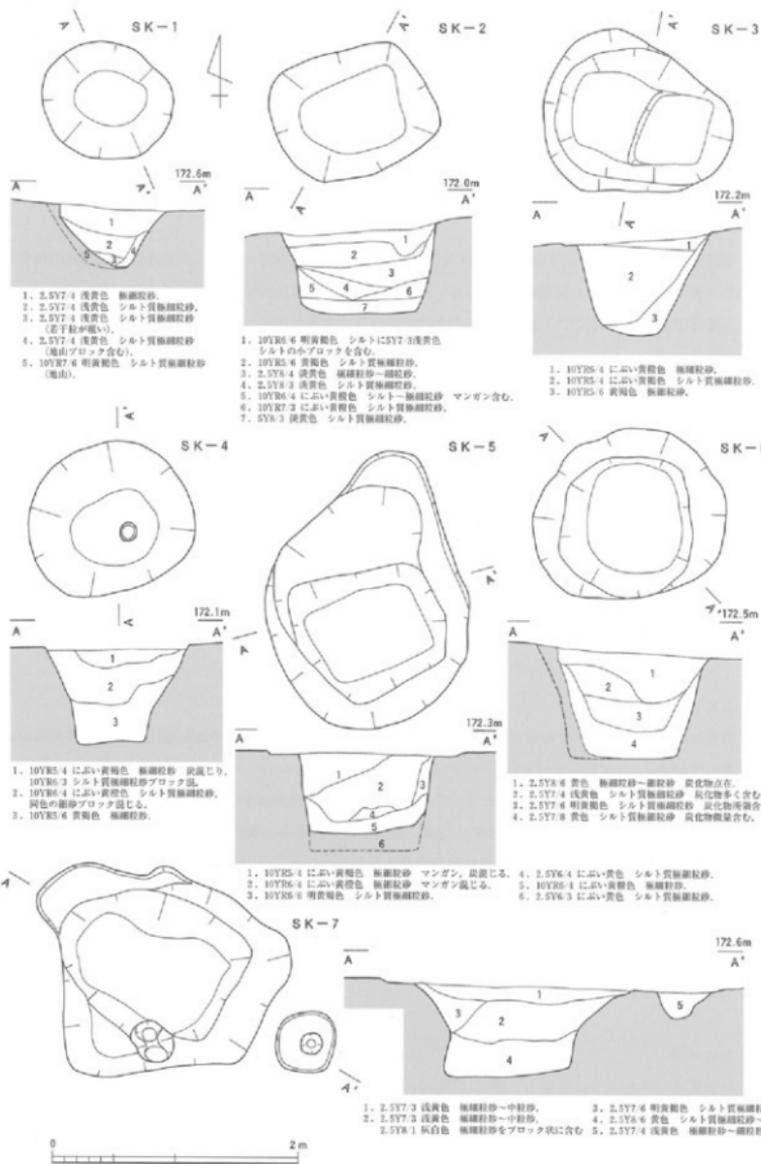
平面形は上面で楕円に近い多角形、下面でも同様の形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.7m、短軸1.35mを測り、底面は長軸1.25m、短軸1mである。検出面からの深さは50cmで、上部が流失しているようである。土壌壁の法の幅は15~20cmで、垂直に近い。埋土第1層は10YR6/4にぶい黄褐色の極細粒砂、第2層が2.5Y6/4にぶい黄色の極細粒砂、第3層は第1層と同色・同質で微細炭化物を含む。底面には径10cm前後の杭穴が歪みながら一列に並ぶ。土壌内から遺物は出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-9

調査区東部に位置し、標高は171.9mである。SK-2~8・10とともに群集している。



第 6 図 縄紋時代遺構全体図



第7図 陥し穴実測図1

平面形は上面で楕円形、下面でも楕円形を呈し、底面は丸い。上面での規模は長軸1.35m、短軸1.15mを測り、底面は長軸90cm、短軸65cmである。検出面からの深さは60cmで、断面は「U」字形に近い。埋土は第1層が10YR6/4にぶい黄橙色でシルト質極細粒砂、第2層が10YR6/6明黄褐色のシルトで微細炭化物を少量含む。第3層は10YR5/6黄褐色でシルト質極細粒砂である。遺物は全く出土していない。

SK-10

調査区東部に位置し、標高は171.85mである。SK-2~9とともに群集しているが、本1層のみSK-9から8m離れている。

平面形は上面で楕円形、下面で三角形に近く、底面は丸い。上面での規模は長軸1.6m、短軸1.3mを測り、底面は長軸1.1m、短軸0.7mである。検出面からの深さは55cmで、断面形は「U」字形に近い。埋土はほぼ水平に堆積している。土壌内からは遺物は全く出土していない。

SK-11

調査区東部の北寄りに位置し、標高は173.0mである。SK-12~15とともにやや疎らであるが、群集している。

平面形は上面で楕円形、下面でも同形を呈し、底面は狭く丸みある。上面での規模は長軸1.35m、短軸1.15mを測り、底面は長軸50cm、短軸35cmである。検出面からの深さは60cmで、上壁壁の法幅は東側のみ約10cmで垂直に近いが、他は55cmあり、斜めになっている。埋土のうち第3層は10YR5/6黄褐色の極細粒砂で微細炭化物を含んでいる。底面に近い部分の南側には枕穴と思われる径10cmの穴が2個存在している。土壌内からは遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-12

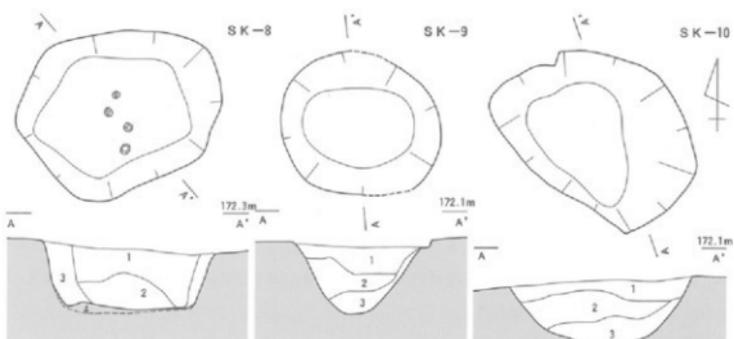
調査区東部の北寄りに位置し、標高は173.2mである。SK-11・13~15とともにやや疎らであるが、群集している。

平面形は上面で楕円形、下面でやや角のある楕円形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.75m、短軸1.4mを測り、底面は長軸1.35m、短軸0.97mである。検出面からの深さは90cmで、土壌壁の法の幅は25cmで、垂直に近い。底付近の壁がオーバーハングしているが、崩落によるものと思われる。埋土は8層に分けられ、壁付近が先で、後に中央部が埋まっていった状況が確認でき、自然堆積である。底面中央に長さ45cm、幅20cmの一方が尖る卵形に近く、深さ5cm程の窪みと、底面南半部に径10cm程の枕穴が3個存在する。土壌内からは遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-13

調査区東部の北寄りに位置し、標高は173.2m前後である。SK-11・12・14・15とともにやや疎らであるが、群集している。

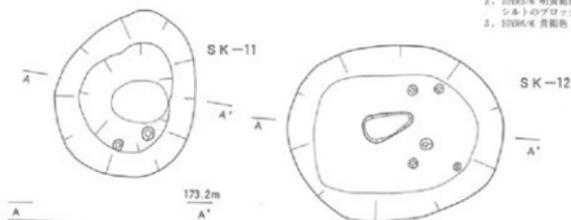
平面形は上面で卵形、下面で楕円形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.65m、短軸1.25mを測り、底面は長軸85cm、短軸70cmである。検出面からの深さは25cmで、断面は皿状を呈する。埋土



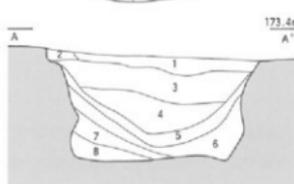
1. 10986/4 にぶい黄褐色 燧石砂 マンガン含む。
2. 2.516/4 にぶい黄褐色 燧石砂 マンガン含む。
3. 10986/4 にぶい黄褐色 燧石砂 炭化物質含む。
4. 2.517/2 灰黄色 シルト質燧石砂。

1. 10986/4 にぶい黄褐色 シルト質燧石砂。
2. 10986/6 明黄褐色 シルト 炭少量含む。
3. 10985/6 黄褐色 シルト質燧石砂。

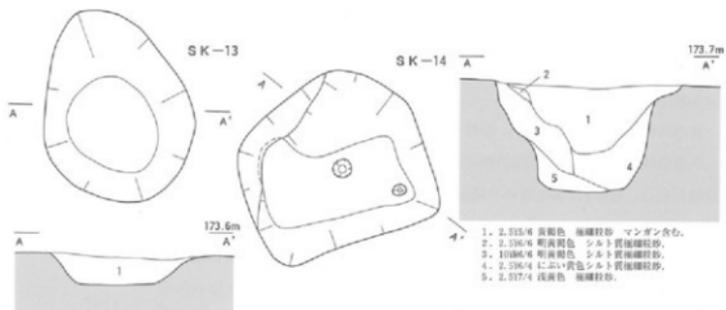
1. 10985/6 黄褐色 シルト。517/3 浅黄色 シルトのプロックが露出する。
2. 10985/6 明黄褐色 シルト質燧石砂。517/3 浅黄色 シルトのプロック露出する。
3. 10986/6 黄褐色 シルト質燧石砂。



1. 2.516/4 にぶい黄褐色 燧石砂。
2. 2.515/4 黄褐色 燧石砂。
3. 10985/6 黄褐色 燧石砂 炭化物質含む。
4. 10985/4 にぶい黄褐色 シルト質燧石砂。
5. 10985/6 黄褐色 燧石砂。



1. 2.516/4 にぶい黄褐色 燧石砂。
2. 2.517/4 浅黄色 燧石砂。
3. 2.515/6 黄褐色 燧石砂。
4. 10986/6 明黄褐色 燧石砂。
5. 2.516/3 にぶい黄褐色 シルト質燧石砂。
6. 10986/4 にぶい黄褐色 燧石砂。
7. 2.517/6 明黄褐色 シルト質燧石砂。
8. 2.517/4 浅黄色 燧石砂。



1. 2.515/6 黄褐色 燧石砂。



第8図 陥し穴実測図2

は2.5Y5/6黄褐色の極細粒砂である。土壌内からは遺物は全く出土していない。

SK-14

調査区東部の北寄りに位置し、標高は173.4mである。SK-11~13・15とともにやや疎らであるが、群集している。

平面形は上面で「辺のみが丸く広がった四角形、下面で長方形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.55m、短軸1.4mを測り、底面は長軸1.2m、短軸0.7mである。検出面からの深さは85cmで、土壌壁の法の幅は北側を除けば20~25cmで、垂直に近い。埋土は土壌の北側が先に崩落し、最後に中央部が自然に埋まった状況が確認できる。底面に径10cmと15cmで深さ約10cmの杭穴が2個あり、大きい方は底の中央近くに位置している。土壌内からは遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-15

調査区東部の北寄りに位置し、標高は173.1mである。SK-11~14とともにやや疎らであるが、群集している。

平面形は上面で卵形であるが、北東部にはステップ状の段があり、その部分を除外すれば円形に近い。下面ではほぼ円形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.7m、短軸1.4mを測り、底面は長軸80cm、短軸70cmである。検出面からの深さは90cmで、土壌壁の法の幅は20~30cmで、垂直に近い。埋土は壁の崩落の後中央部が自然に埋まった状況を示している。底面には径10cm弱の杭穴が3個あり、いずれも深さ10cm前後である。そのうち、底面のほぼ中央に位置する穴の周囲には10cm前後の垂角縁が6個存在し、杭の周囲を裸で固めたような状況である。土壌内からは遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-16

調査区の中央北部に位置し、標高は174.3mである。SK-17~19とともに群集している。

平面形は上面で歪な台形、下面では三角形に近く、底面は丸い。上面での規模は長軸1.9m、短軸1.45mを測り、底面は長軸1m、短軸0.75mである。検出面からの深さは40cmで、断面は皿状を呈する。埋土は壁の崩落の後、中央部が各方向から自然に埋まった状況を示す。遺物は全く出土していない。

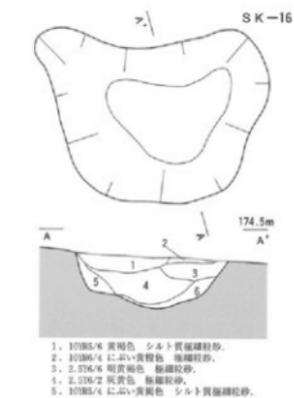
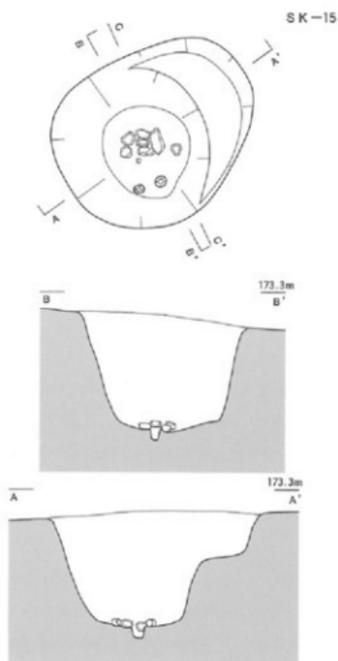
SK-17

調査区の中央北部に位置し、標高は174.6mである。SK-16・18・19とともに群集している。

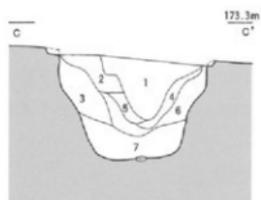
平面形は上面で歪な平行四辺形に近く、下面では三角形に近い。底面は平坦である。上面での規模は長軸2.15m、短軸1.3mを測り、底面は長軸95cm、短軸60cmである。検出面からの深さは70cmであるが、断面では深さ30~40cmのところまでいったん狭まった後、垂直に落ちる。上半部の法幅は30~35cmである。埋土は壁が崩落した後、上部が自然に埋まった状況を示している。遺物は全く出土していない。

土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴の可能性が高いと思われる。

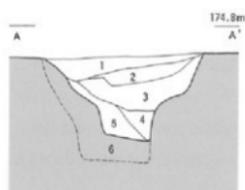
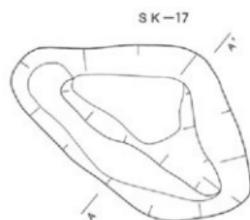
SK-18



1. 10785/4 黄褐色 シルト質極細粒砂。
2. 10786/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。
3. 2.516/4 明黄褐色 極細粒砂。
4. 2.516/2 灰黄色 極細粒砂。
5. 10785/4 にぶい黄褐色 シルト質極細粒砂。



1. 2.515/4 黄褐色 極細粒砂 マンガン含む。
2. 2.516/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。
3. 2.517/4 明黄褐色 極細粒砂。
4. 10785/4 黄褐色 極細粒砂。
5. 10786/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。
6. 10786/4 にぶい黄褐色 シルト質極細粒砂。
7. 10786/4 明黄褐色 極細粒砂。



1. 10785/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。
2. 5184/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。
3. 2.5184/4 褐色 極細粒砂。
4. 10785/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。
5. 10786/4 にぶい黄褐色 シルト質極細粒砂。
6. 2.516/4 にぶい黄褐色 極細粒砂。



第9図 陥し穴実測図3

調査区の中央北部に位置し、標高は174.5m前後である。SK-16・17・19とともに群集している。

平面形は上面で卵形に近く、下面で円形を呈し、底面は丸い。上面での規模は長軸1.7m、短軸1.4mを測り、底面は径65cmである。検出面からの深さは60cmで、土壌壁の法幅は、南東側以外は20cm程度でやや斜めであるが、南東側はかなり緩い傾斜となっている。埋土は4層に分けられ、斜面上側から堆積した状況を示している。土壌内からは遺物は全く出土していない。

SK-19

調査区の中央北部に位置し、標高は174.6mである。SK-16~18とともに群集している。

平面形は上面でほぼ円形、下面でも円形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸70cm、短軸65cmと小規模で、底面は長軸38cm、短軸34cmである。検出面からの深さは15cmで、土壌壁の法の幅は10~20cmで、斜めに落ちる。土壌内からは遺物は全く出土していない。

SK-20

調査区中央北部に位置し、標高は173.7~174.2mである。SK-16~19の群の約5m東に位置する。

平面形は上面が途中で折れ曲がった長方形、下面でも同じ形で、底面は丸みをもつ。上面での規模は長軸4.1m、短軸1.65mを測り、底面は長軸3.5m、短軸0.8mである。検出面からの深さは25cmで、断面は皿状を呈する。埋土は基本的に北東側から自然に埋まっていった状況を示している。土壌内からは遺物は全く出土していない。

SK-21

調査区の中央北部に位置し、標高は174.9mである。SK-16~19の群の約10m北に位置している。

平面形は上面で楕円形、下面でも同形を呈し、底面は平坦に近い。上面での規模は長軸85cm、短軸75cmと小さく、底面は長軸75cm、短軸55cmである。検出面からの深さは20cmで、土壌壁は垂直に落ちる。土壌内からは遺物は全く出土していない。

SK-23

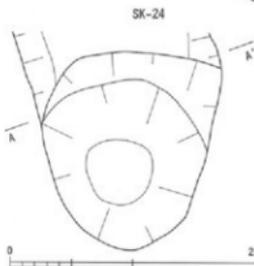
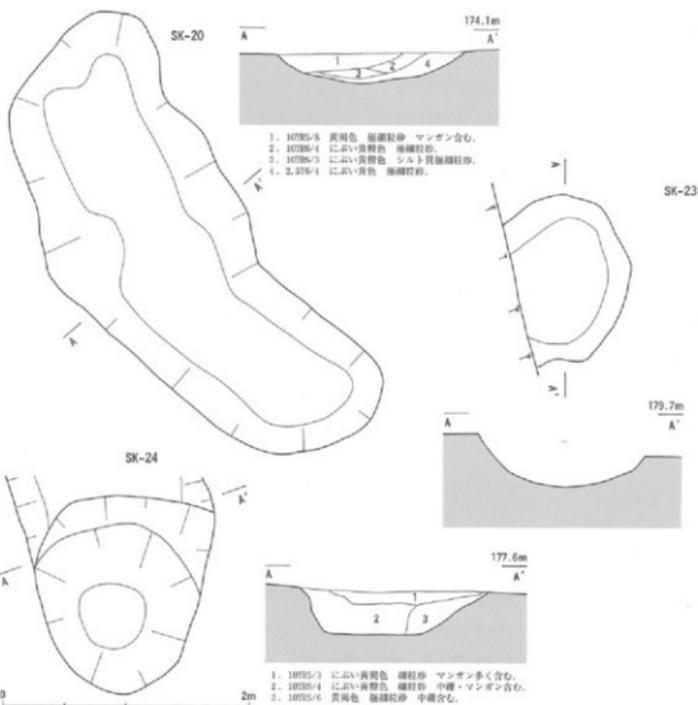
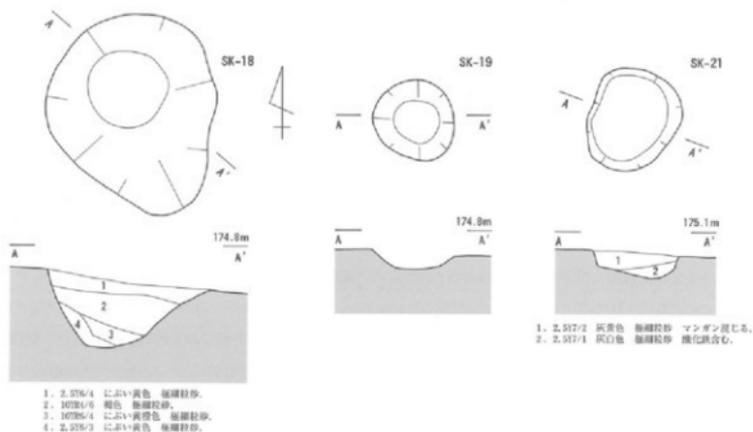
調査区西部北端最高所に位置し、標高179.5mである。SK-24・27~29の群の約14m北に位置する。

西端が確認調査トレンチにかかって失われているが、平面形は上面で歪な楕円形、下面でもほぼ同じ形を呈し、底面はやや丸い。上面での規模は長軸1.4m、短軸0.95m以上を測り、底面は長軸1.05m、短軸0.75m以上である。検出面からの深さは約40cmで、土壌壁の法の幅は15~20cmで、断面は皿状を呈する。土壌内からは平安時代の須恵器が出土している。

SK-24

調査区北西部に位置し、標高は177.4~177.7mである。SK-27~29と群集し、東端に位置している。

平面形は上面で一部が角張る楕円形、下面ではほぼ円形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.6m、短軸1.2mを測り、底面は径55cmである。検出面からの深さは105cmで、土壌壁の法の幅は30~70cmで、斜めに落ちる。土壌内からは遺物は全く出土していない。



第10図 陥し穴実測図4

SK-25

調査区中央北寄りに位置し、標高は175.7mである。SK-30・31の約9m南に位置する。

平面形は上・下面とも楕円形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.5m、短軸1.05mを測り、底面は長軸1.4m、短軸0.85mである。検出面からの深さは70cmで、土壌壁の法幅は5～10cmで垂直に近く、東側でオーバーハングする部分がある。埋土の第2・3層に微細炭化物を含んでおり、他の陥し穴と同じ堆積状況も示す。土壌内からは遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-26

調査区南西端に位置し、標高は175.6mである。周囲に土壌は無く、最も近いSK-36からも27m隔てている。

平面形は上・下面ともで長方形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.05m、短軸0.7mを測り、底面は長軸85cm、短軸50cmである。検出面からの深さは約30cmで、土壌壁の法の幅は5～10cmで、垂直に近い。埋土は西側から自然に覆まっていった状況を示す。遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、飛鳥・奈良時代の墓の可能性も残している。

SK-27

調査区北西部に位置し、標高は177.7mである。SK-24・28・29とともに群集し、中央に位置する。

平面形は上・下面ともに歪な楕円形を呈し、底面はやや丸い。上面での規模は長軸1.4m、短軸1.15mを測り、底面は長軸1.15m、短軸0.95mである。検出面からの深さは40cmで、土壌壁の法の幅は5～15cmで、垂直に近い。埋土は3層に分けられるが、ほぼ水平に堆積している。土壌内からは遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴の可能性を残している。

SK-28

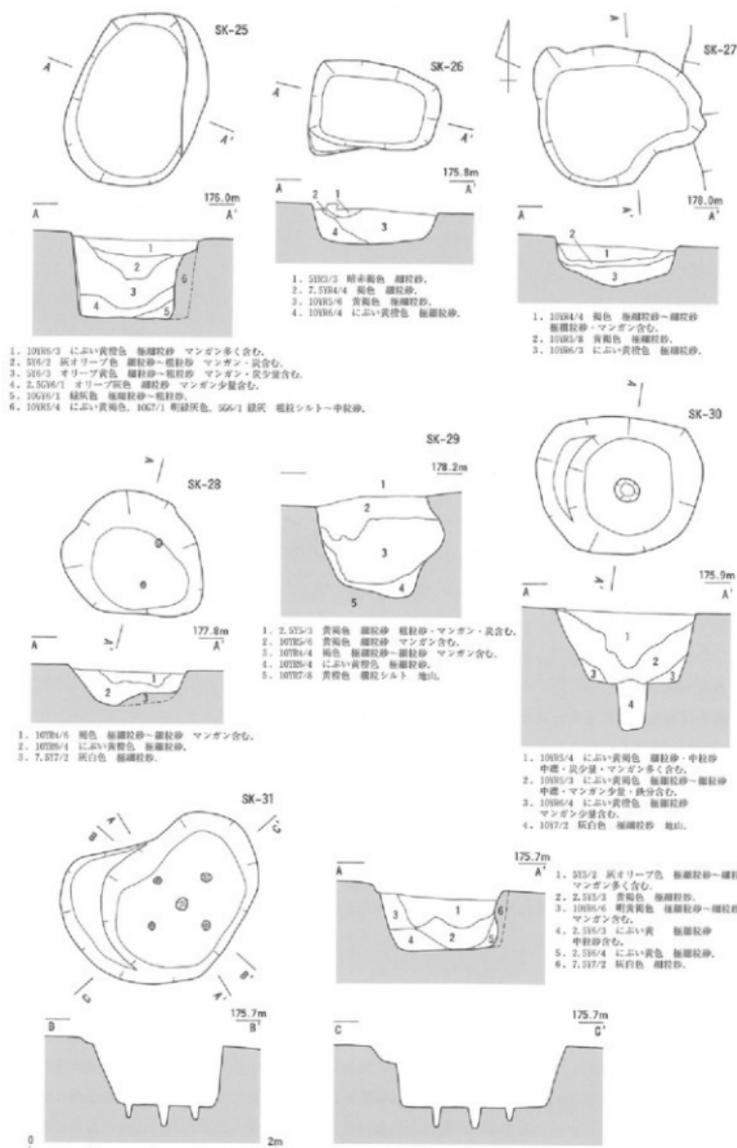
調査区北西部に位置し、標高は177.6mである。SK-24・27・29とともに群集している。

平面形は上面で歪な楕円形、下面で卵形を呈し、底面はやや丸い。上面での規模は長軸1.2m、短軸1.05mを測り、底面は長軸85cm、短軸65cmである。検出面からの深さは35cmで、土壌壁の法の幅は5～30cmで、南側の一部を除いて傾斜角度がある。杭穴が底面に2個存在している。どちらも径5cm程度である。土壌内からは遺物は全く出土していない。

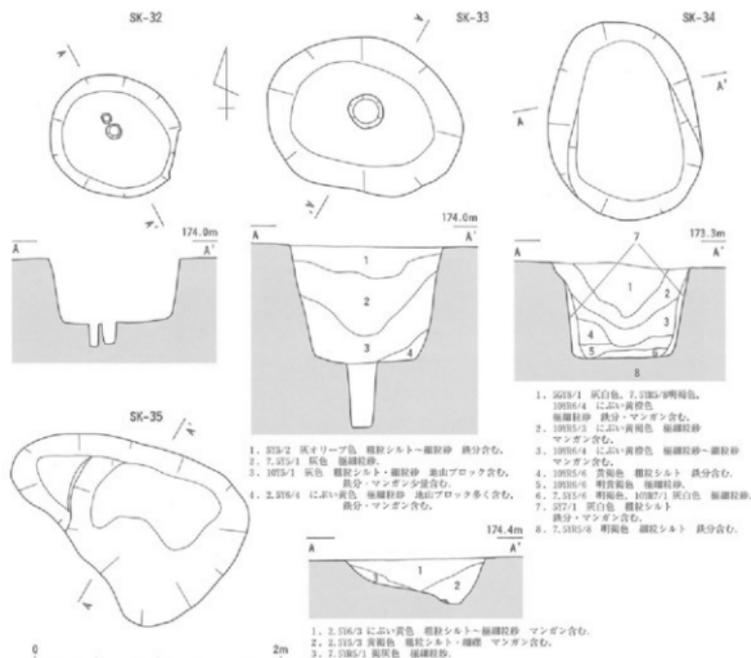
SK-29

調査区北西部に位置し、標高は177.7mである。SK-24・27・28とともに群集し、西端に位置する。

土壌の大半が調査区外になり、事情により全掘できなかった。平面形は上面で円に近い形と思われる。底面はやや丸い。上面での規模は径90cm程度と思われる。検出面からの深さは85cmで、土壌壁の法幅は10～25cmで、垂直に近い。一部、壁が崩れてオーバーハングしている箇所がある。埋土の第1層に微細炭化物を含む。土壌内からは遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。



第11図 陥し穴実測図5



第12図 陥し穴実測図 6

SK-30

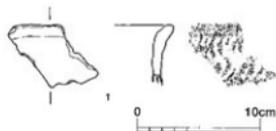
調査区中央北部にSK-31とともに位置し、標高は175.7mである。

平面形は上面で円形に近く、西側の1段下がったところに三日月形の平坦部がある。下面はやや角張る円形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.35m、短軸1.15mを測り、底面は長軸80cm、短軸70cmである。検出面からの深さは75cmで、土壌壁の法幅は15cmで、垂直に近い。埋土は壁の崩落の後一気に埋まった状況で、第1層に微細炭化物を含む。底面中央に深さ30cm、径20cmの穴が1個存在する。枕状のものを立てていたと考えられる。土壌内からは遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-31

調査区中央北部にSK-30とともに位置し、標高は175.5mである。

平面形は上面で卵形に近いが、西側にステップ状の平坦部がある。下面はやや角張るが、楕円形に近い。底は平坦である。上面での規模は長軸1.45m、短軸1mを測り、底面は長軸1.2m、短軸0.8mである。検出面からの深さは80cmで、土壌壁の法幅は5~20cmで、垂直に近い。埋土は壁が崩落した後、中央部が埋まっていた状況を示す。底面には5個の枕穴が十字に並んで存在し、中央のものは径10cm、深さ16cm、他は径5~8cmで、深さは6~13cmである。遺物は全く出土していない。土壌の形状、深さ



第13図 包含層出土縄紋土器

底面は長軸90cm、短軸75cmである。検出面からの深さは60cmで、土壁の法の幅は10cmで、垂直に近い。底面に杭穴が2個存在し、うち、中央のものは径12cm、深さ17cm、もう1個は径8cm、深さ20cmである。土壁内からは遺物は全く出土していない。土壁の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-33

調査区中央に位置し、標高は174.0mである。SK-32とともに2基存在している。

平面形は上・下面ともに楕円形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.6m、短軸1.3mを測り、底面は長軸1.15m、短軸0.8mである。検出面からの深さは100cmで、土壁の法の幅は20cmで、垂直に近い。底面中央に径27cm、深さ57cmの穴が存在する。土壁内からは遺物は全く出土していない。土壁の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-34

調査区中央南部に位置し、標高は173.1mである。単独で存在している。

平面形は上面で楕円形、下面でやや角張る楕円形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.65m、短軸1.25mを測り、底面は長軸1.3m、短軸0.85mである。検出面からの深さは80cmで、土壁の法の幅は15cmで、垂直に近い。埋土は壁が崩落した後、中央が埋まっていった状況を呈する。土壁内からは遺物は全く出土していない。土壁の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-35

調査区中央部南西寄りに位置し、標高は174.2mである。SK-36とともに2基存在している。

平面形は上面で三角形に近く、下面は歪な長方形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸2m、短軸1.45mを測り、底面は長軸1m、短軸0.6mである。検出面からの深さは45cmで、土壁の法の幅は20~70cmで、北面のみ垂直に近い。土壁内からは遺物は全く出土していない。

B. 縄紋時代の遺物

第13図に示した土器が昭和62年度の確認調査時に包含層から出土している。爪形紋を施した深鉢の破片で、外反する口縁部である。縄紋時代前期末~中期初頭である。

・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

SK-32

調査区中央に位置し、標高は174.0mである。SK-33とともに2基存在している。

平面形は上・下面ともほぼ円形を呈し、底面は平坦である。上面での規模は長軸1.1m、短軸0.95mを測り、

底面は長軸90cm、短軸75cmである。検出面からの深さは60cmで、土壁の法の幅は10cmで、垂直に近い。底面に杭穴が2個存在し、うち、中央のものは径12cm、深さ17cm、もう1個は径8cm、深さ20cmである。土壁内からは遺物は全く出土していない。土壁の形状、深さ・埋土の種類などから、陥し穴と思われる。

4. 奈良時代以降

A. 全体の概要

検出した遺構のうち、縄紋時代以外では奈良時代と平安時代のものがある。

奈良時代の遺構は種類・量ともに最も多く検出した。検出した遺構には掘立柱建物跡8棟と竪穴住居跡1棟のほか溝・井戸・溝・土壇・柱穴・谷状遺構・橋状遺構などがある。平安時代のものでは、中期と考えられる掘立柱建物跡や櫓など認められた。また、谷状遺構は浅くなりながらもこの時期まで存続している。なお、時期が確定できないが、木棺墓を4基検出している。

まず、奈良時代の遺構であるが、調査区中央部に谷状遺構があり、その東側に掘立柱建物跡が2棟、竪穴住居跡が1棟存在している。掘立柱建物跡SB-1・2はそれぞれ約15mの距離を置いて、調査区東端近くに位置している。棟方向はどちらも東西に近いが、若干異なっている。ともに東側に塼を伴っており、雨落ち溝も認められる。周辺には柱穴も認められたが、建物跡等として組み合うものは認められなかった。

竪穴住居跡は谷部のすぐ東側に位置し、方形のもので、深さは約40cm遺存していた。主柱穴は2本認められた。この住居跡には大きな竈が付設されており、内法は幅50cm、奥行70cm程度の楕円径を呈し、煙出し部も約60cm遺存しており、住居跡の外側に約50cm突出していた。この竈の焚口部東側には完形の須恵器杯があり、その時期から奈良時代の住居跡であることが判断できる。また、床面より鉄釘約20本がままとって出上している。奈良時代の竪穴住居跡は前代の伝統を残すものとして数少ない例であり、あるいは住居跡とするよりも別の機能を考える方が良いかもしれない。

調査区中央部の谷状遺構を挟んだ西側には、掘立柱建物跡群が存在し、方向をほぼそろえた6棟が規則正しく「コ」字形に並んでいる。建物群の周辺は地面の傾斜がかなり緩くなっており、緩傾斜面を削ってさらに微傾斜に加工していると思われる。また、建物群の北側および西側を「L」字形に囲むように2条の溝が開削され、2重に取り巻いているようにも見える。外側のSD-2は建物群のさらに北方から弧状に近い形で建物群の北-西側を走る。内側のSD-3は建物群の北側から西側を「L」字形に存在し、建物群の方向とほぼ合致する。SD-3は建物群の西側では削平のためか消失しているが、SD-2は深く刻まれ、しっかりとした形状で残存している。これらの溝は2条でその機能を果たしていると考えるのが妥当であろう。建物群の方向は東西・南北方向に近く、重複が認められることから、5棟が同時に建てていたと考えられる。SB-4・5は南北に一列に並んで存在する2間四方の側柱建物跡で、ほぼ同規模である。SB-6・7は東西に並び、重複存在する側柱建物跡で、どちらも2間四方である。どちらの建物に伴うかの決定はしがないが、東・南側に「L」字形の塼が存在する。SB-6・7はSB-4・5の並びからは東側にずれて存在している。SB-8はSB-6・7の南側に存在し、SB-6の並びに位置する。内容は見えないが、2間×1間以上の規模である。SB-9はSB-4の北東部に位置する東西方向に細長い建物跡で、3間×1間の規模である。北側に塼を伴っている。さて、これらの建物群に囲まれた部分には3.7×1.6m程度の長方形土壇が存在している。底付近には炭が充填し、底は赤く焼けている。この遺構の中から鉄滓1点が出土したこと、底が焼けていたことから、鍛冶炉の底部分であると判断した。主軸方向は建物跡群とは方向を異にしているが、溝3からも鉄滓が出土していることから、溝3と同時期の奈良時代と推定でき、建物跡群と同時期と思われる。

これらの一連の遺構はすべて関連性があると思われ、建物の柱穴がその規模に較べて非常に大きいため倉庫と考えられること、鍛冶炉が存在すること、周囲に溝をめぐるせていることから、鍛冶関係の生



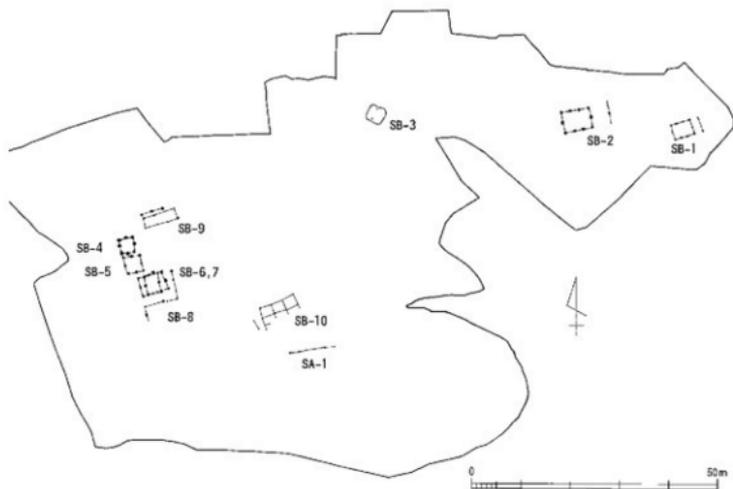
第14図 奈良時代以降の遺構全体図

産遺構群として捉えられる。これら遺構群のすぐ東には井戸があり、そこから谷部へと流れる溝も検出した。井戸S E-1は素掘り、上端の直径は約3.6m、深さ約2.6mを測り、平面形は兩九方形に近い。中層から奈良時代の須恵器が出土した。この井戸は鍛冶作業用の水を確保するための施設と考えられる。谷状遺構は調査区中央部で、昭和62年度調査区との境付近に存在し、北西～南東方向にのびる幅7.5～12.5mの規模である。時期的には大きく奈良時代と平安時代中期の2時期に分かれ、奈良時代の谷底から横状遺構を検出した。谷状遺構の検出面から奈良時代の谷底までの深さは約3.0mであった。

平安時代中期の遺構では、掘立柱建物跡と欄列などがある。掘立柱建物跡S B-10は3間×2間以上の総柱建物跡であり、単独で存在している。西側には塀が認められる。柱穴は他の建物の規模に比べて小さいことが特徴である。柱穴から遺物が全く出土しなかったが、すぐ近くの柱穴から平安時代中期の土器が出土していることと、柱穴が小さいことから、平安時代の建物跡である可能性が高いと思われる。欄列S A-1は調査区中央南部の台地上稜線部分に位置する、5間の欄列もしくは塀跡であり、S B-10の南5mの位置であるが、方向がずれているため単独で存在している観がある。

谷部はこの時代にも存続しており、埋土から多くの土器を検出した。検出面から平安時代の谷底までの深さは約2.3mを測る。

本館墓は調査区南部で4基検出した。間隔をやや広く取っていたり、主軸方向がばらついていたたりするが、墓壇の規模は長軸が1.2m前後、短軸が0.8mとほぼ平均しており、すべて木棺の痕跡が残っていた。いずれも上部を削平されていたが、深いものでは約40cm残っていた。内部から土器が全く出土していないため、所属時期の確定はできない。また、その他に、遺物が出土しなかった溝・土塀・柱穴があるが、この遺跡の時期が縄紋時代と奈良時代および平安時代中期の3時期に限られるため、そのいずれかの所産と考えて差し支えないものと思われる。強いて判断すれば、生活遺構が豊富な奈良時代と考えておくのが妥当であろう。



第15図 掘立柱建物跡等配置概略図

B. 竪穴住居跡 (SB-3)

調査区中央北部の谷状遺構東側近くに位置し、標高は174.2~174.8mの間の緩斜面である。

方形の竪穴住居跡で、北東隅近くに竈が設置されている。竈が存在する壁を北壁として記述する。

竪穴住居跡は東西に長く、北壁で3.32m、南壁で3.0m、中央部で3.48mの規模である。南北方向では、西壁で3.02m、東壁では2.74mと西側が28cm長くなっている。なお、中央部では3.06mである。緩斜面に立地しているため、検出面からの深さにはばらつきがある。最も深いのは北西隅部分で、54cm遺存していた。一方、南東隅は斜面下側にあたるため、9cmの深さしか残っていなかった。床面は平坦ではほぼ水平であるが、地形に左右され、北西隅と南東隅の高低差は19cm認められる。

この竪穴住居跡の埋土は、壁近くが埋まった後中央部にレンズ状に埋土が堆積しており、竪穴住居跡の通常の埋まり方と違いはない。主として斜面上側から堆積しているが、最終的に埋まったのは第1層で、5Y8/4淡黄色の粗粒シルト~極細粒砂である。第2層は10YR5/6黄褐色の極細粒砂~細粒砂で細礫を含んでいる。これらは東西・南北方向の畦で共通している。それ以下の層は、南北方向の畦では第3層が住居跡南部にのみ認められ、10YR7/6明黄褐色の極細粒砂~細粒砂である。第4~第6層は斜面山側である北部にのみ認められ、第4層は10YR7/4にぶい黄褐色の粗粒シルト~細粒砂、第5層は2.5Y7/4淡黄色の極細粒砂である。第6層は2.5Y8/6黄色の極細粒砂~細粒砂である。第7層は地山で、2.5Y8/8黄色の極細粒砂である。東西方向の畦では、第3~第5層が斜面山側にのみ堆積し、第3層は10YR6/4にぶい黄褐色の極細粒砂~細粒砂、第4層は2.5Y7/6明黄褐色の極細粒砂、第5層は10YR7/8黄褐色の粗粒シルト~極細粒砂である。第6・7層は斜面下側にのみ堆積しており、第6層が2.5Y7/2灰黄色のシルト質極細粒砂、第7層は5Y8/2灰白色のシルト質極細粒砂となっている。

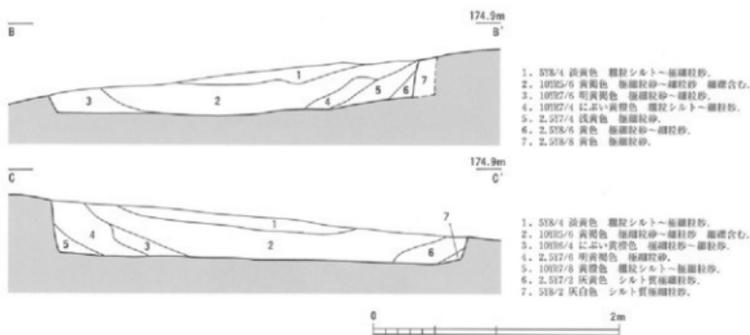
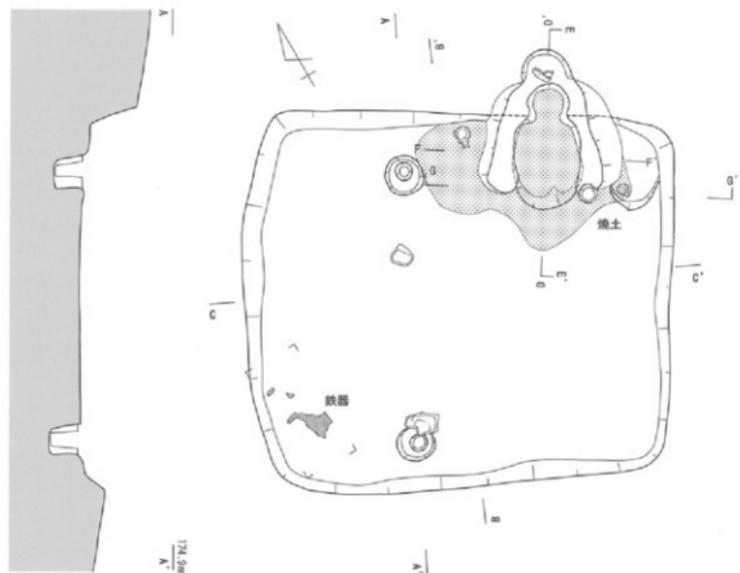
床面からは2本の柱穴を検出した。住居跡の中心よりも西側に約40cm偏った位置であるが、ほかに柱穴が認められなかったことから、主柱穴はこの2本と考えられる。また、柱の位置はかなり壁際に寄っていることが特徴である。柱芯間は2.25mで、柱穴掘り形は径30cm程度の円形で、柱痕は径15cm程度の円形である。柱痕の深さは27cm程度で、掘り形の底もそれより1~2cm程度深いに過ぎない。

住居跡南西隅近くの床面の約5cm上から、鉄釘約20本が60×25cmの範囲にまとまった状態で検出した。特に、その大半は錆着した状態で18×25cmの範囲から出土している。釘はすべて太さ5mm程度の角釘で、長さ5~6cm程度のものであった。

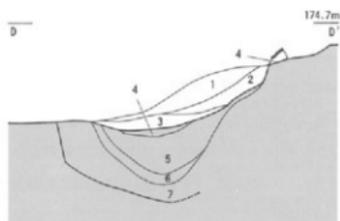
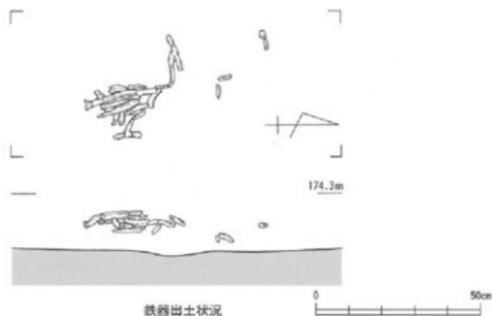
なお、床面上からはほかに石が2点出土し、そのうちの1点は南側主柱穴の掘り形上で検出した。

前述のように、この住居跡には大きな竈が付設されており、住居内の北東隅に近い部分の北壁に存在する。下層では北東隅から約30cmしか離れていない。竈内部および竈の周囲には焼土が広い範囲に散らばっており、特に、焚口部の前と西側袖の外側に広く認められた。竈本体は遺存状況がかなり良好で、上部こそ残っていなかったが、袖部分は燃焼部からの高さが30cm程度もあり、燃焼部から一度ずまわって、煙道部が存在する状況がよくわかる。燃焼部は長さ約75cm、最大幅56cmの楕円形を呈し、煙道部は径30cm前後の円形で、深さは13cm程度残っていた。煙道部が削平された面には筒状の土器の破片が遺存していた。煙突の可能性もある。煙道部分は住居跡より外側に56cm張り出している。竈の外側での規模は袖部で最大幅1.16m、燃焼部端から煙道部外側までの長さは1.3mを測る。この規模は本住居跡の規模に較べると異常とも思えるほど大きな竈である。竈の東側袖の南端から完形の須恵器杯が正位置で出土し、その東側では袖下層で土師器の破片、西側袖下から西に約15cmの位置で土師器の破片をそれぞれ検出した。それらの土器の時期から奈良時代の住居跡であることが判断できる。

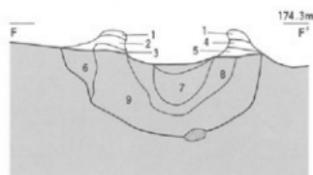
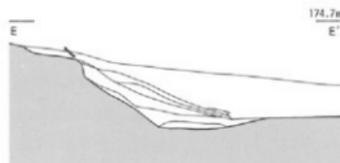
竈の下層には長径1.55m、短径1.2m、最深で97cmの楕円形の土塊が存在し、竈の位置と合致するかたちで重複していた。この土塊は陥し穴の可能性もあるが、竈との位置関係があまりに合致していることと、竈が非常に大きいことから竈の下部構造として捉えておきたい。すなわち、湿度を下げるといった、竈の機能を高めるための付属施設として考えておきたい。したがって、住居跡床面から多数の鉄釘がまわって出土していることも考慮に入れると、鍛冶関係の機能・性格を持った竈・堅穴住居跡として推定することが可能であろう。なお、本遺跡で検出した堅穴住居跡はこの1棟のみである。



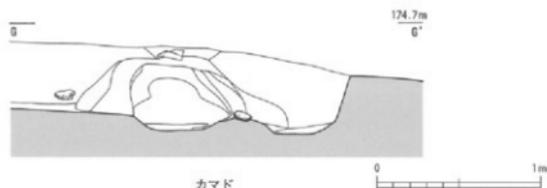
第16図 SB-3 実測図



1. 2.516/6 黄色 磁種粒砂。
2. 2.5184/3 褐色 粗粒シルト-中粒砂。
3. 5183/2 暗赤褐色 粗粒シルト-磁種粒砂 灰層 炭化物・粘土混じる。
4. 2.5185/5 明褐色 粗粒シルト-中粒砂 地土層。
5. 2.517/4 浅黄色 磁種粒砂 マンガン含む。
6. 10186/6 黄褐色 シルト質磁種粒砂。
7. 10187/8 黄褐色 粗粒シルト-磁種粒砂。



1. 516/6 黄色 磁種粒砂。
2. 2.5184/3 黄色 磁種粒砂 炭化物混じる。
3. 2.516/2 灰黄色 磁種粒砂。
4. 5184/4 に近い赤褐色 磁種粒砂 地土層。
5. 5185/2 暗赤褐色 磁種粒砂 灰含む。
6. 517/4 浅黄色 磁種粒砂-磁種粒砂。
7. 2.517/4 浅黄色 磁種粒砂 マンガン含む。
8. 10186/6 黄褐色 シルト質磁種粒砂。
9. 10187/8 黄褐色 粗粒シルト-磁種粒砂。



カマド

第17図 SB-3部分実測図

C. 掘立柱建物跡

SB-1

調査区東端の尾根稜線から南西にやや下がった位置にある3間×2間の掘立柱建物跡であり、西側に雨落ち溝、東側には塼といった付属施設を伴う。標高は172.2~172.5mである。

建物跡の棟方向は東西に近く、N75°Eである。桁間は3間で、柱芯間での総長は北側で3.9m、南側で4.18mを測る。北側柱列は一直線で通るが、南側では東側から2本目が外にはみ出す。各柱間は芯々間で1.21~1.52mを測り、その差は31cmで、平均は1.35mである。

梁間は2間で、柱芯間での総長は東側で2.9m、西側で3.16mを測る。東側柱列は一直線に通るが、西側では中央の柱穴が約20cm外に出ている。各柱間は芯々間で1.44~1.64mとその差は20cm、平均は1.52mで、梁間の方が桁間よりも平均値で17cm長い。

柱穴は隅丸方形~円形で、直径は31~49cmを測り、径35~40cmのものが多く、深さは29~42cmで、平均は35cmである。柱痕は直径16~23cmで、20cm前後である。柱痕の底は掘り形の底に接している。

東側の塼と考えられる柱列は両端の2本のみ遺存している。柱芯間は2.8mを測る。北側の柱穴は建物の柱列よりも15cm程度南にずれているが、南側は建物の柱列がそのまま通る。建物との間隔は北側で1.78m、南側で1.75mと桁間よりも長いので、庇とは判断しなかった。柱穴は径24~30cmの円形で、深さは26~29cm、柱痕は径12~18cmで、柱痕の底は柱穴掘り形の底に接している。

西側には溝状の土壌が存在しており、長さ2.5m、幅0.8m、深さ19cmを測る。雨落ち溝と考えると、入母屋または切妻で庇が存在していたことになる。溝の中心で建物柱列ラインから約1.1m離れている。

建物跡の柱穴から小片の土器が出土しているが、奈良時代に属するもののみで、確認調査時にも奈良時代の土器が出土していることから、その時期に建てていたものと思われる。

SB-2

調査区東端近くの尾根稜線から西に少しはずれた鞍部にある3間×2間の掘立柱建物跡であり、北側に雨落ち溝、東側には庇や塼といった付属施設を伴う。標高は172.4~172.9mである。

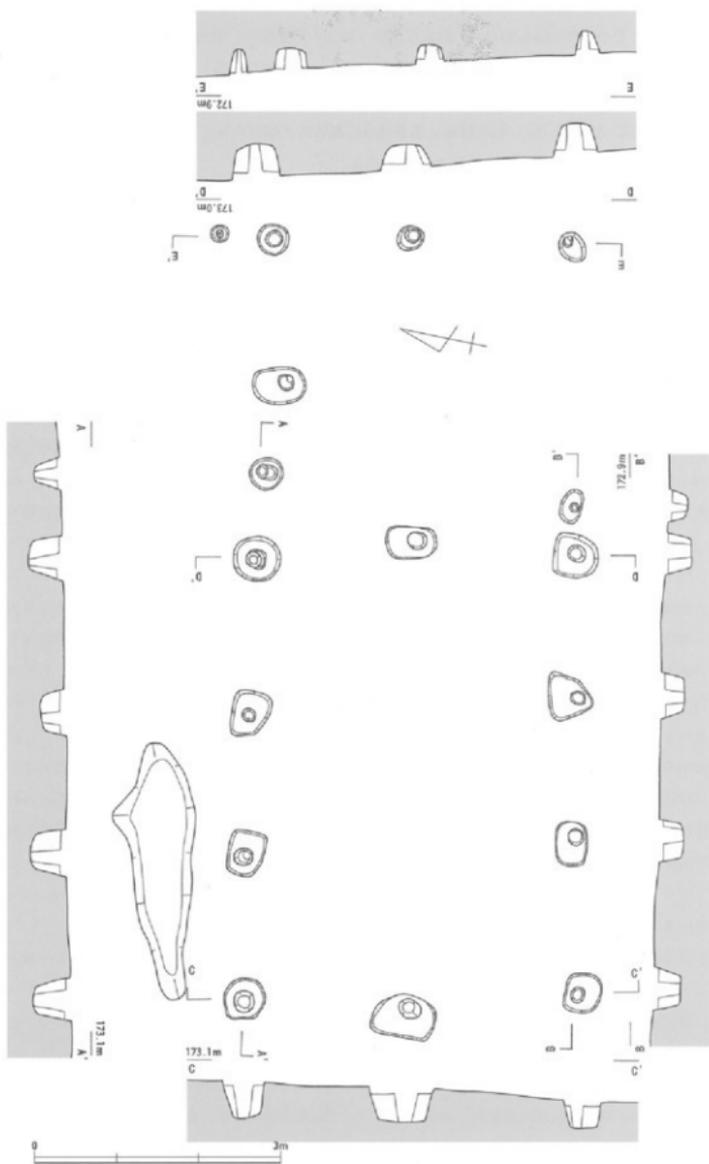
建物跡の棟方向は東西に近く、N80°Eである。桁間は3間で、柱芯間での総長は北・南側ともに5.4mを測り、SB-1より大きい。北側柱列および南側柱列は一直線を通る。各柱間は芯々間で1.70~1.95mを測り、その差は25cmであるが、北側柱列では東端の柱間が1.92m、南側では西端の柱間が1.95mとなっていて長いが、それ以外の柱間は1.70~1.79mの範囲内である。なお、平均は1.82mである。

梁間は2間で、東・西両側の柱列はともに中央の柱穴が15~20cm外に位置している。柱芯間での総長は東側で3.89m、西側で4.06mを測る。この規模もSB-1よりも大きい。各柱間は芯々間で1.92~2.10mとその差は18cm、平均は2.0mで、梁間の方が桁間よりも平均値で18cm長い。

柱穴は方形~円形などで、一辺や直径は37~79cmを測り、50cm程度のものが多く、深さは28~44cmで、平均は34.5cmであり、柱痕は直径16~25cmで、概ね20cm前後を測り、底は掘り形底に接している。

東側の庇と考えられる柱列は両端の2本のみ遺存している。柱芯間は3.82mを測る。北側および南側の柱穴は建物の柱列の通りに合致しているが、建物との間隔は北側で1.09m、南側で0.57mと建物東側柱列とは平行になっておらず、52cmのずれがある。柱穴は径26~43cmの円形および楕円形で、深さは23~30cm、柱痕は径12~15cmで、柱痕の底は柱穴掘り形の底に接している。

東側の塼と考えられる柱列は3個が認められる。柱芯間の総長は3.56m、柱芯間は1.7~1.86mを測



第19图 SB-2 实测图

る。南北両端の柱穴は建物の南北柱列がほぼそのまま通る。建物東端の柱芯との間隔は北側で3.95m、南側で3.85mとその差は10cmしかない。柱穴は径30~39cmの円形ないし楕円形で、深さは21~29cm、柱痕は径14~20cmで、柱痕の底は柱穴掘り形の底に接している。なお、この柱列の北端に柱通りに合致するかたちで芯々間67cmの距離で径20cm、深さ30cmの柱穴が1個存在する。柱痕直径は10cmである。

北側の西寄りには長さ3.2m、幅0.55m、深さ15cmの溝状の土壌が存在しており、雨落ち溝と考えられ、溝の中心から建物の柱列までの距離は1.0mである。

建物跡の柱穴から小片の土器が出土しているが、奈良時代に属するもののみで、確認調査時にも奈良時代の土器が出土していることから、その時期に建っていたものと思われる。

SB-4

調査区西部の台地上のやや西に偏った位置にある2間四方の側柱建物跡であり、SB-5~9とともに一群をなしている。それらの最も北西部、SB-5の北に位置する。標高は177.1~177.6mで、雨落ち溝や塀といった付属施設は伴わないが、柱穴は建物の規模に較べて非常に大きいことが特徴である。

建物跡の方向は東西南北に近く、西側柱列ではN5°Wである。南北方向の柱芯間での総長は西側で2.89m、東側で2.93mを測る。東・西側柱列ともに柱通りはほぼ一直線である。各柱間は芯々間で1.39~1.54mを測り、その差は15cmで、平均は1.46mである。

東西方向の柱芯間での総長は北側で2.73m、南側で2.76mを測る。北・南側柱列ともに一直線に柱が通る。東西方向の総長は南北方向よりも13~20cm短い。棟方向は南北の可能性がある。各柱間は芯々間で1.29~1.44mとその差は15cm、平均は1.37mで、南北方向よりも平均値で9cm短い。

柱穴は概ね円形で、直径は52~72cmを測り、径60cm程度のもが多く、建物の規模に較べてかなり大きい。検出面からの深さは28~65cmであるが、東側列は確認調査、南部は水田構築により上部が削平されているため、浅くなっている。残存状況が良好な北東部での平均は57cmであり、かなり深い。柱痕は直径14~20cmで、18cm前後である。柱痕の底は掘り形の底に接している。

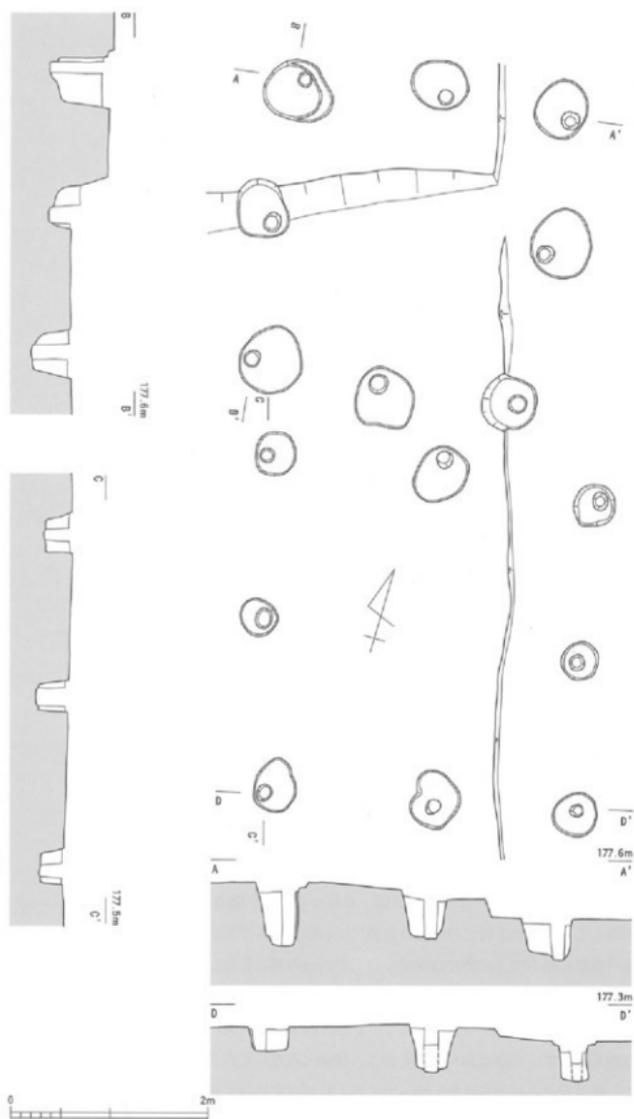
SB-4は柱間が狭く、柱穴も大きく深いため、倉庫である可能性が高いと思われる。

柱穴からは遺物が全く出土しなかったことから建物跡の時期は明確にできないが、建物群の西および北側に存在する溝(SD-2・3)が建物群の柱列と同一方向で、建物群を囲むように存在する。これらの溝は建物群に伴うものと考えられ、同時に存在していたと推定できることから、SB-4も溝と同時期であると判断している。

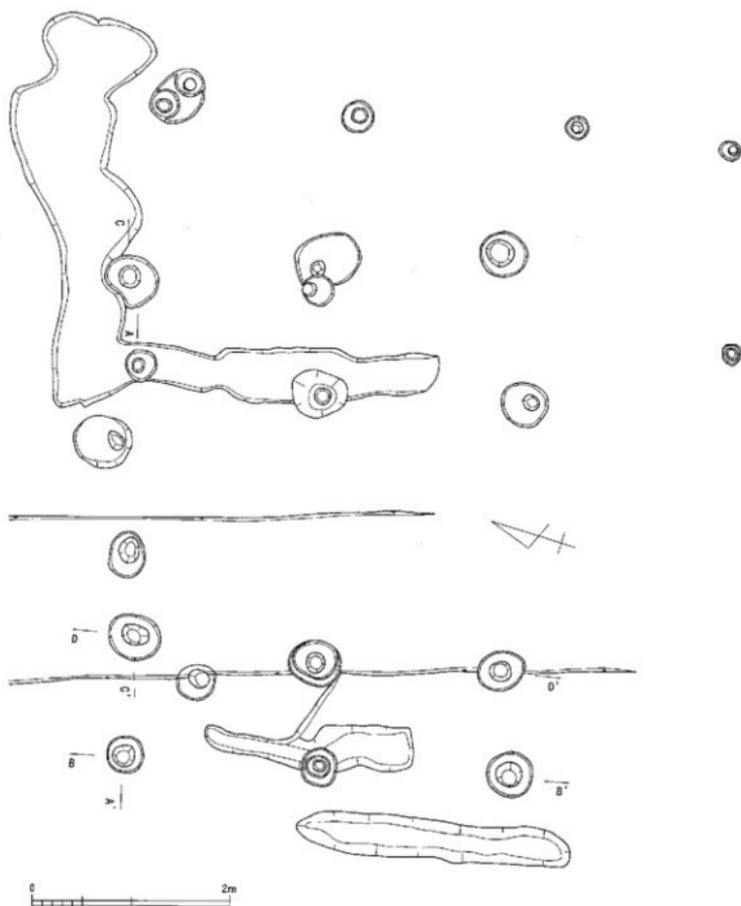
SB-5

調査区西部の台地上のやや西に偏った位置にある2間四方の側柱建物跡であり、SB-4・6~9とともに一群をなしており、それらの西側中央部に位置している。SB-4のすぐ南側であるが、SB-4とは柱列が通らず、やや東にずれている。標高は177.0~177.1mである。雨落ち溝や塀は伴わない。SB-4ほどではないが、柱穴は建物の規模に較べて大きいことが特徴である。

建物跡の方向は東西南北に近く、西側柱列ではN15°Wである。南北方向は2間で、柱芯間での総長は西側で3.45m、東側で3.18mを測り、西側が長く、いずれもSB-4より長い。西側の柱通りはほぼ一直線であるが、東側柱列では中央の柱穴が11cm内側に入っている。各柱間は芯々間で1.52~1.78mを測り、その差は26cmで、平均は1.64mであり、平均値でもSB-4よりも約20cm長い。



第20图 SB-4・5实测图

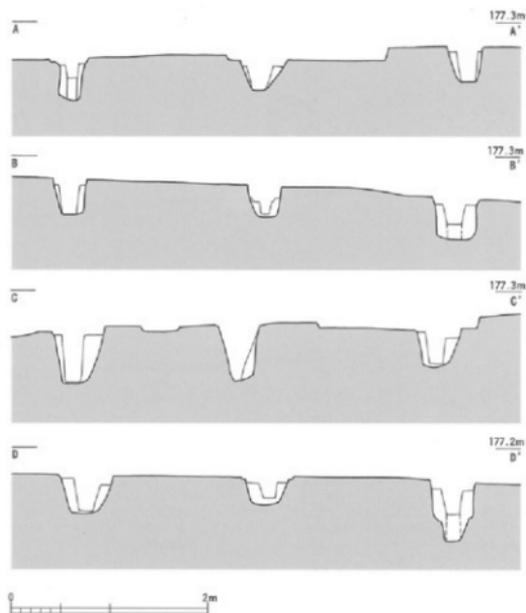


第21図 SB-6・7平面図

東西方向も2間で、柱芯間での総長は北側で3.44m、南側で3.21mを測り、SB-4よりも長い。南側柱列は一直線に通るが、北側では中央の柱穴が21cm外側に存在している。東西方向の平均総長は南北方向のそれと全く同じ長さで、方形の建物となり、梁・桁方向は判断できない。各柱間は芯々間で1.47～1.81mとその差は34cm、平均は1.67mで、東西方向と南北方向の平均値は3cmの差しかない。

柱穴は概ね円形で、直径は36～60cmを測り、径44cm程度のもが多く、建物の規模に較べてやや大きめである。検出面からの深さは20～48cmである。柱痕は直径14～19cmで、17cm前後である。

柱穴からは遺物が全く出土しなかったが、建物群の西および北側に存在する溝が建物群に伴うものと考えられ、同時に存在していたと推定できることから、SB-5も溝と同時期であると判断している。



第22図 SB-6・7断面図

SB-6

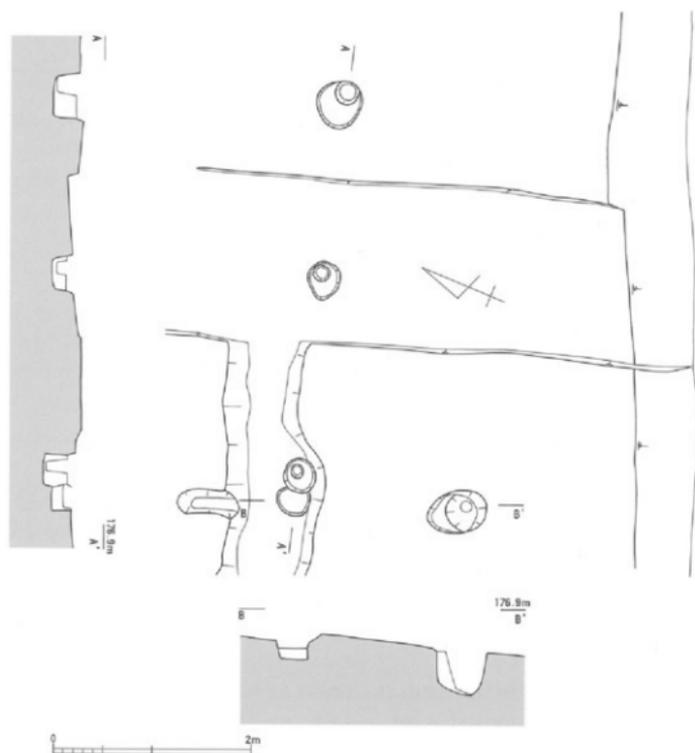
調査区西部の台地上のやや西に偏った位置にある2間四方と思われる側柱建物跡であり、SB-4・5・7～9とともに一群をなしており、南西部に位置する。また、同規模のSB-7とは重複関係にあり、本建物跡が西側にずれて存在するが、柱穴の重複部分がないため、前後関係は不明である。標高は176.8～177.0mで、東西側に雨落ち溝、東側には塀といった付属施設を伴う。ただし、塀は本建物跡あるいはSB-7に伴うものか、また、両方に伴うものかの決定はできない。

建物の方向は東西北方向に近く、北側の東西方向柱列でN75°Eである。南北方向は2間で、柱芯間での総長は西側で3.97m、東側で4.08mを測り、東側が11cm長い。西側の柱通りはほぼ一直線であるが、東側柱列では中央の柱穴が13cm内側に入っている。各柱間は芯々間で1.94～2.16mを測り、その差は22cmで、平均は2.02mである。

東西方向も2間であるが、南側では中央の柱穴が検出できなかった。柱芯間での総長は北側で4.0m、南側で3.85mを測る。北側の柱通りは一直線である。東西方向の平均総長は南北方向のそれよりも10cm短い。ほぼ方形の建物となり、梁・桁方向は判断できない。各柱間は芯々間で1.88～2.12mとその差は24cm、平均は2.0mで、東西方向と南北方向の平均値は2cmの差しかない。

柱穴は概ね円形で、直径は31～55cmを測り、平均径は42cm程度である。検出面からの深さは32～47cmである。柱痕は直径14～24cmで、20cm前後のものが多い。柱痕の底は概ね掘り形の底に接している。

建物西側の南半部には長さ2.83m、幅0.43m、深さ5cmの溝状の土壌が柱列と平行方向で存在してお



第23図 SB-8実測図

り、SB-6の西側雨落ち溝と考えられ、溝の中心から建物柱列までの距離は約68cmである。東側には柱列と重なって柱列と同一方向の溝が存在する。雨落ち溝の可能性があるとと思われるが、柱列と重複していることから判断には躊躇を覚える。深さ5cm、最大幅55cmで、長さ3.3mあり、南端は自然消滅し、北端は東西方向の溝SD-14につながっている。なお、SD-14の底は西が高く東が低い。

東側の竪と考えられる柱列は「L」字形に5個の柱穴が並んでいる。南北方向では4個の柱穴がSB-6の東側南北柱列と平行方向に並ぶことから、SB-6に伴う竪である可能性が高いが、SB-6・7の両方に伴う可能性も残っている。南北の総長は柱芯で5.88m、各柱芯間は北から2.01、2.23、1.64mを測る。東西方向の柱芯間は2.08mである。SB-6の東側南北柱列との間隔は北側で2.66m、南側で2.80mを測る。柱穴は径19~34cmの円形で、深さは11~56cm、柱痕は径9~17cmで、柱痕の底は柱掘り形の底にはほぼ接している。なお、北端の柱穴は2個存在し、建て替えられているようである。

柱穴や溝からは遺物が出土しなかったが、西側に存在する溝が建物群に伴うものと考えられ、同時に存在していたと推定できることから、SB-6も溝と同時期であると判断している。

SB-7

前述のSB-6と同規模の2間四方の欄柱建物跡で、東側にずれて重複関係にあるが、柱穴の重複部分が無いので、前後関係は不明である。標高は176.7~177.0mで、西側に雨落ち溝、東側には「L」字形の塀といった付属施設が存在するが、前述のようにいずれに伴うものか断定できない。

建物の方向は東西南北方向に近く、北側の東西方向柱列でN72°Eである。南北方向は2間で、柱芯間での総長は西側で3.79m、東側で3.83mを測り、東側が4cm長い。東側の柱通りはほぼ一直線であるが、西側柱列では中央の柱穴が10cm外側にはみだしている。また、東側の中央には柱列から25cm内側に新しい柱穴がある。各柱間は芯々間で1.89~1.94mを測り、その差は5cmで、平均は1.91mである。

東西方向も2間であるが、南側では中央の柱穴が検出できなかった。柱芯間での総長は北側で3.66m、南側で4.27mを測り、その差は61cmと大きい。北側柱列では中央の柱穴が14cm外側にはみだしている。東西方向の平均総長は南北方向のそれよりも長いが、僅かに15cmで、ほぼ方形の建物となり、梁・桁方向は判断できない。各柱間は芯々間で1.66・2.01mとその差は35cm、平均は1.84mで、総長とは逆に東西方向が南北方向よりも短いが、平均値の差は僅かに7cmである。

柱穴は円~楕円形で、東側中央内側の柱穴を除くと、直径は42~67cmを測り、平均径は52cm程度とやや大きめである。検出面からの深さは39~63cmである。柱痕は直径17~27cmで、19cm前後のものが多い。柱痕の底は概ね掘り形の底に接している。

建物西側の中央部には長さ2.16m、最大幅0.48m、深さ9cmの溝状の土嚢が柱列と平行方向で存在していることから、SB-7の雨落ち溝と考えられ、溝の中心から建物柱列までの距離は約97cmである。

柱穴や溝からは遺物が出土しなかったが、西側に存在する溝が建物群に伴うものと考えられ、同時に存在していたと推定できることから、SB-7も溝と同時期であると判断している。

SB-8

調査区西部の台地上のやや西に偏った位置にあり、水田構築により削平されているが、2間以上×1間以上の欄柱建物跡であると判断した。SB-4~7・9の建物群のうち南西側に位置する。また、SB-6・7の塀とは東西方向の柱列が通るため、塀の可能性も残しているが、西端で東西列の南に柱穴が検出されており、南に折れ曲がることから建物跡であると判断した。現状での標高は176.5~176.7mで、周辺は微傾斜に加工しているようである。雨落ち溝や塀といった付属施設は検出できなかった。

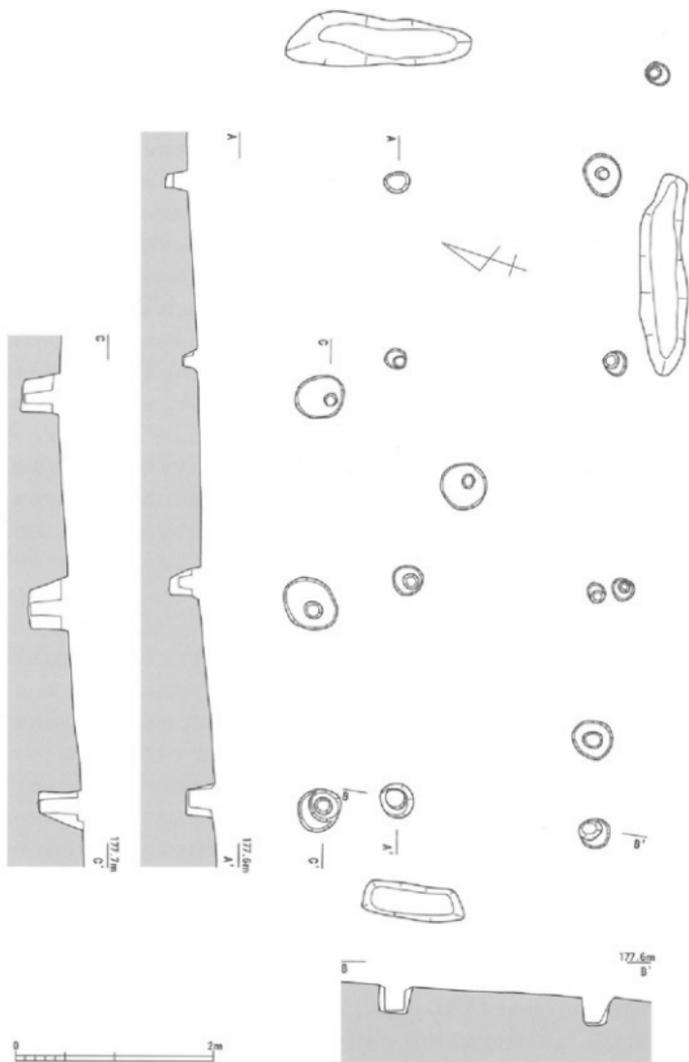
建物の方向は東西南北方向に近く、東西方向柱列でN76°Eである。東西方向は現状では2間で、柱芯間での総長は3.91mを測り、柱通りはほぼ一直線である。西端外側には建て替え前と思われる古い柱穴があるが、柱痕は確認できなかった。各柱間は芯々間で1.86・2.05mを測り、その差は19cmで、平均は1.96mである。一方、南北方向は1間のみ確認できた。柱芯間の長さは1.78mで、東西方向の平均長さよりも18cm短いが、梁・桁の方向は判断できない。

柱穴は円~楕円形で、直径は32~51cmを測り、平均径は40cm、検出面からの深さは28~41cmであるが、西端の建て替え前の柱穴が19cmと最も浅い。柱痕は、西端の柱穴を除くと、直径14~23cmである。

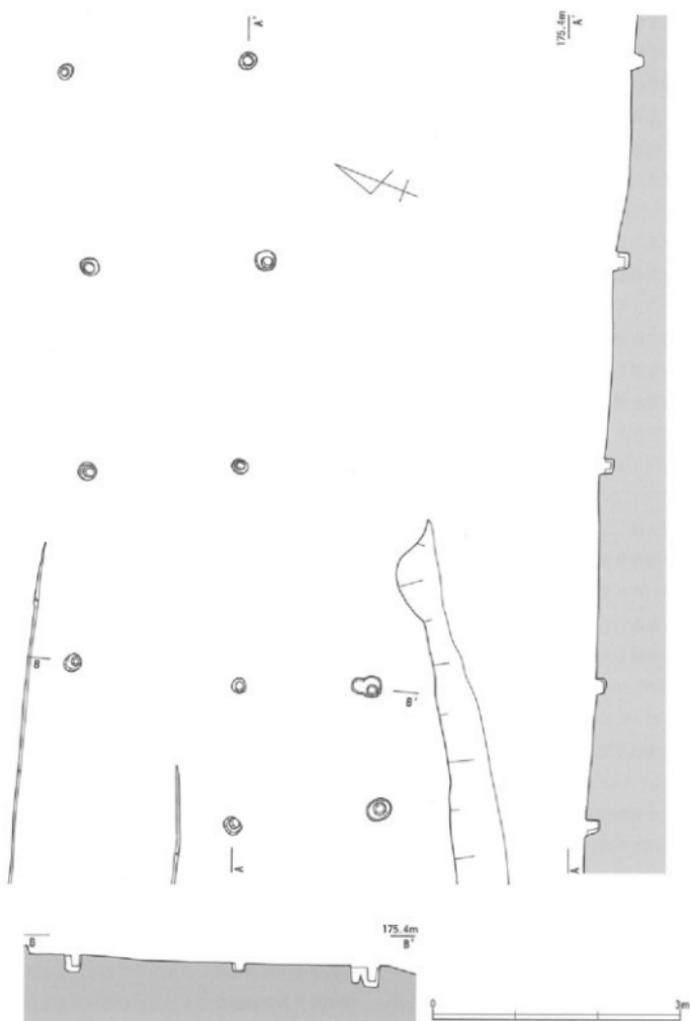
遺物が出土しなかったが、他の建物群同様、溝SD-2と同時期であると判断している。

SB-9

調査区西部の台地上のやや西に偏った位置にある3間×1間の欄柱建物跡であり、SB-4~8とと



第24図 SB-9実測図



第25図 SB-10実測図

もに一群をなしており、その北端の最も高い位置に存在する。標高は176.8~177.4mで、周辺は緩い傾斜面を削ってさらに微傾斜に加工しているようである。東西および南側に兩落ち溝、北側には塼といった付属施設を伴う。柱穴は建物跡が小さく、溝の方が大きい。

建物の棟方向は東西に近く、北側の東西方向柱列でN72°Eである。桁行は3間で、柱芯間での総長は北側で6.29m、南側で6.69mを測り、南側が40cm長い。北側の柱通りでは西から2個目の柱穴が16cm内側に、南側では東から2個目の柱穴が1cm外側にそれぞれずれている。各柱間は芯々間で1.84~2.40mを測り、その差は56cmで、平均は2.16mと柱間が広い。

梁方向は1間で、芯々柱間は1.93~2.17m、差は24cm、平均2.07mと平均値では桁間より9cm長い。柱穴は概ね円形で、直径は18~44cmを測り、平均径は28cm程度と小さいことが特徴である。検出面からの深さは15~33cmである。柱痕は直径13~19cmで、18cm前後のものが多い。

建物の東西両側の北半部および南側の東部には溝状の土堀が柱列と平行方向で存在しており、雨落ち溝と考えられる。東側のSD-8は長さ1.90m、最大幅0.57m、深さ16cm、南側のSD-9は長さ2.07m、最大幅0.48m、深さ12cm、西側のSD-10は長さ1.04m、最大幅0.36m、深さ9cmで、建物柱列から溝中心までの距離は、SD-8で約1.4m、SD-9で約0.7m、SD-10で約1.0mである。

北側に存在する扉は3個の柱穴が東西に一列に並び、総長は柱芯で4.15m、各柱芯間は西から1.99m、2.16mを測り、平均値は2.08mである。柱間距離はSB-9に近いが、その位置は西に少しずれている。扉と建物北側柱列との間隔は西側で0.73m、東側で0.67mを測る。柱穴は円~楕円形で、径42~60cmと建物のそれよりも約20cm大きい。深さも38~45cmと深い。柱痕は径13~18cmである。

SD-9から土器が出土しており、建物についても西・北側の溝SD-2・3と同時期と考えられる。

SB-10

調査区中央部の台地上後線部分のやや北東に下がった位置にある3間×2間以上の総柱建物跡であり、単独で存在している。標高は現状では174.6~175.3mで、周辺は緩い傾斜面を少し削って加工しているようである。西側には扉が認められる。柱穴は他の建物の規模に較べて小さいことが特徴である。

建物の棟方向は東西に近く、北側の東西方向柱列でN68°Eである。桁行は3間で、柱芯間での総長は北側で5.80m、南側で6.18mを測り、南側が38cm長い。すべて柱通りが一直線にはならない。各柱間は芯々間で1.87~2.18mを測り、その差は31cmで、平均は2.0mである。

梁方向は2間以上と思われるが、西端で2間分確認できたに過ぎない。芯々柱間は1.29~1.8mで、その差は51cmと大きい。平均値は1.58mで、桁間の平均値より42cmも短い。

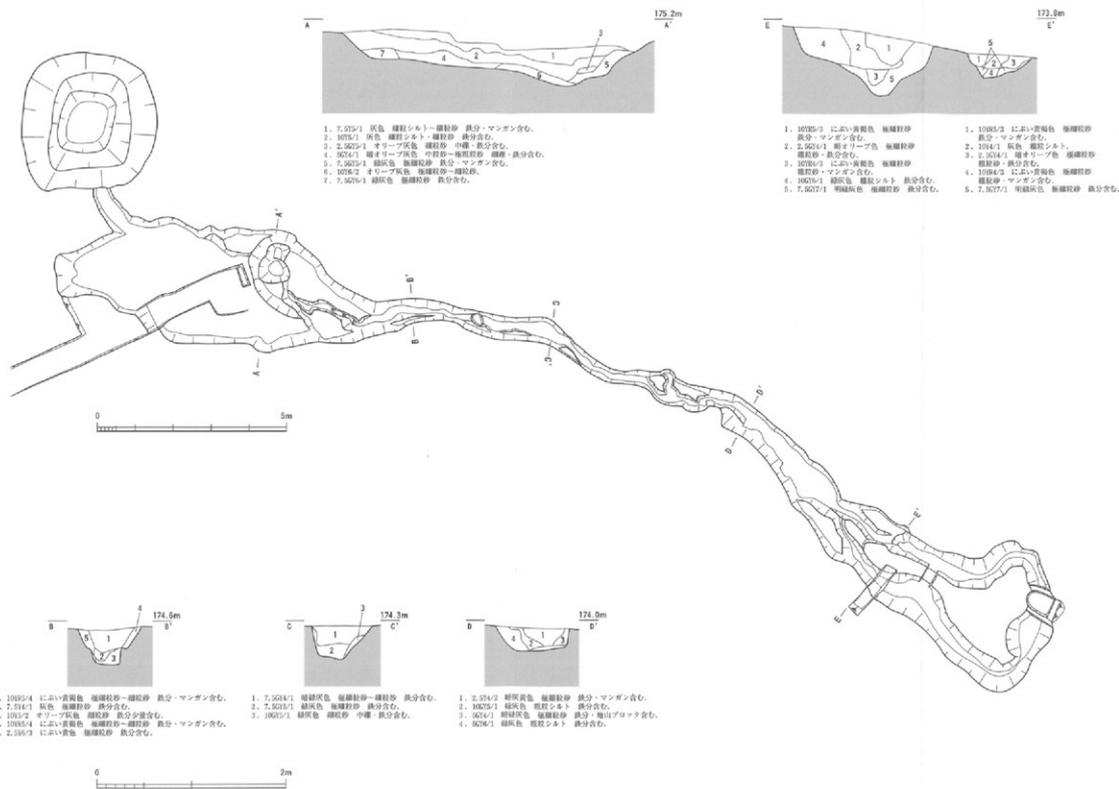
柱穴は概ね円形で、直径は16~25cmを測り、平均径は21cm程度と非常に小さいことが特徴で、検出面からの深さも12~27cmと浅い。柱痕は直径11~14cmで、13cm前後のものも多く、細い。

西側に存在する扉は1間分しか検出できなかった。2個の柱穴が南北に並び、建物の桁方向の柱通りに合致する位置に存在する。柱芯間は1.41mを測り、建物西側柱列との間隔は北側で1.36m、南側で1.18mを測る。柱穴はほぼ円形で径21~32cm、深さはともに17cmを測る。柱痕は径13~15cmである。

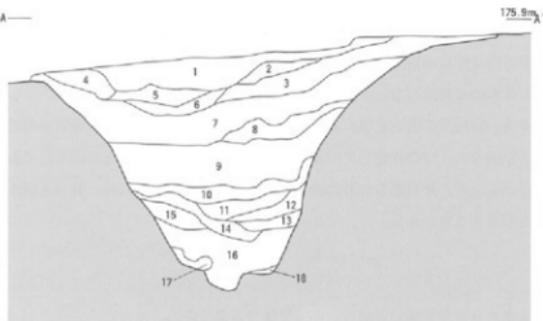
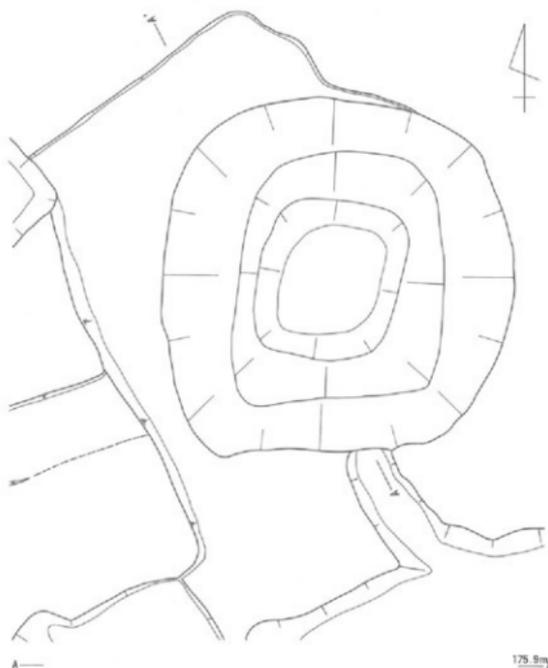
時期は明確にできないが、すぐ近くの柱穴から平安時代中期の土器が出土していることと、北西部の建物群とは離れ、総柱で柱穴も小さいことから、平安時代の建物跡である可能性が高いと思われる。

SA-1

調査区中央南部の台地上後線部分に位置する、5間の櫛列もしくは柵跡であり、東端の柱穴は2個存在するが、どちらかに限定はできない。SB-10の南5mの位置であるが、方向がずれているため単独で存在している観がある。標高は174.1~174.4mで、周辺地形を加丁した状況は看取できない。



第26図 SE-1・SD-17実測図



- | | |
|---|---|
| <p>1. 107K3/2 黒褐色 粗粒シルト マンガン多く、土影含む。</p> <p>2. 107K5/4 に近い黄褐色 細粒砂 土影多く含む。</p> <p>3. 107K3/3 暗褐色 粘粒砂-細粒砂 中影・土影・マンガン・炭を含む。</p> <p>4. 2. 576/4 に近い黄色 粘粒砂 炭を含む。</p> <p>5. 107K4/2 灰褐色 粗粒シルト-粘粒砂 マンガン含む。</p> <p>6. 2. 575/1 黄褐色 粗粒シルト-粘粒砂 炭・土影含む。</p> <p>7. 107K5/2 灰黄褐色 粗粒シルト-粘粒砂 火山ブロック・土影・マンガン・炭を含む。</p> <p>8. 2. 576/3 に近い黄色 粘粒砂 火山ブロック・土影・マンガン含む。</p> | <p>9. 107K5/1 黄褐色 粘粒砂 火山ブロック・土影・マンガン含む。</p> <p>10. 107K6/1 黄褐色 粘粒砂-細粒砂 マンガン含む。</p> <p>11. 2. 575/1 黄褐色 粘粒砂 マンガン含む。</p> <p>12. 575/1 灰色 粘粒砂 炭・マンガン含む。</p> <p>13. 7. 575/1 灰色 粗粒シルト-粘粒砂 マンガン含む。</p> <p>14. 7. 575/1 灰色 粘粒砂 マンガン含む。</p> <p>15. 7. 575/1 灰色 粗粒シルト-粘粒砂 マンガン含む。</p> <p>16. 7. 576/1 灰色 粗粒シルト-粘粒砂 炭・マンガン含む。</p> <p>17. 7. 576/1 灰色 粘粒砂 火山ブロック・土影・マンガン含む。</p> <p>18. 7. 5677/1 明緑灰色 粗粒シルト-粘粒砂 炭を含む。</p> |
|---|---|



第27図 SE-1 実測図

方向は東西に近く、 $N82^{\circ}E$ である。柱芯間での総長は8.98mで、柱通りが一直線にはならず、若干振れている。各柱間は芯々間で1.4~2.08mを測り、その差は68cmで、平均は1.82mである。

柱穴は概ね円形で、直径は24~36cmを測り、平均径は30cm程度で、検出面からの深さは5~25cmである。柱痕は直径14~22cmで、15cm前後のものが多い。

周辺、特に南側に柱穴が多く存在しているが、建物跡として組み合うものは確認できなかった。しかし、これらが建物跡となる可能性が高く、SA-1はそれに付属する棚列あるいは扉の可能性もある。

なお、柱穴から遺物は出土しなかった。

D. 井戸・溝

調査区中央部の西寄りでは井戸(SE-1)とそこからのびるかたちの溝1条(SD-17)を検出した。

SE-1

素掘りの井戸で、平面形は四角張った円形に近い。上端の直径は約3.6m、検出面からの深さ約2.6mを測り、底はほぼ水平で、 $1 \times 1.1m$ 程度の方形に近い。底部のほぼ中央に径約40cm、深さ約20cmのほぼ円形の水溜めが掘り込まれている。底は確実な湧水層までは達しておらず、溜め井戸であった可能性が考えられる。

井戸の断面形は「U」字形に近いが、上半部は角度を変えて外に広がっている。

井戸埋土は18層に分けられ、いずれも自然に堆積した状態で、人為的に埋められた痕跡は見出せない。埋土はその硬さの違いから、大きく上下に分けられる。上半部は第1~第8層で、第1・3・6~8層に土器を含んでおり、第3・7・8層では量が多い。また、炭は第3・6・7層に含まれている。

下半部は上半部よりも硬く締まっており、第9~12層は極細粒砂で、第9層に土器を含んでいる。第13~18層は灰色系の細粒シルトないし粗粒シルトから極細粒砂と粒が小さく、第17・18層には鉄分を含む。なお、第12・16層には炭を含んでいる。

井戸の中層から奈良時代の長頸壺と蓋の転用硯および甕の破片が出土した。これらのうち、壺はSB-3から出土したものと接合した。

この井戸は後述の鍛冶炉に近い位置にあり、作業用の水を確保するための施設と考えられる。

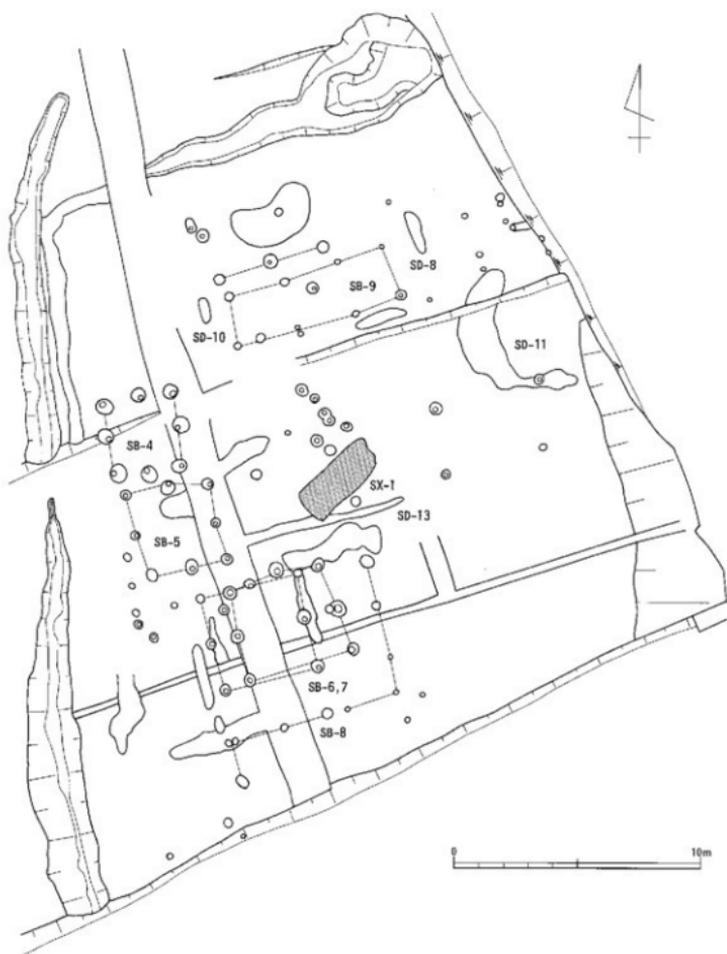
井戸の南側には溝SD-17が存在しているが、この溝の西端が2本に枝分かれしており、北側のものが井戸に取り付いている。井戸取り付き部分の溝の深さは10cmであるため、井戸上端から約10cm下がったところに溝底があることになる。

SD-17

SE-1の南側から南東方向の谷部に向かって延びる溝である。

溝の西端は2本に枝分かれしており、北へのびる1条が井戸に取り付いている。溝本流の北端と井戸とは約50cmの間隔が空いている。溝はやや蛇行しながら南東方向にのび、東端は谷部の東西方向の一支谷と合流している。溝東端は二又に分かれた後再度合流している。溝の総延長は約29.5mである。

溝西端部は長さ約8.5mにわたって幅広くっており、最大幅3.25m、深さ23cm、最深部で50cmを測る。井戸側に枝分れした部分は幅約0.6m、長さ1.3mで、深さは15cmを測る。溝の中央部分は長さ約15mにわたって幅が狭くなっており、幅0.3~1.2m程度、深さは10~40cm程度である。溝の東部は再び幅

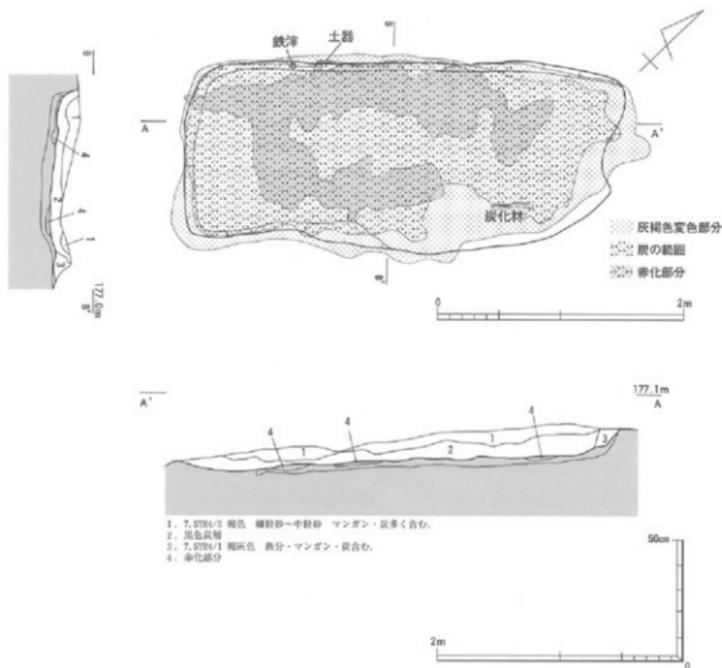


第28図 SX-1位置図

が広がっているが、溝が二又に分かれているためである。ただし、溝は東端では再び合流し、環状になっている。北側の溝は幅0.5~0.8m程度で、深さは9~30cmである。南側の溝は幅0.5~1m程度で、深さは26~47cmと北側の溝よりも深い。ただし、東端では17cm程度と浅くなっている。

なお、溝の西端と東端での底の比高差は2.14mを測る。

溝西端で溝幅が広がっている部分は平面形が長方形に近く、溝底も平坦に近い状態であることから、



第29図 SX-1 実測図

井戸から汲み出した水を流すためだけでなく、何らかの作業を行うための場所・施設と考えられる。

E. 鐵冶炉 (SX-1)

SX-1は前述のように鐵冶炉跡と考えられ、調査区西部の「コ」の字形に配置された掘立柱建物跡群に囲まれた部分にあり、標高は176.8~176.9mである。周辺は建物跡群と同様、微傾斜になるように地山を加工しているようである。

SX-1は平面長方形に近く、長軸3.90m、短軸1.70mで、上部はかなり削平されているようで、深さは12cmのみ遺存していた。底は赤ないし灰色に変色している。主軸方向は北東-南西方向で、 $N46^{\circ}E$ を測り、掘立柱建物跡群の主軸方向とはかなり方向を異にしている。前述の規模は熱を受け、灰色に変色した部分で、その内部底も「U」字に近い形の部分が被熱により赤色に変色している。赤化した部分の範囲は幅1.20m程度、長さ2.46m程度で、南西側に長さ52cm飛び出している部分も認められるが、いずれも灰色変色範囲内である。赤化部分の厚さは2cm程度、灰化部分の厚みは2~4cmである。赤化部分の上部には一面に炭が充填し、その範囲はほぼ長方形で、北東部の小さな飛び出し部分も含めた長さ3.52m、幅1.49mの範囲であり、灰色変色部分の範囲内である。炭層の厚さは3~18cmで、南西側が

厚く堆積している。炭層の上にはマンガン・炭を多く含んだ、7.5YR4/3褐色の細粒砂～中粒砂が5 cm程度の厚さで堆積していた。底面である、赤・灰化部分の上面はほぼ平坦であるが、小さな凹凸が認められる。また、底は南西端が北東端に比べて僅かに7 cm高くなっている。

炭層部分の端から鉄滓と土器片が各1点出土している。

この遺構の性格は、底が焼けていること、厚い炭層が存在していること、鉄滓が出土していることから、鍛冶炉の底部分であると判断した。しかし、残存状況が悪いため、正確な平面規模や、上部および側面の構造は不明である。

鍛冶炉からは時期が判明する土器が全く出土しなかったことから、時期を確定できないが、溝SD-3からも鉄滓が出土していることから、溝と同時期の奈良時代と推定できる。

なお、鍛冶炉の時期については、富山大学の広岡公夫先生に熱残留磁気による年代測定をお願いした。

F. 木棺墓

木棺墓は調査区南部で4基(SX-2～5)検出した。これらは、33m×7mの範囲にわずか4基が存在するという散漫な分布状況を示し、主軸方向も揃っていない。しかし、墓塚の長軸規模が1.2m前後、短軸が0.8～1mとほぼ平均している。棺長も4基のうち3基まで木棺の痕跡が残っており、棺長はすべて0.8m前後と小規模である。いずれも上部を削平されていたが、良好なものでは墓塚上面からの深さが約40cm残っていた。

内部から土器が全く出土していないため、所属時期の確定はできないが、この遺跡の時期が縄紋時代と飛鳥・奈良時代および平安時代中期の3時期に限られるため、そのいずれかの所産と考えて差し支えないものと思われる。強いて判断すれば、遺構・遺物が豊富な奈良時代と考えておくのが妥当であると思われる。

SX-2

調査区中央南部、木棺墓群では最も東に位置する。西側には約10mの距離をおいて木棺墓SX-4が存在する。

家屋の基礎埋設により北半部の大半が破壊されているが、主軸方向と墓塚の長さ・幅は確認できる。ただし、棺の痕跡は検出できなかった。墓塚の主軸方向は南北に近く、N31°Wである。墓塚は長方形を呈し、長さは1.12m、幅0.9mで、壁面は垂直に近い。底面は平坦・水平で、長方形を呈し、長さ96cm、幅65cmを測り、深さ52cmであった。

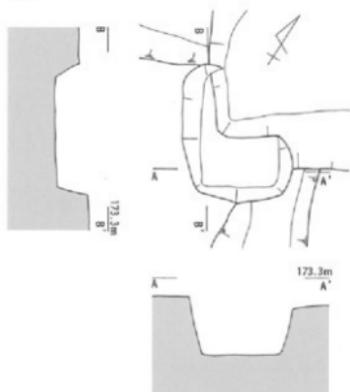
墓塚の規模から小規模の木棺墓であることが推定され、他の木棺墓と同様、子供を葬った可能性がある。内部からは遺物が全く出土していないため、所属時期については確定できない。

SX-3

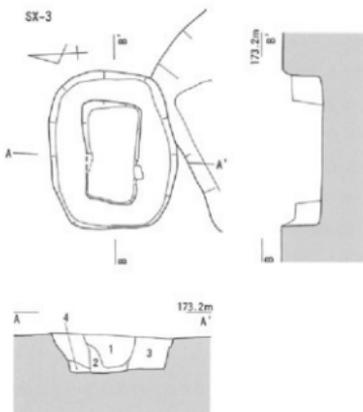
調査区中央南部、木棺墓群内ではほぼ中央に位置する。北東側には約4mの近い距離でSX-4が存在するが、東側には約14mもの距離をおいて木棺墓SX-2が、北西側には約18mも離れてSX-5が存在する。

家屋の基礎埋設により墓塚の南東端が僅かに削られているが、ほぼ完全に全容が窺える。ただし、上部については削平を受けているようである。墓塚の主軸方向は東西に近く、平面隅丸長方形で、長さ1.30

SX-2

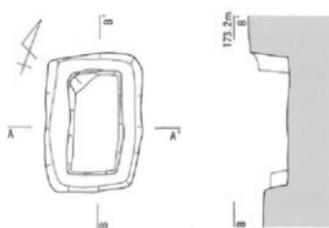


SX-3



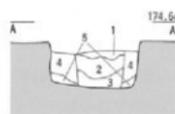
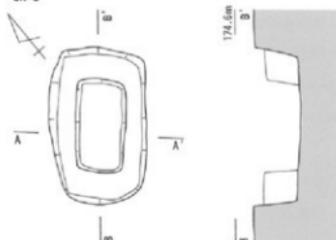
1. 10785/2 灰黄褐色 粘礫砂 中礫・マンガン・土砂・鉄屑含む。
2. 10785/8 黄褐色 粘礫砂 マンガン少量含む。
3. 10786/8 明黄褐色 10786/2 灰黄褐色 粘礫砂。
4. 2.216/8 明黄褐色 2.216/1 黄灰色 粘礫砂〜細砂。

SX-4



1. 2.5366/1 褐色 粘礫砂〜細砂 マンガン・鉄屑含む。
2. 2.2185/1 黄灰色 粘礫砂 マンガン・鉄屑含む。
3. 10786/1 黄褐色 粘礫砂 マンガン・鉄分・地山ブロック含む。
4. 2.217/2 灰白色 粘礫シルト〜粘礫砂 鉄屑含む。

SX-5



1. 10785/1 黄褐色 粘礫砂 鉄屑含む。
2. 10785/4 に近い黄褐色 粘礫シルト〜粘礫砂 鉄屑含む。
3. 2.216/1 灰色 粘礫シルト〜粘礫砂。
4. 1077/2 灰白色 粘礫砂 中粒砂・鉄屑含む。
5. 2.216/6 明黄褐色 粘礫シルト〜粘礫砂 鉄屑含む。



第30図 木棺墓実測図

m、幅1.02mを測り、壁面は垂直に近い。墓底面は平坦・水平で、平面隅丸長方形を呈し、長さ1.20m、幅0.92m、墓壁上面からの深さは35cmである。

墓城の中央で箱形木棺の痕跡を確認できた。棺の長さは84cm、幅は東端で48cm、西端で40cmと東端の方が8cm幅広くなっており、東側頭位の可能性がある。主軸方向は東西方向に近く、E 3° Sである。

壁面はほぼ垂直で、棺の高さは24cm確認できた。棺底は水平・平坦である。南側長側板の押えと考えられる位置で12cm×7cmの長方形の角礫を1個検出している。

棺内埋土は流入土であるが、墓塚埋土には地山のブロックを含んでいる。埋土から時期を決定できる遺物が全く出土していないため、時期については確定できない。

小規模の木棺であるため、他の木棺墓と同様、子供を葬った可能性がある。

SX-4

調査区中央南部、木棺墓群内では中央に位置する。南西側には約4mの近い距離でSX-3が存在するが、東側には約10mの距離をおいて木棺墓SX-2が、西側には約19mも離れてSX-5が存在する。

平面的にはほぼ完全に全容が窺えるが、上部については水田構築や家屋の造成により削平を受けているようである。墓塚の主軸方向は南北に近く、平面長方形で、長さ1.14m、幅0.80mを測り、壁面は垂直に近い。墓塚底面はほぼ平坦・水平で、平面長方形を呈し、長さ1.06m、幅0.69m、墓塚上面からの深さは34cmである。

墓塚の中央で棺形木棺の痕跡を確認できた。棺の長さは86cm、幅は北端で44cm、南端で40cmと北端が僅かに4cmであるが幅広くなっているため、頭位である可能性を残している。主軸方向は南北方向に近く、N19°Wである。壁面はほぼ垂直で、棺の高さは25cm確認できた。棺底はほぼ水平・平坦である。

棺内埋土は流入土であるが、墓塚埋土には地山のブロックを含んでいる。埋土から遺物が全く出土していないため、時期については確定できない。

小規模の木棺であるため、他の木棺墓と同様、子供を葬った可能性がある。

SX-5

調査区中央南西部、木棺墓群内では最も西端に位置する。南東側には約18mもの距離をおいて木棺墓SX-3が、東側には約19mも離れてSX-4が存在する。

平面的にはほぼ完全に全容が窺えるが、上部については水田構築により若干削平を受けているようである。墓塚の主軸方向は北東-南西方向で、平面は隅丸長方形を呈し、長さ1.30m、幅0.79mを測り、壁面は垂直に近い。墓塚底面はほぼ平坦・水平で、平面隅丸長方形を呈し、長さ1.20m、幅0.68mを測り、墓塚上面からの深さは39cmである。

墓塚の中央で棺形木棺の痕跡を確認できた。棺の長さは78cm、幅は北東端で40cm、南西端で38cmと北東側が僅かに2cm幅広いが、頭位の推定までは至らない。主軸方向は北東-南西方向に近く、N40°Eである。棺壁面はほぼ垂直で、棺の高さは31cm確認できた。棺底はほぼ水平・平坦である。

棺内埋土は流入土であるが、墓塚埋土には地山掘削土が大層である。埋土から遺物が全く出土していないため、時期については確定できない。

小規模の木棺であるため、他の木棺墓と同様、子供を葬った可能性がある。

G. 溝

調査区北西部に存在する溝SD-2・3は、掘立柱建物跡SB-4~9を取り巻く位置に存在している。SD-2は外側を弧状に走り、SD-3が内側を「L」字状に巡っている。西側ではSD-2・3はほぼ平行に接するように走っている。

SD-2

水田構築により数箇所が分断されているが、全面調査区西部の4面の旧水田部分にわたって北東から南にのびることが判断できる。北東端は上場造成により削平され、南端も削平により残っていない。確認できた総延長は約60mである。建物群の西側にあたる部分では、ほぼ南北方向に直線的にのびる。溝形状は断面「U」字形に近いが、西側の法の幅は広く、東側の建物群側の法面が急角度となっている。

このことは、建物群を囲むための溝と判断した理由のひとつである。

溝の幅・深さは削平を受けていることにより確定できないが、中央南寄り部分の遺存状況が比較的良好で、最大幅2.28m、最深で62cmを測る。溝の北東端溝底と南端溝底での高低差は3.76mを測り、上から3段目の旧水田面南端部分の溝底では、高低差は3.06mである。

溝埋土はレンズ状であり、自然堆積を示す。なお、H-H'断面部分の埋土には鉄分を含んでいる。溝は建物群のすぐ西側に位置し、建物群と平行方向で、建物側の法角度が急であることから、斜面上方から建物群への流水を防ぐ目的および湿度を下げるための施設と考えられる。

溝の埋土中から奈良時代に属する須恵器・土師器が出土しており、これらの土器がこの溝の時期を示していると考えられる。また、前述の理由により、建物群と同時期と考えられる。

SD-3

この溝も水田構築による削平のため分断されている。北部の残存状況は比較的良好であるが、南部についてはSD-2よりも状況は悪く、ほとんど残っていない。ただし、SD-15と呼称した溝はSD-3の続きと判断している。

SD-3は建物跡群の方向と同一方向で、それらの北および西側を「L」字形にめぐっている。SB-9の北側では約5mの距離をおいて東西方向、建物跡群の西側では、SB-4とは約1mの距離をおいて南北方向で、いずれも建物跡と同一方向である。なお、SB-9の北側部分では、土手状の高まりになっていることが等高線により判断できる。SD-3はSD-2の内側にあり、西側では接するようにはほぼ平行に走っている。

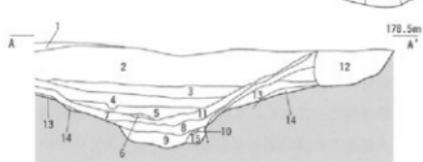
SD-15も含めて確認できた総延長は約39mである。北東端では溜まり状に幅広くなっており、最大幅4.0m、最深部では44cmの深さである。溝は西方に行くにつれ徐々にその幅を減じ、東西方向西端では幅50cm、深さ12cmである。南北方向でも幅は35~80cm、深さも5~14cm程度とSD-2に比べてかなり小規模である。溝の断面形状は「U」字形ないし皿状を呈するのみである。北西部の溝コーナー部分が最も高い標高を示し、その部分の溝底とSD-15を含めた南端溝底での高低差は1.33mを測り、上から2段目の旧水田面南端部分の溝底では、高低差は0.66mである。

溝は建物群と全く同一方向で、SX-1の機能と同じ鍛冶関係の遺物が出土していることから、SD-2と同様、斜面上方から建物群への流水を防ぐ目的および湿度を下げるための施設と考えられる。

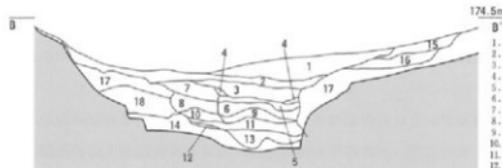
溝の埋土中から奈良時代に属する須恵器・土師器や鉄滓・騎羽口片が出土しており、溝の時期を示すものと考えられる。また、掘立柱建物跡についても前述の理由により、同時期と考えられる。

H. 谷部

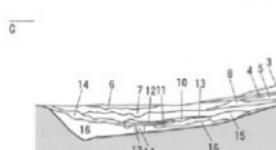
調査区中央部で、昭和62年度調査区との境付近に存在し、北西~南東方向にのびる幅約6~12mの谷状遺構である。延長約40mを検出・掘削した。谷状遺構の南東部はそのまま谷となり、遺跡南側の入き



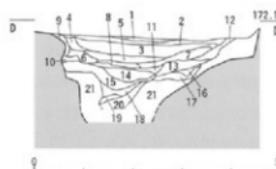
1. 2.377/4 浅黄色 粘壤砂 鉄分含む。
2. 2.375/4 黄褐色 粘粒シルト-粘砂 マンゴン含む。
3. 2.375/4 上ぶら黄褐色 シルト質粘砂
4. 2.374/3 オリーブ褐色 粘砂シルト-粘砂 マンゴン多く含む。
5. 2.376/1 緑灰色 粘砂 鉄分・マンゴン含む。
6. 2.376/1 灰色 粘粒シルト-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
7. 2.375/1 黄褐色 シルト質粘砂 上部・粘分・マンゴン含む。
8. 2.375/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン含む。
9. 2.375/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン含む。
10. 2.375/1 黄褐色 シルト質粘砂 鉄分・マンゴン含む。
11. 2.376/6 明黄褐色 粘砂
12. 2.377/2 灰白色 粘砂
13. 2.376/6 明黄褐色 粘砂
14. 2.377/2 灰白色 粘砂
15. 2.377/2 灰白色 粘粒シルト 鉄分含む。



1. 2.375/4 黄褐色 シルト-粘砂 鉄分・マンゴン含む。山からの流入土。
2. 2.375/4 黄褐色 シルト-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
3. 2.375/4 黄褐色 シルト-粘砂 マンゴン含む。山からの流入土。
4. 2.375/1 灰色 シルト質粘砂 鉄分・鉄分・マンゴン含む。
5. 2.376/6 明黄褐色 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
6. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン含む。
7. 2.376/1 黄褐色 シルト質粘砂 粘砂・鉄分・マンゴン含む。
8. 2.377/2 灰白色 粘粒シルト 鉄分含む。
9. 2.374/1 灰色 粘粒シルト 土層 含む。マンゴン含む。
10. 2.377/1 明緑灰色 粘粒シルト 鉄分含む。
11. 2.375/1 オリーブ褐色 2.374/1 灰色 粘粒シルト 灰・土層含む。
12. 2.375/1 オリーブ褐色 粘土・粘砂 灰・土層含む。
13. 2.374/1 灰色 2.376/1 粘砂 中層・土層・土層 含む。
14. 2.377/1 明緑灰色 粘粒シルト 鉄分含む。
15. 2.376/6 明黄褐色 粘砂シルト
16. 2.376/4 明黄褐色 粘砂シルト 鉄分含む。
17. 2.377/4 浅黄色 粘砂シルト 鉄分含む。
18. 2.377/4 浅黄色 粘粒シルト 鉄分含む。



1. 2.376/4 にぶら黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
2. 2.377/8 明黄褐色 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
3. 2.376/4 にぶら黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
4. 2.376/4 にぶら黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
5. 2.376/4 明黄褐色 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
6. 2.376/1 灰色 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
7. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
8. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
9. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
10. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
11. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
12. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
13. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
14. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
15. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
16. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
17. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。
18. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン少量含む。



1. 2.376/1 黄褐色 粘砂シルト 鉄分・マンゴン含む。
2. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン含む。
3. 2.376/1 灰色 粘砂シルト-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
4. 2.376/1 灰色 粘砂シルト-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
5. 2.376/1 黄褐色 粘砂シルト-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
6. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン含む。
7. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン含む。
8. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン含む。
9. 2.376/1 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン含む。
10. 2.377/8 黄褐色 粘砂 鉄分・マンゴン多く含む。
11. 2.377/1 灰色 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
12. 2.376/1 粘砂 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
13. 2.377/2 灰白色 粘砂 鉄分・マンゴン含む。
14. 2.376/1 粘砂 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
15. 2.376/1 粘砂 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
16. 2.376/1 粘砂 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
17. 2.376/1 粘砂 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
18. 2.376/1 粘砂 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
19. 2.376/1 粘砂 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
20. 2.376/1 粘砂 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
21. 2.376/1 粘砂 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン含む。
22. 2.376/1 粘砂 粘砂-粘砂 鉄分・マンゴン含む。

第32図 谷部美洲図



第33図 谷部土器出土状況実測図

な谷につながってゆく。

谷状遺構の埋土は期的に大きく奈良時代と平安時代中期の2時期に分かれる。

奈良時代の土器を包含する層は最下層と呼称し、谷部の中央部付近で非常に多く出土している。B-B'断面では、第9～第13層にあたり、灰色・明緑灰色・オリーブ灰色系の細粒シルト～極細粒砂で、1m前後の厚みがある。それらのうち、土器を包含しているのは第9・11・13層である。出土土器には須恵器の杯・蓋・壺・鉢のほか、土師器の壺・皿・鍋や製塩土器がある。特に大型甕は、谷部中央北寄りの谷底でほぼ1個体分の破片が集中して検出されている。谷部南東部では土器はあまり出土しなかったが、D-D'土層断面では第13層よりも下層にあたる。また、A-A'断面では第7層が包含層にあたる。検出面から奈良時代の最も深い谷底までの深さは約3.0mである。谷底の幅は約1.2mを測る。

一方、平安時代中期の土器を包含する層は2面あり、上層はB-B'土層断面図の第2層にあたり、黄灰色のシルト質極細粒砂で、土器は西側で多く検出されている。第2層の上には黄褐色の山からの流土が堆積している。

下層はB-B'土層断面図の第7層にあたり、褐灰色のシルト質極細粒砂で、その上には第3層にあたる黄褐色の山からの流土が堆積している。D-D'断面では第5層が包含層である。C-C'土層断面図では第7・8層にあたり、間層を挟んで下層の第11・13層は炭層である。その直下には柱穴4本が長方形に谷部を横断するようなかたちで検出され、橋状の遺構と考えられる。谷部横断方向の間隔は2.1・2.2m、幅は0.8・0.65mである。橋状遺構の時期は奈良時代とするのが妥当と思われる。

平安時代中期の出土土器には須恵器の壺・壺などのほか、土師器の鈿釜がある。

平安時代の谷状遺構は、検出面から谷底までの深さは約2.3m、谷底の幅は約1.2mである。

第2節 遺物

1. 遺構出土遺物

2 (SB-3 竈出土)

杯A。口径13.6cm、器高4.0cm、底径9.3cm。口縁部はわずかに外反する。底部はヘラ切りで、体部と底部の境は丸く不明瞭である。

3 (SB-3・SE-1・SD-13出土)

残存高9.1cm、高台径8.1cm。卵形の体部に高台を付す。口縁部を欠くが、口縁部が外反する長頸の平城宮分類壺L形態になろう。肩部に緑色に発色した降灰の跡を残す。また、高台底面に重焼きの痕跡を残す。

4 (Bトレンチ壕際柱穴出土)

口径13.7cm、器高4.0cm、底径7.95cm。口径に対して底径が小さく、体部は斜めに立ち上がる。口縁部外面に重焼きの痕跡を残す。底部はヘラによる切り離しの後、ナデ調整を行っている。

5 (SE-1 出土)

杯B蓋。口径14.8cm。扁平な宝珠形のつまみを付す。大きく焼き歪み、天井部外面全体に自然釉が掛かる。

6 (SE-1 出土)

壺。卵形の体部に高台を付す。頸部に円蓋閉塞の痕跡を残す。口縁部を欠くが、口縁部が外反する口頸部をもつ平城宮分類壺L形態になろう。底部外面に別個体の破片が融着している。

7 (出土遺構不明)

土師器鉢である。体部は浅い碗形で、口縁部は外反しながら開く。口縁部には面をもち、端部はやや上方に持ち上がっている。調整は体部外面がタテハケ、体部内面の上部は横方向の板ナデ、体部内面の下部は同心円当て具痕を残している。口縁部外面から口縁部内面の端部際まではヨコナデ、口縁部内面はヨコハケである。口径は39.6cmである。

8 (SD-2 出土)

土師器鉢である。体部は浅い碗形の底部から口縁部まではほぼ真っ直ぐ上方に立ち上がる。口縁部は尖り気味で、ナデにより内面がやや凹んでいる。口縁部には片口をもっている。調整は体部外面がタテハケ後底部から体部下位にかけて斜めから横方向のハケ、体部内面は斜め方向のケズリ、口縁部はヨコナデである。口径は24.6cmである。

9・10 (SD-3 出土)

杯B蓋。口径はリガ16.8cm、10ガ15.9cmである。扁平な笠形の天井部に宝珠形のつまみを付す。頂部にヘラ削りを施す。

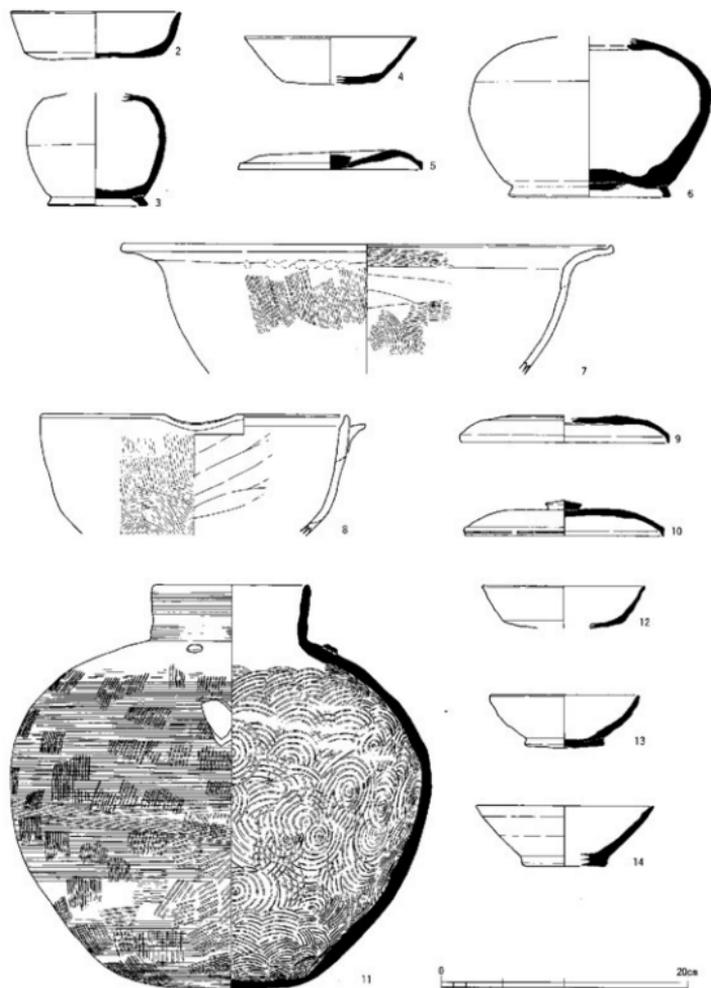
11 (SD-5 出土)

壺。口径12.5cm、器高33.4cm。直口の口頸部に球形の体部をもつ。肩部に円形浮文を施す。外面は平行叩きの後、横方向のカキ目を施す。内面に青海波の当具痕が残る。

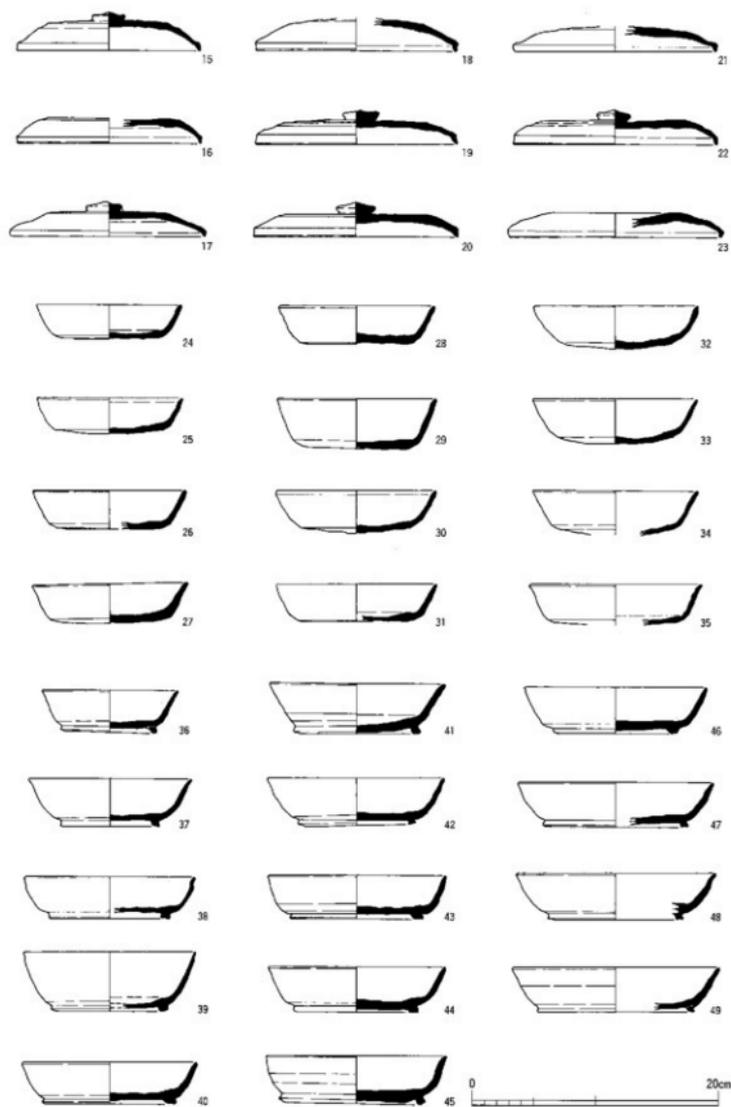
12 (SD-9 出土)

杯A。口径13.1cm、器高3.4cm、底径10cm、底部はヘラ切りで、外面は外側にふくらむ。

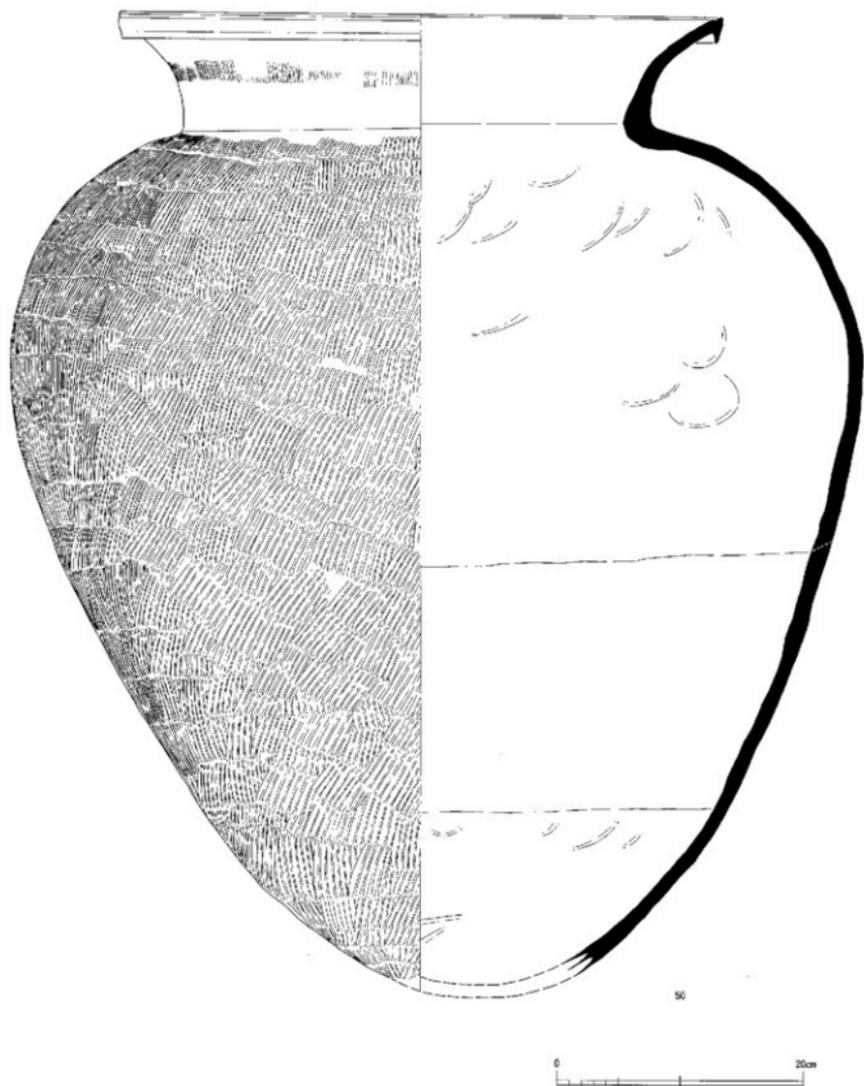
13 (SK-23 出土)



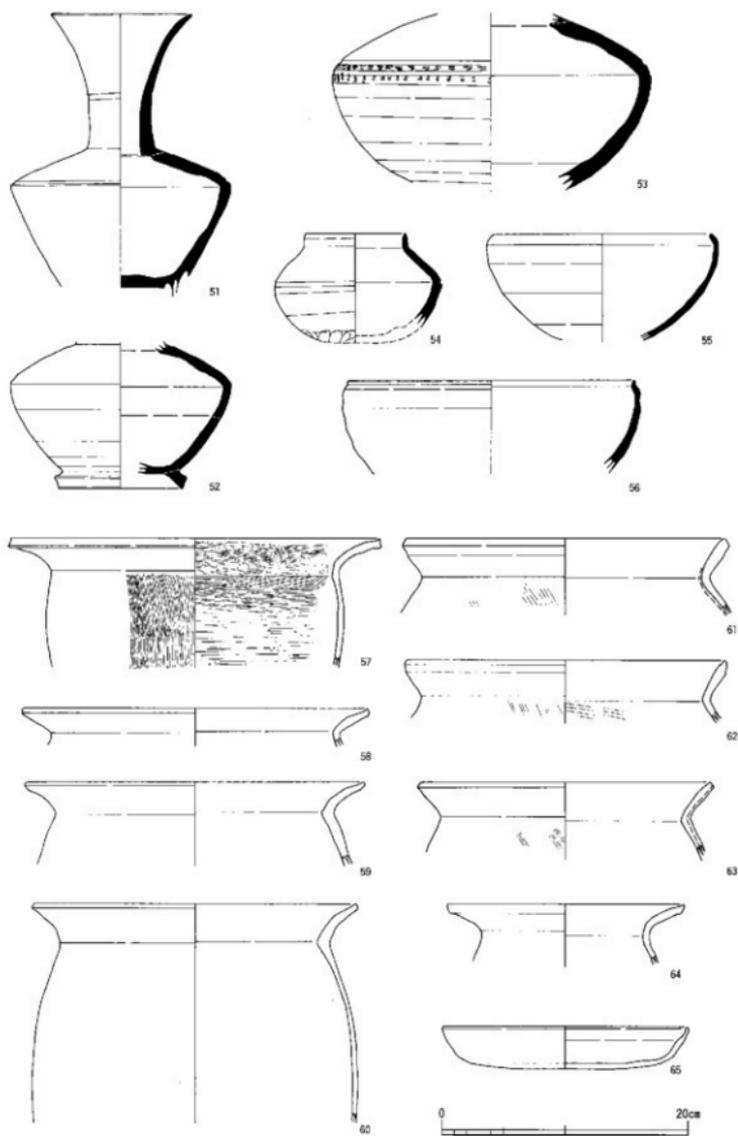
第34图 漳浦出土土器 (SB-3、SE-1、SD-2·3·5·9·13、SK-23、P-5)



第35图 谷部最下层出土须惠器(1)



第36图 谷部最下层出土须惠器(2)



第37图 谷部最下層出土土器(3)

碗。口径12.0cm、器高4.3cm、底径6.0cm。底部はヘラ切りの平臺をもつ。

14 (P-5出土)

碗。口径14.3cm、器高5.0cm、底径7.0cm。体部は直線的に立ち上がり開き、底部はヘラ切りの平臺をもつ。平臺台の高さは0.8cmである。内面に使用痕跡を残す。

15~23 (谷部最下層出土)

杯B蓋。口径14.7cm~17.0cm。天井部は頂部が扁平な笠形を呈する。つまみは扁平な宝珠形である。頂部はヘラ削りを施す。

24~35 (谷部最下層出土)

杯A。29を除く一群は口径11.5cm~13.1cm、器高3.1cm~3.7cmで、底部はヘラ削り後、ナデ調整を施す。底部と体部の境は丸く不明瞭である。このうち、31は体部外面および底部外面に墨が付着している。29は口径12.7cm、器高4.2cmで、器高がやや高く、底部はヘラ削り後、ヘラ削りを行っている。

36~49 (谷部最下層出土)

杯B。口径10.7cm、器高3.5cmの小型のもの(36)、口径13.2cm~14.6cm、器高3.4cm~4.0cmのもの(37~38、40~46)および口径15.7cm~16.6cm、器高3.6cm~3.8cm(47~49)の3種がある。このほか39は口径13.8cm、器高4.9cmで、器高が高く、器壁も薄く仕上げている。

50 (谷部最下層出土)

甕。口径48.6cm、復元高81.6cm。卵形の体部に大きく開く口頸部をもち、口縁部は下方に垂下する内面に当具痕を残す。叩きは頸部に及んでいる。

51・52・53 (谷部最下層出土)

長頸壺。51は口径11・5cm。算盤玉形の体部にラッパ状に開く口頸部をもち、口頸部および肩部と体部の境にそれぞれ1条の沈線を施す。52は口頸部を欠く。体部は算盤玉形を呈するが、肩部と体部の境には沈線を有しない。外方に踏ん張る高台をもつ。53は口頸部と底部を欠く。肩部と体部の境に2条の沈線と列点文を巡らす。体部外面に回転ヘラ削りを行っている。

54 (谷部最下層出土)

短頸壺。口径8.0cm。体部中央に1条の沈線を巡らす。体部下半は回転ヘラ削りを行い、底部は手持ちのヘラ削りを行っている。

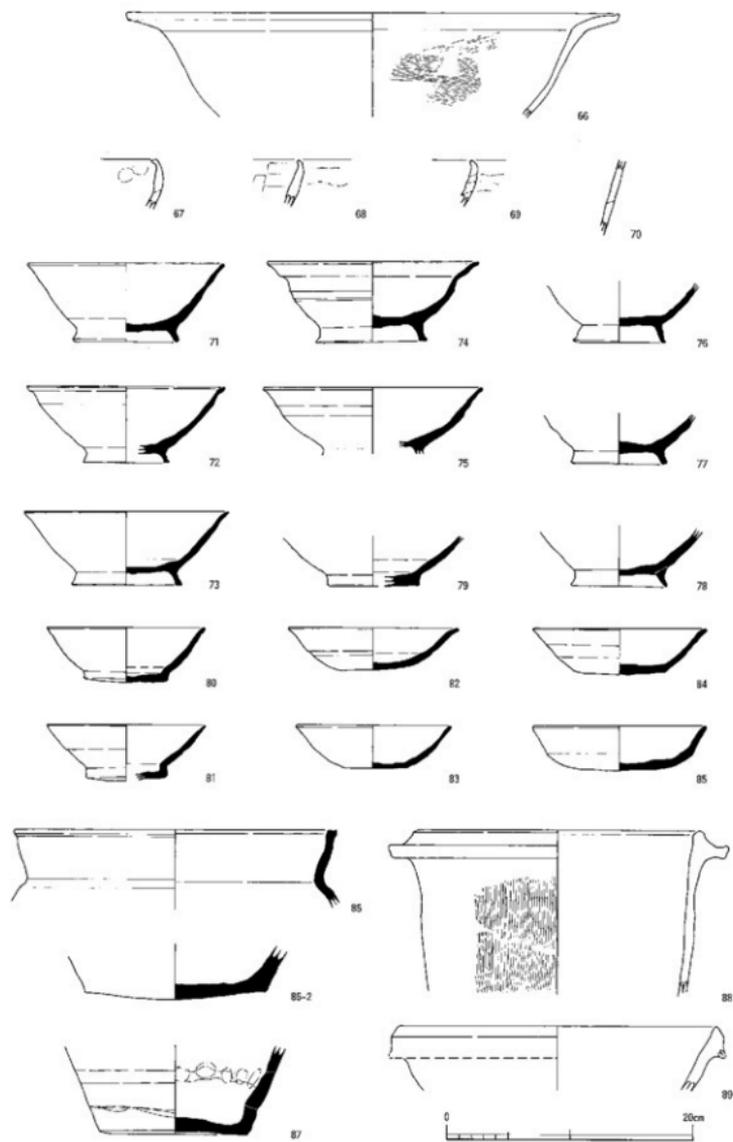
55・56 (谷部最下層出土)

鉄鉢形の鉢である。55は口径15.6cm。底部を欠く。口縁部は内側に湾曲する。内外面とも調整はナデのみで、ヘラ削りは行われていない。56は口径23.0cm。底部を欠く。口縁部を上方につまみ上げる。内外面ともナデ調整である。

57~64 (谷部最下層出土)

土師器甕である。57・58・60は口縁部が外反し、端部に面をもっている。59・60は口縁部が外反し、端部が尖り気味になっている。61~63は口縁部がほとんど外反せずにやや上方に開く。端部には面をもつが、口縁部外面の端部際のヨコナデが強いため、端部がややすぼまったようになっている。調整については摩滅したものが多く、残りの良い57では体部外面がタテハケ、体部内面がヨコハケ、口縁部内面がヨコハケ、口縁部外面から口縁部内面の端部際までがヨコナデである。口径は29.8~23.3cmの大型のもの、口径19.0cmの小型のものがある。

65 (谷部最下層出土)



第38图 谷部最下层・下层出土土器

土師器杯である。口縁部内面に凹みをもち、端部は内側に丸く折り返されたようになっている。外面は摩耗しているため、調整はよくわからない。口径は19.7cm、器高は3.6cmである。

66 (谷部最下層出土)

土師器碗である。体部は浅い碗形で、口縁部はわずかに外反しながら開く。口縁端部には面をもち、ヨコナデにより端部はやや上方に持ち上がっている。調整は摩滅によりさだかではないが、体部内面にはヨコハケを残している。口径は39.9cmである。

67~70 (谷部最下層出土)

製塩土器と推定される。口縁部付近は内湾し、端部は内側に倒れて尖っている。調整は体部内面がナデで、外面はほとんど調整がなされず、粘土紐の接合痕を残している。器壁は6~8mmとやや薄い。胎土には白色砂粒を含み、焼成は還元近く、比較的硬質である。

71~78 (谷部下層出土)

ヘラ切りの底部に輪高台を付した塊である。口径16.0cm~17.8cm、器高6.0cm~6.8cmで、高台の高さ1.0cm~1.2cmを測る。体部が直線的に斜め上方に立ち上がるもの(71・73)と、やや湾曲して立ち上がるもの(72・74・75)がある。また、72・73は口縁端部をわずかに外反させる。このほか、74のように口縁部を大きく外反させ、体部中央に沈線を施すものがある。

79~81 (谷部下層出土)

碗。いずれも底部に回転ヘラ切りの平高台をもち、体部は直線的で外上方に開く。80・81は小形の碗で、80が口径12.5cm、器高4.5cmで、81が口径12.8cm、器高4.6cmである。ともに底部内面は外側からの押圧によって器壁が内側に入り段を生じている。79は口縁部を欠くが、底部内面に段を持たない。

82~85 (谷部下層出土)

杯A。口径12.4cm~13.9cm、器高3.5cm~3.7cm、底径5.2cm~7.3cm。口径に比して底径が小さいために、体部が斜めに立ち上がり、口縁部が大きく開く。いずれも底部外面にいずれも回転ヘラ切り痕を残す。

86 (谷部下層出土)

口径26.0cm。86-1と86-2は直接接合はできないが、胎土・色調から同一個体と判断できるものである。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は平型である。底部内面にナデ調整が行われているので、器種は壺よりも鉢の可能性が高い。

87 (谷部下層出土)

壺底部。底径11.1cm。粘土塊を円板形にして底部を形作り、その上に粘土線を巻き上げている。底部外面の屈線には使用中に接地面との擦れた痕がある。

88・89 (谷部下層出土)

土師器羽釜である。砲弾形の体部をもつと思われる。88は体部から口縁部にかけて、上方に立ち上がり、端部は面をもつ。口縁部外面直下にしっかりした鈎をもつ。調整は外面がタテハケ、口縁部はヨコナデである。口径は22.7cmである。89も残りが悪いが同様のものであろう。

98 (SD-3出土)

SD-3の東端部より出土した羽口の先端部である。財部以下は欠損している。

残存している先端部の表面は熔化し、ガラス化している。中央には孔が穿たれ、孔径は1.7cmを計る。残存する先端部の外径は4.9cm、厚さは0.7~1.3cmと左側部分のガラス化が進み、厚みが薄くなっている。

る。

2. 包含層出土土器

90・91

杯B蓋。90は口径15.5cmで、天井部は笠形に丸く膨らむ。天井頂部はナデ調整を施す。91は口径15.3cmで、扁平な笠形を呈する。つまみを欠く。天井部外面全体に降灰が認められる。頂部にヘラ削りを施す。

92

杯A。口径17.5cm、器高3.7cm、底径8.3cm。体部と底部の境は丸く不明瞭で、底部外面は外側にふくらむ。底部の切離しはヘラ切りである。

93

杯A。口径13.6cm、器高3.1cm、底径9.2cm。底部はヘラ切り後ナデ調整を行なう。体部と底部の境は不明瞭である。

94

杯B。口径13.5cm、器高3.9cm、底径9.8cm。高台は外方に短く踏ん張る。

95

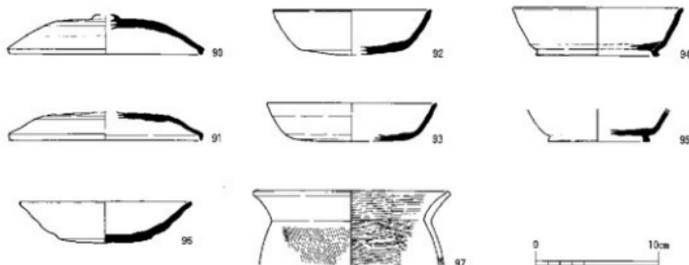
杯B。高台径8.0cm。口縁部を欠く。高台は底部周縁よりやや内側に付けられている。

96

杯A。口径13.8cm、器高3.4cm、底径7.4cm。口径に比して底部径が小さく、体部が大きく斜め上方に開く。底部はヘラ切り不調整。

97

土師器甕である。口縁部はやや外反しながら開き、端部は丸味をもつ。調整は体部外面がタテハケ、口縁部外面がヨコナデ、内面がヨコハケである。口径は15.5cmである。

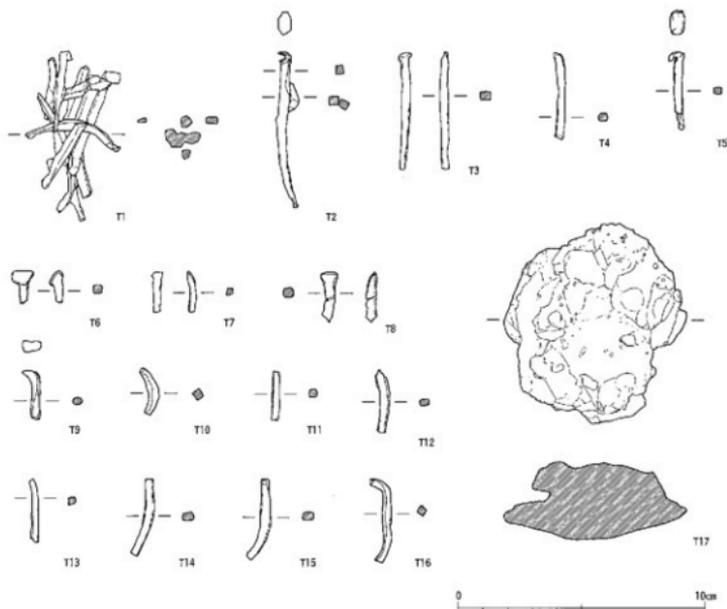


第39図 包含層出土土器

3. 金属器

鉄製釘

- T1: 11本の鉄製釘が束となって錆化したものである。軀体としての性格は不明である。各釘の形状は、角柱状を呈し、頭部を有するものは3本あり、ともに片側に小さく折り曲げる折頭釘である。頭部の厚さは0.5mm程度である。先端部分はすべて欠損している。腐食はない。全体の長さ約70mm、幅38mmを測る。最大の現長は45mmを測る。各釘の断面は長方形・方形を呈する。北地区F-7区SB-3床面直上出土。
- T2: 体部は湾曲し、頭部はL字形に小さく折り曲げた鉄製の折頭釘である。先端部分を欠損する。腐食はない。現長63mm、頭部近くの断面は方形を呈し、3mm×3.5mmを測る。上部から3分の1のところL字形に屈曲した鉄釘片の体部が附着している。北地区F-4区SB-3床面直上の出土である。
- T3: 体部は中位で湾曲し、頭部はL字形に折り曲げた鉄製の折頭釘である。若干基部が残るのみである。先端部分は欠損するが全体の形状のわかるものである。腐食はない。現長47.5mm、上部から3分の1のところ断面は方形を呈し、3.5mm×4mmを測る。北地区F-12・13・14区SB-3床面直上出土。
- T4: 体部中位まで遺存する鉄製の折頭釘である。頭部はほとんど欠損しているが一部L字形を呈している。先端部分を欠損している。腐食はない。現長85mmを測り、直線的に延びる。断面は方形を呈し、一辺約3.5mmを測る。北地区F-3区SB-3床面直上出土。
- T5: 角柱状を呈し、頭部をL字形に折り曲げた鉄製の折頭釘である。体部の中位から先端部分は欠損する。腐食はない。現長3.2mm、断面は方形を呈し、3mm×3.5mmを測る。北地区F-3区SB-3床面直上出土。
- T6: 頭部と若干の体部をもつ鉄製の折頭釘である。L字形に折り曲げた頭部は体部に密着した状態である。先端部分は欠損する。腐食はない。現長13.5mm、断面は方形を呈し、一辺3mmを測る。北地区F-12・13・14区SB-3床面直上出土。
- T7: 体部のみの鉄製の角釘である。頭部及び先端部分を欠損している。全体の形状等は不明である。腐食はない。現長16mm、断面は方形を呈し、2.5mm×3.5mmを測る。北地区F-8区SB-3床面直上出土。
- T8: 頭部から体部へと伸び、頭部は折り曲げた鉄製の折頭釘である。先端部分は欠損する。全体の形状は不明である。腐食はない。現長20.5mm、断面は現状では楕円形を呈す、4.5mm×4.5mmを測る。北地区F-16区SB-3床面直上出土。
- T9: 頭部から体部へと伸びる鉄製の角釘である。頭部はL字形に折り曲げている。先端部分は欠損する。全体の形状等は不明である。腐食はない。現長20mm、断面は現状では楕円形を呈し、3mm×4mmを測る。G-11区SB-3床面より出土。
- T10: 半月形を呈する体部のみの鉄製の角釘である。頭部及び先端部分は欠損し、形状等は不明である。腐食はない。現長17mm、断面は方形をなし、一辺5mmを測る。北地区F-2区SB-3床面直上出土。
- T11: 体部のみの鉄製の角釘である。頭部及び先端部分を欠損する。全体の形状等は不明である。腐食はない。現長20mm、断面は方形をなし、一辺3.5mmを測る。北地区SB-3床面直上出土。



第40図 SB-3 他出土金属器等

- T12：体部は緩やかに湾曲した状態を示し、先端部分に向けて細くなる鉄製の角釘である。頭部及び先端部分は欠損する。全体の形状等は不明である。腐食はない。現長26mm、体部中位において断面は長方形を呈し、3.3mm×4mmを測る。北地区F-10区SB-3床面直上出土。
- T13：角柱状を呈する体部で、上部は細い。頭部及び先端部分は欠損する。全体の形状等は不明である。腐食はない。現長25mm、断面は方形をなし、一辺3mmを測る。北地区F-8区SB-3床面直上出土。
- T14：角柱状を呈する体部で湾曲する鉄製の角釘である。頭部及び先端部分は欠損する。全体の形状等は不明である。腐食はない。現長31mm、断面は方形をなし、3.5mm×4.5mmを測る。北地区F-11区SB-3床面直上出土。
- T15：角柱状を呈する体部で、半月形に湾曲する鉄製の角釘である。頭部及び先端部分は欠損し、全体の形状等は不明である。腐食はない。現長33mm、断面は方形をなし、3.5mm×4.5mmを測る。北地区F-1・2区SB-3床面直上出土。
- T16：角柱状を呈する体部で、両端が屈曲する鉄製の角釘である。頭部及び先端部分は欠損する。全体の形状等は不明である。腐食はない。現長34mm、断面は方形をなし、中位において一辺4mmを測る。北地区F-12・13・14区SB-3床面直上出土。
- 釘は、全長を知りうる資料はなく、すべて先端部分を欠損していた。最長のものは全長63mm以上である。形態は、先端部分を平らに叩きのばしたのち、L字形に片側に折り曲げる折頭釘であり、体部は角

柱状を呈し、一辺3mm以上の方形等の断面をもつものである。その他ここには図示することができない鉄釘が多数出土していることを記しておきたい。

椀形鉄滓 (T17)

SX1内より出土した鉄滓である。表面の一部を除いた全面に鉄錆が浮く。鉄滓は上下2段構造になっている。おそらく鍛冶炉内で行なわれた加熱作業で下段の鉄滓が生成され、それが冷却され凝固した段階で、炉内から除去されずに再加熱作業が行なわれ上段の鉄滓が生じたものと理解している。右端側に折損面が確認できる。

表面は5mm大の小石を積み、縁辺部分に瘤状の隆起が認められる。中央部は平滑で、1mm前後の孔が多数。底部は炉床粘土が付着している。炉床粘土は、極細砂～細砂を多く含むが、まれに粗砂が混じる。

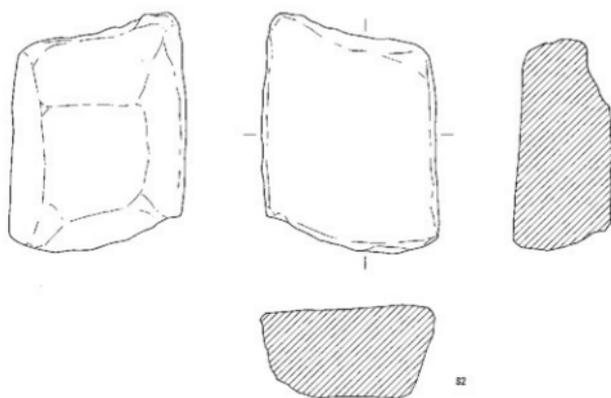
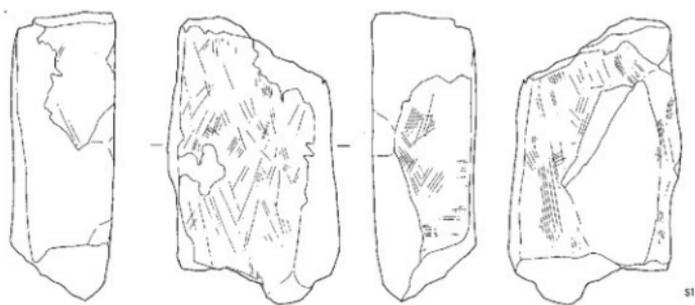
このほか、3片出土している。うち2片は折損により遺存状況が悪く、形状が復元できないが、T17よりは多孔質化が進行した鉄滓である。

全長8.2cm、幅7.5cm、最大部の厚さ3.2cm、重さ約130gである。

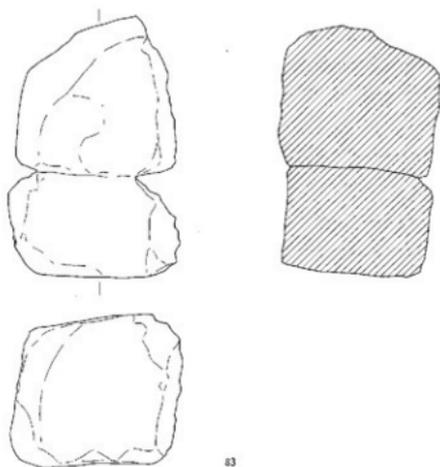
4. 石器

S1は凝灰岩質の石材を用いた定形的な直方体の砥石である。破損が著しく両端部を欠く。表裏面と両側面の4面が砥面として使用されており、細かな線状痕が観察できる。表面には鋭利な刃物によるV字形の短い線状痕が残されている。裏面の一部には幅が5～1cmで断面が浅いじ字状を呈する溝状の使用痕があり、丸刃の彫刻刀のようなものを磨いたものと推測される。砥面は一見平坦であるが、詳細に観察すると素材の凹凸に対応した微起伏があり、裏面の大きな窪みも欠損ではなく、使用時から窪んでいたものである。左側面では表皮部分の剥落が大きい。SD14東部の埋土中から出土した。

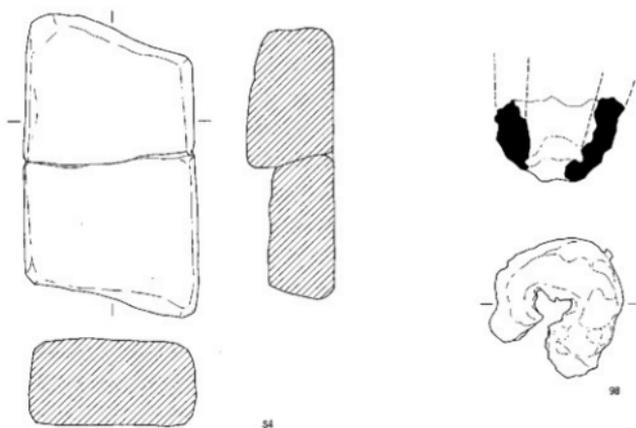
S2～S4は砂岩と思われる粗粒石材の厚みのある板状あるいは直方体状の礫である。いずれにも風化によるためか、明瞭な使用痕は観察できないが、S2とS3は熱を受けて部分的に黒変している。S2とS4は谷部から、S3は遺構面直上から出土した。



第41圖 出土石器 (1)



83



84

98



第42図 出土石器(2)他

第3章 ま と め

第1節 陥し穴について

今回の調査の結果、陥し穴と考えられる土壌が数多く検出された。

陥し穴は生活の場から離れて設置されることを通常とし、また、その機能により、土器などが伴うことが非常に少ない。そのため時期の比定には困難が伴う。本遺跡においても包含層から僅かに縄紋土器の細片1点が出土したのみであるが、検出土壌の時期を縄紋時代前期末～中期初めと推定した。なお、SK-3の埋土に含まれていた炭化物の放射性炭素年代測定を国地球科学研究所に依頼した結果、BC 6,435 (BC 6,690～BC 6,170)年という暦年代を載っている。

さて、検出した土壌のうち、陥し穴と判断した根拠には、杭穴の存在、平面・断面の形、深さのほか埋土の状況がある。まず、杭穴が存在するのはSK-4・8・11・12・14・15・28・30～33の11基である。これらの土壌は平面形が円～楕円形で、径1.1～1.75m、底が平坦なものがほとんどで、壁面が垂直に近く、深さはSK-28を除くと50～100cmである。SK-28は浅く底面が丸みをもっているためやや躊躇するが、含めておくことにする。土壌埋土中に微細炭化物を含むものが5基認められる。なお、杭穴の数・位置について規則性は無いようであるが、中心に存在するものが多い。

次に、平面・断面などの形や深さで判断できるものには、SK-2・5・6・25・34の5基である。これらは平面が円形や楕円形がほとんどで、壁面は直線的に垂直に近く、底面が大きく平坦であり、杭穴が存在するものと共通している。深さは65～85cmで、長径は1.3～1.8mである点も共通しており、土壌埋土中に微細炭化物を含むものが3基認められる。SK-3は壁面が斜めで、底がやや丸く小さいという点はあるが、平面形・規模・深さの点から陥し穴と判断すべきであろう。また、SK-29は底がやや丸く、平面規模もやや小さいようだが、埋土中に炭化物を含んでおり、共通性はある。一方、SK-17は深さの点では共通するものの、平面形態や規模においてかなり異なっている。しかし、途中から垂直に落ちる断面形は、杭穴を有するSK-4にも認められ、これも陥し穴として捉えておきたい。この断面形はSK-7にもあてはまり、これも陥し穴として捉えるべきであろう。

以上述べた19基以外には、SK-9・10が底面は丸いが、形態・規模から陥し穴の可能性があり、SK-16は浅いが土層の堆積状況から、SK-18は壁面が斜めで底面が丸く狭いが、形態の点から、SK-27は浅く歪であるが、陥し穴の可能性はある。SK-1も同様である。その他の土壌については、SK-21・24が陥し穴との判断に若干の可能性を残す程度である。

一方、これら以外の土壌については、SK-13は浅く、壁面も傾斜を持っているため、陥し穴とするには躊躇する。SK-20はその形態・深さなどから、陥し穴ではないと考えられる。一方、SK-19・23・26・35については判断できない。

以上の判断により、可能性も含めた本遺跡の陥し穴27基について検討する。

まず、杭穴が存在するもののうち、SK-15やSK-30・31では土壌の外側に上面から1段下がったステップ状の張り出し部分が存在する。この張り出し部は土壌の一部にのみ存在し、SK-31では23cmと浅いが、SK-15では土壌検出面から面からステップまでの深さは38cm、SK-30では42cmである。この部分はその形状から、土壌の崩落によりできたとは考えにくく、人為的に掘り込まれた可能性が高い。これらの陥し穴すべてに杭穴が存在することから、この土壌への出入りのための施設、つまり、杭

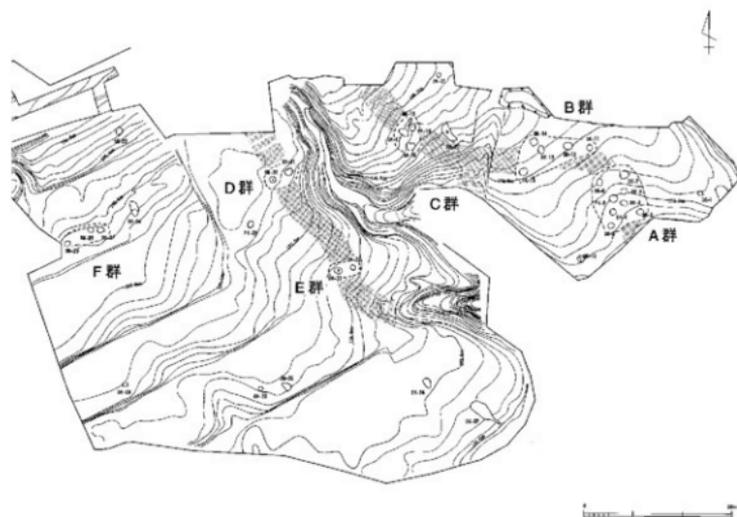
を立てる作業および、捕えた動物を引き上げる作業を行うための施設と考えておきたい。後者の機能も考えておくことで、杭穴が存在しないSK-17にも認められる理由となるであろう。

本遺跡の陥し穴の分布状況を一言すると、広い範囲に疎らに存在するのではなく、いくつかの群がある状況が窺取できる。すなわち、東部のSK-2~9までの8基のA群で、SK-10も含んでも良いかもしれない。その北西側斜面上のSK-11・12・14・15の4基のB群、その東側のSK-16~18の3基のC群、中央の谷部を挟んで西側のSK-30・31の2基のD群、その南東側のSK-32・33のE群2基、斜面上側西端のSK-27~29のF群3基で、SK-24も含めても良いかもしれない。

A~E群の位置はこの丘陵の尾根稜線上ではなく、谷に面した傾斜変換線近くに位置する。谷部には水場もあり、捕獲目的の動物が鹿や猪であるとすれば、鹿の餌となる草のほか、猪が食べる蟹・蛙・田螺や草の根なども水場やその付近に生息していたと思われ、動物が往来する「けものみち」が存在していたはずである。陥し穴はそれらの動物を捕獲する目的であるため、経験上「けものみち」部分に造るのが自然と思われる。したがって、これらの群を結んだ線が「けものみち」に相当する部分と思われる。また、陥し穴が自然に埋まりにくい地形を選択することも必要であったと思われる。その地形は本遺跡では台地上であった。したがって、本遺跡では谷部への地形変換線に沿った台地上で、なおかつ「けものみち」部分に陥し穴が陥り込まれたものと推定されるのである。

なお、F群については一見したところでは以上の条件には合致しないように見えるが、第43図をみると、西側の大きな谷への傾斜変換線のすぐ上であることがわかる。

今後、陥し穴の形態的研究とともに群集のしかた、その位置についてもただ単に丘陵や平坦地といった巨視的な地形ではなく、微地形での検討も必要であると思われる。また、捕獲目的の動物の生態についてもあわせて考える必要がある。本遺跡での検討がその一助となれば幸いである。



第43図 陥し穴の群在状況とけものみち推定図

第2節 奈良時代の遺構について

縄下ケ谷遺跡の全面調査の結果、奈良時代の遺構については、掘立柱建物跡を重複も含めて8棟検出した。ほかに竪穴住居跡・井戸・鍛冶炉・溝・谷状遺構などもある。また、時期不明であるが、木棺墓も検出した。検出した遺構は種類が多く、比較的小コンパクトにまとまっていることから、当時の様子ある程度復元することが可能であると思われる。

そのためにはまず、最も多く検出されている掘立柱建物跡について整理することが必要と思われる。

まず、調査区東部にはSB-1およびSB-2の2棟の掘立柱建物跡が存在する。この2棟は約15mの距離を置いているが、ともに3間×2間の偏柱建物で、東西棟である。しかも東側に塀があるという点も類似する。その棟方向もSB-1がN75°E、SB-2はN80°Eで、その差は5°と僅かであり、ほぼ同一方向の建物跡として捉えてもよいようである。この2棟の建物で大きく違うのはその面積である。SB-1は面積が12.24㎡、SB-2は21.47㎡とその差は約9㎡である。この差が起因するのは柱間の距離である。SB-1は各桁間の平均値が1.35m、各梁間平均では1.52mであるのに対し、SB-2では各桁間平均で1.82m、各梁間平均は2.00mを測る。SB-2の方が桁・梁の各間でともに約50cm長く、それに伴って柱穴の直径も10~15cm大きい。SB-1の柱穴直径は35~40cm、SB-2では平均直径が50cmである。柱穴直径では差は認められなかったが、柱穴掘り形が大きいことは柱も太いことを意味していると思われ、建物の上部が大きく重くなっている分差があったものと思われる。

次に、西部の建物群について検討を加えてみる。西部建物群では、棟方向が判明した建物は少ないが、東西・南北に近い方向の建物ばかりである。東西に並ぶ柱列でその方向を詳細に調べてみると、SB-4でN82°E、SB-5でN73°E、SB-6でもN75°E、SB-7ではN72°E、SB-8でN76°E、SB-9でN72°Eである。SB-4以外はN72°EからN76°Eの間におさまり、その差は僅かに4°である。また、この方向は東部建物群のうち、SB-1と同一方向であることがわかる。また、SB-4についてはSB-2との差が僅かに2°となっている。すなわち、東部建物群と西部建物群は約80mの距離を隔てているにもかかわらず、同一方向であることは、同時期に存在していた建物として扱うことの妥当性が高いものと判断されよう。さらに、SB-1・2およびSB-4~9までは同一方向の建物として扱うことも許されると思われる。ちなみに、その角度の差は最大で10°である。

西部建物群の面積ではSB-4が最も小さく7.99㎡、SB-5は11.02㎡、SB-6は15.8㎡、SB-7は15.11㎡、SB-9は13.5㎡である。これらのうち、SB-9を除いた4棟はすべて2間四方の偏柱建物跡で、SB-6とSB-7はほぼ同じ面積となっている。SB-6・7は重複した建物で、建て替えが行われており、前後関係は不明であるが、建て替え後もほぼ同じ面積・同じ方向であることは、建物の性格等が変わっていないことを示していると考えられる。東側の塀が両方の建物にも対応している可能性があると考えている理由である。ただし、SB-6の面積がSB-7よりも若干大きいのは、各柱間が10数cm大きいためであるが、柱穴の直径は逆にSB-7の方が10cm大きくなっており、規模と柱穴の大きさとの相関関係が逆になっている。一方、SB-4とSB-5では面積の差が約3㎡あるが、その差も柱間距離に起因していることは明白である。SB-4の平均柱間はSB-5よりも南北方向で20cm、東西方向で30cmも短くなっている。それとは逆に、柱穴の直径ではSB-4がSB-5よりも平均16cmも大きい。SB-5の柱穴直径と柱間距離の関係はSB-1やSB-2と比較しても相関関係にあるが、SB-4の60cmという直径は柱間距離に較べて非常に大きいことがわかる。この建物が内部に

重いものを入れるための倉庫であると考えられる。ただし、太い柱痕が検出できたわけではない。SB-7についても柱穴直径が52cmと大きい。柱間距離と柱穴直径をSB-2と比較すると、ほぼ同じであることから、特に問題は無い。むしろ、SB-6の柱穴直径42cmという値の方が、柱間距離が2mもあるのに対して小さすぎると思われる。

SB-9は建物群中最も北に位置する建物で、3間×1間という形態は他にはなく、何か特別の用途であったと思われる。柱穴の直径が28cmと小さいことは、上部構造もしっかりしたものではなかったことを示していると思われる。SB-9の南側に位置するSX-1が鍛冶炉である可能性が高いため、例えば炭などの資材置き場や運搬用の牛馬小屋といった性格を想像させる。

鍛冶炉SX-1はその形態が長方形であることと規模が大きいことから簡単な小鍛冶ではなく、ある程度溶解も行えるような施設の下部構造であることが考えられる。したがって、ここでの鍛冶作業には多量の木炭や鉄素材および作業道具が必要であると思われる。その資材置き場がSB-9であった可能性がある。また、加工前や出来上がった製品、作業道具などを保管しておく倉庫がSB-4であったのかもしれない。これらの点については機会を改めて詳述すべきであると考えられる。

一方、堅穴住居跡SB-3には住居跡の規模に比べて大きすぎるほどの竈を有しており、その熱効率を高めるための下部構造も認められる。この住居跡の床面から鉄釘がまとまって出土していることから、この住居跡の中で竈を利用して小鍛冶が行われていたことが推定できる。つまり、簡単な鉄製品加工についてはここで行われていたと考えられる。

以上のことから、梶下ヶ谷遺跡の奈良時代の遺構群については、そのすべてが鍛冶という生産行為に関係するものであったと判断する。

西部建物群群一帯は、鍛冶炉を中心として、その北・西・南を囲むように東西柱列がN74°E前後に揃った建物配置されている。北側の建物は資材置き場や牛馬小屋であったのかもしれない。西側には倉庫があり、建物で「コ」字形に囲まれた中央広場にある炉で鍛冶が行われ、山からの水の流入や湿度を下げるための溝が建物群の周囲に2重に巡らされている。また、生産などに必要な水は建物群の東側に掘られた井戸で賄い、井戸の脇には簡単な作業場も存在し、排水のため谷へと続く溝も掘られている。井戸の東には幅6～12m、深さ3mの谷があり、その谷を渡るための橋が架設されている。谷部の東には堅穴住居跡状の小鍛冶を行う作業小屋があり、さらに東側には東側に塀を持った掘立柱建物が2棟並び、その方向は西部建物群と同一である。

梶下ヶ谷遺跡は谷に面した台地上に存在し、奈良時代には鍛冶生産を行う遺跡であった。このように谷の奥や丘陵上に立地し、鍛冶生産に関わる遺跡が付近にも存在する。下西山遺跡は7世紀の堅穴建物跡10棟、掘立柱建物跡2棟、土壌と8世紀の土壌があり、橢圓形鍛冶滓・橢圓口・鉄製品・磁石などが出土し、土壌は鍛冶炉と考えられている。奈良山遺跡では7世紀中頃の堅穴住居跡・掘立柱建物跡各1棟、土壌4基があり、土壌は鍛冶炉と考えられている。また、橢圓形鉄滓・橢圓口・磁石・鉄製品が出土している。8世紀には掘立柱建物跡が1棟存在し、橢圓形鉄滓などが出土している。梶下ヶ谷遺跡や下西山遺跡、奈良山遺跡が存在するのは丘陵上であるとともに、周辺は低い丘陵および細い谷が入り組んだ複雑な地形であり、水田耕作を行う一般集落の立地としては極めて生産性の低い地形である。このような地に存在している遺跡が鍛冶関係の生産遺跡であると判断できたことは重要であり、北摂ニュータウン事業地以外でも、上記のような立地の遺跡については、鍛冶関係や林業に関する「柏」などといった、水田耕作以外の生産遺跡としての認識が必要であろう。

第3節 土器について

1. 出土須恵器について

当遺跡出土の須恵器には、帰属の不明なものもあるが、大きく奈良時代と平安時代の2つの時期に分かれる。

奈良時代の須恵器には、2・3・5・6・9～11・15～45・50～52・54～56・90～95がある。杯A・Bの小型の供膳具が大半を占めるほか、少数の壺・甕類も若干出土している。また、特殊器種として鉄鉢形の須恵器(鉢A)がある。主な器種の特徴を列記すると、以下の通りである。まず、杯Bの蓋についてはすべて縁部の屈曲しないb形態であり、天井部をへら割りしている。また、杯Aは底部と体部の境が丸く不明瞭である。これら杯類の特徴およびその他の壺・鉢類の形態や技法は同じ三田市内の末窟跡群内の川端空や郡塚窟出土遺物と酷似する。川端窟や郡塚窟は奈良前期の平城宮・段階前後の窟跡であり、当該出土須恵器のうち奈良時代の一群については、53のように奈良時代以前に遡るものも含まれているが、概ね奈良時代前期に年代の中心があるものと判断して大過ない。

平安時代の須恵器には4・13・14・71～83・96がある。これらの須恵器の産地は同じ三田市内北西部の相野窟跡群の製品と判断してよい。細かな年代の特定は難しいが、10世紀前後と考えておきたい。

2. 出土土師器について

旧有馬郡内でのこの時期の出土資料は非常に少ない。そのなかで、今回出土した資料はこの地域の煮炊具の状況を示すものとして貴重である。

8世紀の土師器煮炊具は口径25cm前後の大型甕(57～63)と口径20cm以下の小型甕(64・97)、口径約40cmの鍋(7・66)の3種類が揃っている。大型甕は器高30cm程度のやや長胴の体部をもつと推定される。口縁端部に面をもつものが多い。小型甕は球胴の体部をもち、口縁端部はやや丸味をもつものも見られる。いずれも調整にはハケを多用する。このような特徴は他の摂津地域や播磨地域と共通する¹⁰⁾。

10世紀の土師器煮炊具は88・89の土師器羽釜である。砲弾型の体部と直立する口縁部の直下に鈎をもつ「摂津C2型¹¹⁾」と呼ばれているものである。これも8世紀の煮炊具と同様に摂津～播磨南部にかけて広く出土するものである。また、この時期には土師器甕も存在するが、8世紀代のものとした中(57～63)に一部含まれている可能性がある。

製塩土器(67～70)については細片のため分類上の位置づけは確定しがたいが、8世紀後半に多い厚手の典型的なIV式のものより器壁が薄いことから、やや遡る型式のものと考えたい¹²⁾。

参考文献

- (1) 古代の土器研究会『古代の土器4・煮炊具(近畿編)』1996年
古代の土器研究会『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東4 煮炊具-』1996年
- (2) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1983年
- (3) 山本三郎「兵庫県(播磨・摂津)」「日本土器製塩研究」1994年

第4章 自然科学

第1節 梶下ヶ谷遺跡遺構群に残存する脂肪酸の分析

株式会社 北海道測量図工社

担当者 株式会社北海道測量図工社総合科学研究所

長田 正宏

福島 道広

中野 寛子

監修 帯広畜産大学畜産環境学科

農学博士 中野 益男

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊していくだけでなく、上の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解していく。これまで生体成分を構成している有機物が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子²⁾、約5千年前のハーゼルナッツ種子³⁾に残存する脂肪酸組成は安定した状態に保持されていることなど、タンパク質、脂肪といった生体成分の一部、とくに脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した⁴⁾。

動物の脂肪は、それを構成する脂肪酸とステロールの科学組成が種によって少しずつ異なっている。従って、出土遺物の脂肪の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動物のそれとを比較することによって、目で見える形では遺存しない原始古代の動物物を実証することが可能である。

この「残存脂肪酸分析法」を用いて、梶下ヶ谷遺跡遺構土壌に残存する脂肪を分析することによって遺構の性格を解明しようとした。

1. 土壌試料

梶下ヶ谷遺跡遺構は、縄文時代前期末～中期初頭と推定されている。遺構は直径約1.5m、深さ約80cmの丸い穴。底に枕穴があった。その遺構内外土壌試料採取地点を図1-1～図1-7に示す。

土壌試料はSK-4で遺構内上層土壌（NoSK4-1）、下層土壌（NoSK4-2）、遺構外は北側土壌、西側土壌および南側土壌（NoSK4-3、NoSK4-4およびNoSK4-5）、遺構内底部では中央部土壌、東側土壌および西側土壌（NoSK4-6、NoSK4-7およびNoSK4-8）を採取した。SK-6では上層土壌および下層土壌（NoSK6-1およびNoSK6-2）、遺構外南側土壌、東側土壌および西側土壌（NoSK6-3、NoSK6-4およびNoSK6-5）、遺構底部中央土壌、南側土壌および北側土壌（NoSK6-6、NoSK6-7およびNoSK6-8）をそれぞれ採取した。SK-12では遺構内上層土壌、中層土壌および下層土壌（NoSK12-1、NoSK12-2およびNoSK12-3）、遺構外北側土壌、西側土壌および南側土壌（NoSK12-4、NoSK12-5およびNoSK12-6）、遺構内底

部中央土壌、東側土壌および西側土壌 (NoSK12-7, NoSK12-8 および NoSK12-9) をそれぞれ採取した。SK-13では遺構内中層土壌 (NoSK13-1)、遺構外南側土壌および西側土壌 (NoSK13-2 および NoSK13-3)、遺構内底部中央土壌、南側土壌および北側土壌 (NoSK13-4, NoSK13-5 および NoSK13-6) をそれぞれ採取した。SK-15では、遺構内上層、中層および下層土壌 (NoSK15-1, NoSK15-2 および NoSK15-3)、遺構外北側土壌、東側土壌および南側土壌 (NoSK15-4, NoSK15-5 および NoSK15-6)、遺構内底部中央土壌、東側土壌および西側土壌 (NoSK15-7, NoSK15-8 および NoSK15-9) を採取した。SK-17では遺構内下層土壌 (NoSK17-1)、遺構外南側土壌、西側土壌および北側土壌 (NoSK17-2, NoSK17-3 および NoSK17-4)、遺構内底部中央土壌、東側土壌および西側土壌 (NoSK17-5, NoSK17-6 および NoSK17-7) を採取した。SK-18では遺構内上層土壌および下層土壌 (NoSK18-1 および NoSK18-2)、遺構外北側土壌および遺構外東側土壌 (NoSK18-3 および NoSK18-4)、遺構内底部東側土壌および西側土壌 (NoSK18-5 および NoSK18-6) をそれぞれ採取した。

2. 残存脂肪の抽出

土壌試料180g~270gに3倍のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間かけて残存脂肪を抽出した。ろ過後、残渣の土壌試料にクロロホルム-メタノール混液を加えて超音波処理をする。この抽出操作を更に2回繰り返す。集められた全抽出溶剤に、この全量の4分の1容量の1%塩化バリウムを加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1-1, 1-2に示す。各遺構の抽出率はそれぞれ、0.0009~0.0035%、平均0.0019% (SK4)、0.0006~0.0106%、平均0.0028% (SK6)、0.0007~0.0104%、平均0.0043% (SK12)、0.0019~0.0088%、平均0.0036% (SK13)、0.0009~0.0052%、平均0.0022% (SK15)、0.0004~0.0017%、平均0.0010% (SK17)、0.0006~0.0018%、平均0.0012% (SK18)であった。土壌からの残存脂肪はいずれの遺構でも平均0.0010~0.0043%であり、全国各地の遺跡土壌から抽出された残存脂肪の平均0.02と比較して約0.1倍と低かったが、各土壌試料の抽出量とも分析には十分量であった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪種は誘導脂質の遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合した単純脂質のトリグリセド、ジグリセド、ステロールの順に多く、その他に微量ながらステロールエステルと長鎖炭化水素を検出した。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

土壌試料の残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125℃で2時間封管中でメタノール分解した。生成した脂肪酸メチルエステルを薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ガスクロマトグラフィーで脂肪を構成する脂肪酸を分析した。

残存脂肪の脂肪酸組成を図2-1~図2-7に示す。残存脂肪から12種類の脂肪酸を検出した。このうち、パルミチン酸(C16:0)、パルミトレン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ペヘン酸(C

22:0)、エルシン酸 (C22:1)、リグノセリン酸 (C24:0)、ネルボン酸 (C24:1) など11種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析で同定した。

各土壌試料の脂肪酸組成を比較してみると、SK4ではいずれの試料ともパルミチン酸、オレイン酸が高く、全脂質の約50%~80%を占めた(図2-1)。その中で遺構内土壌であるNoSK4-1、NoSK4-2、NoSK4-6、NoSK4-7およびNoSK4-8は高等動物の骨油、体脂肪に特徴的にみられるパルミチン酸が約40%以上と主成分であった(図2-1)。またNoSK4-2で高等動物の臓器、血液、神経組織等にみられるベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸が約10%検出された(図2-1)。遺構外土壌試料ではNoSK4-3、NoSK4-4およびNoSK4-5といずれの試料ともオレイン酸が多く主成分であった。またパルミトレン酸が10%~20%分布した(図2-1)。

パルミトレン酸が多く分布する動物物はまれにしか存在しない。このことからオレイン酸、パルミチン酸は植物由来のリノール酸、リノレン酸の分解産物であろうと考えられる。SK6では遺構外土壌試料NoSK6-3、NoSK6-4およびNoSK6-5でオレイン酸が主成分を占め植物腐植土を示した。しかし遺構内土壌試料NoSK6-1、NoSK6-2、NoSK6-6、NoSK6-7およびNoSK6-8でパルミチン酸が最も多く次いでオレイン酸が分布していた(図2-2)。この脂肪酸パターンはSK4と同様であった。また高級脂肪酸もNoSK6-1、NoSK6-2およびNoSK6-8で約10%~12%と比較的高い割合で分布していた(図2-2)。SK12、SK15およびSK17についても同様な脂肪酸組成を示した(図2-3、図2-5、図2-6)。しかしSK13試料では遺構内外ともに主成分はオレイン酸で約40%以上占めていた。また高級脂肪酸は約4%以下とほとんど検出されなかった(図2-4)。このことからSK13は植物腐植土を示唆する脂肪酸パターンを示した。またSK18では主成分がパルミチン酸で約35%~52%分布していた。高級脂肪酸もNoSK18-1およびNoSK18-6で約14%~20%と比較的高い割合を示し(図2-7)、動物遺体の存在を示唆した。また、遺構外試料NoSK18-4についても高級脂肪酸の割合が高く、約14%前後分布した(図2-7)。このことは、遺構外周辺で動物油脂が何らかの理由で分布していた可能性が高い。

4. 残存脂肪のステロール組成

遺構内外の土壌試料の残存脂肪からステロールをヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)を展開溶媒とする薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ビリジン-無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。

残存脂肪の主なステロール組成を図3-1~図3-7に示す。残存脂肪から12~16種類のステロールを検出した。このうち、コレステロール、エルゴステロール、カンバステロール、スチグマステロール、シトステロールなど11種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析計で同定した。

各土壌試料のステロール組成を比較してみると、SK4では底部土壌試料NoSK4-6、NoSK4-7およびNoSK4-8で植物由来のシトステロールが約22%~39%分布した(図3-1)。しかし動物由来のコレステロールがそれぞれ14.4%、19.9%および26.1%と比較的高い割合で占め(図3-1)、動物遺体の存在を示唆した。また遺構外試料NoSK4-4およびNoSK4-5で約12%前後分布し(図3-1)、動物油脂が多少混入している傾向を示した。SK6では遺構内試料NoSK6-2、NoSK6-6、NoSK6-7およびNoSK6-8でコレステロールが約9%~17%と分布し、遺構外試料と比較して高く、動物油脂の混入を示した(図3-2)。SK12ではシトステロールがNoSK12-8を除いた8試

料で約40%～65%と多く植物油脂の存在を示したが、遺構内底部東側土壌試料No SK 1 2-8では逆にコレステロールが約32%と動物油脂の付着を示唆する値であった(図3-3)。SK 1 3およびSK 1 5では遺構内外の土壌でステロール組成に顕著な差はなく、いずれの試料ともシトステロール約30%～70%で分布し(図3-4、図3-5)、植物腐植土を示唆する組成パターンであった。SK 1 7では遺構内底部東側および西側土壌試料No SK 1 7-6およびNo SK 1 7-7でコレステロールが約21%前後と比較的高濃度で分布した。遺構内下層土壌No SK 1 7-1でも同じ結果であった(図3-6)。SK 1 8内では動物に特異的に存在するコレステロールが遺構内下層土壌試料No SK 1 8-2で約9%分布している以外ほとんど検出されず、シトステロールが約35%～73%と植物腐植土を示したが、遺構外試料No SK 1 8-3およびNo SK 1 8-4では約11%～16%と高い割合で分布し(図3-7)、動物油脂の多少の混入を示唆し先の脂肪酸の結果と一致した。遺構内底部西側土壌試料No SK 1 8-6でコレステロールは2%と極めて低い割合であった。しかし、哺乳動物の腸内細菌によってコレステロールから誘導されて糞便中に特異的に存在するコブスタノールは21.5%と非常に高い割合で分布していた(図3-7)。遺構内外のステロールのうち、コレステロールとシトステロールの分布比を表2-1および表2-2に示す。一般に、土壌裏にみられる動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロール比の指標値は0.6以上である。従って、表にみられるように、SK 4では試料No SK 4-7およびNo SK 4-8でステロール比が0.6193および1.1918であり、動物油脂の存在を示唆し、先の脂肪酸組成とも一致した。同様にSK 6、SK 1 2およびSK 1 7のステロール比が試料No SK 6-6で0.4198、No SK 6-7で0.9115、No SK 6-8で0.8353、No SK 1 2-8で2.3997、No SK 1 7-6で0.4264、およびNo SK 1 7-7で0.6955となるのに対し、そのそれぞれの遺構外試料では、植物腐植土を示すステロール比を示していた。このことは、これらの遺構内に植物腐植以外の、別種のステロール即ち動物油脂が混入していたことを示唆している。従って、SK 4、SK 6、SK 1 2およびSK 1 7には明らかに動物体の存在の痕跡を止めていることになる。SK 1 3のステロール比は0.0874～0.3313、平均0.1503、SK 1 5のそれは0.0439～0.2670、平均0.1196となり、植物腐植土を示唆する値を示した。この結果は脂肪酸組成の結果ともよく一致していた。SK 1 8についてもコレステロールとシトステロール比から見ると遺構底部土壌No SK 1 8-5およびNo SK 1 8-6でそれぞれ0.0493および0.1933と植物腐植を示唆する結果を得た。しかし、動物体内の腸内細菌によってコレステロールが還元されて、糞便中に多く存在するコブスタノールは多量に分布し、その周辺土にも分布が見られた。糞便中のコブスタノールとコレステロール比は動物の種類によって特異性がみられ、また雄雌の性別や健康状態を判断する資料となる。このコレステロール比の分布状況からみると、明らかにSK 1 8遺構周辺には哺乳動物の糞便が存在していたことになり、その周辺で動物が生体のままキーピングされていた可能性が推測される。しかし、コブスタノール分布比から動物種を同定するには、ステロールの経年変化を調べる必要があるため、精確な解明は困難であった。

5. 脂肪酸組成の総理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、その相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。各遺構の樹状構造図を図4-1～図4-7に示す。

SK 4の樹状構造図(図4-1)を見ると、高等動物の体脂肪・骨油に特徴的なパルミチン酸を最も

多く包含し、血液等に分布する高級脂肪酸を多く含む遺構内試料NoSK4-1、NoSK4-2、NoSK4-6、NoSK4-7およびNoSK4-8は同じ距離にあるA1群を形成し、遺構外試料NoSK4-4およびNoSK4-5のA2群とは類縁距離の異なるコロニーを形成した。しかしいずれの試料とも相関行列距離0.15以下と比較的に近い距離にあった。

SK6の樹状構造図(図4-2)を見ると、動物性脂肪酸組成を持つ遺構内試料NoSK6-1、NoSK6-2、NoSK6-6、NoSK6-7およびNoSK6-8は類似距離0.02以下で非常に近いコロニーB1群を形成した。遺構外試料NoSK6-3、NoSK6-4およびNoSK6-5は相関行列距離0.05以下でB2群を形成した。B1群とB2群は行列距離0.2近く離れており、それぞれ別種の系統樹であった。

SK12の樹状構造図(図4-3)を見ると、遺構内試料NoSK12-1~SK12-3および遺構外試料NoSK12-4~SK12-6はC1群を形成し、相関行列距離0.12離れた位置で脂肪酸組成から動物油脂の付着を示す遺構内底部土壌試料NoSK12-7~SK12-9がC2群を形成した。

SK13の樹状構造図(図4-4)を見ると、試料NoSK13-1、NoSK13-2、NoSK13-3およびNoSK13-6がD1群を形成し、試料NoSK13-4およびNoSK13-5がD2群を形成した。D1群およびD2群は互いに類似距離0.02以下と非常に短い距離にあり、先に示した脂肪酸組成およびステロール組成の結果と一致し、同じ系統樹に属し、植物高植土を示した。

SK15の樹状構造図(図4-5)を見ると、遺構外試料NoSK15-4~NoSK15-6でE1群を形成した。遺構内試料では試料NoSK15-2、NoSK15-3およびNoSK15-9はE2群を、試料NoSK15-7およびNoSK15-8はE3群を形成した。E2群およびE3群は動物に特徴的なパルミチン酸、ペヘン酸、リグノセリン酸が共に多く検出され、相関行列距離0.1以下で同じ系統樹に属し、E1群とは別種の系統樹であった。

SK17の樹状構造図(図4-6)を見ると、動物油脂を多く持つ遺構内試料NoSK17-1、NoSK17-5、NoSK17-6およびNoSK17-7はF1群を形成した。遺構外試料NoSK17-2およびNoSK17-3はF2群を、試料NoSK17-4はF3群を形成した。F1群、F2群およびF3群は相関行列距離0.1以下で類似度が近かった。

SK18の樹状構造図(図4-7)を見ると、試料NoSK18-1およびNoSK18-6はG1群を、試料NoSK18-2はG2群を、試料NoSK18-3~NoSK18-5はG3群を形成した。それぞれの群とくにG3群で遺構内外試料が入り乱れており、類似距離も0.1以下で類似度が高い。このことから先のステロール組成と合わせると、SK18周辺には哺乳動物の糞便が散在していた可能性が高い。

各遺構の性質を相互に比較した樹状構造図を図4-8に示す。同時に現生の動物種および足跡骨とも比較した。SK4遺構内試料、SK6遺構内試料、SK12遺構内試料、SK15遺構内試料およびSK17遺構内試料は相関距離の短いコロニーを形成したことから同質の遺構であると推定される。また、伊川津遺跡出土のシとも近い距離にあり、シカ油脂が存在した可能性は高い。その中で、SK4試料NoSK4-8およびSK12試料NoSK12-2およびNoSK12-3は現生イノシシと類似距離の短いコロニーを形成し、SK4およびSK12にはイノシシ油脂の存在も推測される。SK18ではイノシシ油とシカ油が遺構内外で混在している傾向が見られた。各遺構外試料およびSK13遺構内外試料は極めて類縁距離の深いコロニーを形成し、同質のものと推定された。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸の比をY軸にとり、種特異性相関を求めた。この比例配分により、第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、尿、神経組織、臓器等に由来する脂肪が分布し、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪・骨油に由来する脂肪が分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

遺構内外土壌の残存脂肪から求めた相関図を図5に示す。図5からわかるように、いずれの試料とも第2象限から第3象限にかけて分布していた。この位置は植物腐植土に哺乳動物油脂が混入したときに分布する位置であり、すべての試料とも同質の土壌である可能性が極めて高い。その中で、SK4、SK6、SK12、SK15、SK17およびSK18試料は第2象限の原点から離れた位置に分布し、高等動物油脂が明らかに存在していたことを示唆した。

これらの成績とクラスター分析およびステロール分析の結果を総合するとSK4、SK6、SK12、SK15、SK17およびSK18は同質の遺構で、主として動物油脂が存在していた。しかし、人間の血液等に多く含まれているリグノセリン酸等が少ないこと、またクラスター分析よりシカおよびイノシシ油脂に近いことから、土壌菌の可能性は低い。SK13は、遺構外試料と類似しており同質の土壌と推定される。

7. 総括

掘下ヶ谷遺跡SK4、SK6、SK12、SK13、SK15、SK17およびSK18に残存する脂肪の脂肪酸とステロールを分析した。その結果、SK13を除く全ての遺構から動物性の脂肪が検出された。また、クラスター分析の結果からSK6、SK15およびSK17から哺乳動物とくにシカ油脂のみが検出された。SK4、SK12およびSK18ではシカ油脂とイノシシ油脂が検出された。遺構の底に杭穴があったことなどその形態とも照合すると、獣をとるための落とし穴の可能性は極めて高い。また、SK18の周辺には、一時的に獣をキーピングしていたことも推測された。SK13からは植物腐植土を示す脂肪のみ検出された。これは、落とし穴としての機能を果たさなかったためであろう。

今後、免疫学的手法を用いることにより、動物種の精確な特定が望まれる。

参考文献

- (1) R. C. A. Rottland and H. Schlichtherle: "Food identification of samples from archaeological sites", [Archaeo. Physica.], 10巻, 1979, pp260.
- (2) D. A. Pricstley, W. C. Galinat and A. C. Leopold: "Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed", [Nature], 296巻, 1981, pp146.
- (3) R. C. A. Rottland and H. Schlichtherle: "Analyse Frühgeschichtlichen Gefäßinhalte", [Naturwissenschaften], 70巻, pp33.
- (4) 中野益男: 「残存脂肪分析の現状」[歴史公論] 第10巻6, 1984, pp124.

- (5) 中野益男, 伊賀 啓, 根岸 孝, 安本教博, 畑 宏明, 矢吹俊男, 佐原 真, 田中 琢: 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, 『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.
- (6) M. Nakano and W. Fischer: 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM20021」, 『Hoppe-Seylers Z. Physiol. Chem.』, 358巻, 1977, pp1439.
- (7) 中野益男: 未発表.

本文は、梶下ヶ谷遺跡遺構群に残存する脂肪の分析依頼についての報告（平成元年3月）を記載したものである。

表 1 - 1 梶下ヶ谷遺跡遺構内外土壌の残存脂肪抽出量

試料地	採取地点	深さ量 (g)	全脂肪 (ng)	抽出率 (%)
SK4遺構				
NoSK4-1	遺構内上層	250.27	2.2	0.0009
NoSK4-2	遺構内下層	254.76	2.7	0.0011
NoSK4-3	遺構外北	236.04	3.2	0.0014
NoSK4-4	遺構外西	201.01	7.1	0.0029
NoSK4-5	遺構外南	205.78	5.7	0.0028
NoSK4-6	遺構外部中央	225.9	3.7	0.0016
NoSK4-7	遺構外部東	226.43	4.3	0.002
NoSK4-8	遺構外部西	212.34	3.8	0.0018
SK6遺構				
NoSK6-1	遺構内上層	267.95	3.3	0.0013
NoSK6-2	遺構内中間	248.45	1.8	0.0007
NoSK6-3	遺構外南	223.06	8.3	0.0037
NoSK6-4	遺構外東	204.65	21.6	0.0106
NoSK6-5	遺構外西	208.64	8.9	0.0043
NoSK6-6	遺構外部中央	255.44	1.9	0.0007
NoSK6-7	遺構外部東	267.11	1.5	0.0006
NoSK6-8	遺構外部北	241.42	1.8	0.0007
SK12遺構				
NoSK12-1	遺構内上層	230.6	20.6	0.0089
NoSK12-2	遺構内中間	197.53	2.6	0.0013
NoSK12-3	遺構内下層	225.27	3.3	0.0015
NoSK12-4	遺構外北	209.80	14.4	0.0069
NoSK12-5	遺構外西	211.43	13.1	0.0062
NoSK12-6	遺構外南	198	20.6	0.0104
NoSK12-7	遺構外部中央	222.32	2.4	0.0011
NoSK12-8	遺構外部東	228.27	1.6	0.0007
NoSK12-9	遺構外部西	199.55	3.8	0.0019

表 1 - 2 梶下ヶ谷遺跡遺構内外土壌の残存脂肪抽出量

試料地	採取地点	深さ量 (g)	全脂肪 (ng)	抽出率 (%)
SK13遺構				
NoSK13-1	遺構内中間	225.7	4.8	0.0021
NoSK13-2	遺構外南	232.6	8.1	0.0035
NoSK13-3	遺構外西	182.7	6	0.0031
NoSK13-4	遺構外部中央	205.82	18.1	0.0088
NoSK13-5	遺構外部東	216.61	4.1	0.0019
NoSK13-6	遺構外部北	204.75	4.1	0.002
SK15遺構				
NoSK15-1	遺構内上層	222.1	4.5	0.002
NoSK15-2	遺構内中間	201.66	5.1	0.0025
NoSK15-3	遺構内下層	195.54	2.6	0.0013
NoSK15-4	遺構外	224.76	11.7	0.0052
NoSK15-5	遺構外東	202.4	5.2	0.0026
NoSK15-6	遺構外西	182.59	6.5	0.0036
NoSK15-7	遺構外部中央	192.9	1.8	0.0009
NoSK15-8	遺構外部東	217.73	1.9	0.0009
NoSK15-9	遺構外部西	296.58	2.2	0.0011
SK17遺構				
NoSK17-1	遺構内下層	230.99	0.9	0.0004
NoSK17-2	遺構外南	233.8	3	0.0013
NoSK17-3	遺構外西	208	3.4	0.0016
NoSK17-4	遺構外北	235.77	2.6	0.0011
NoSK17-5	遺構外部中央	216.46	3.8	0.0017
NoSK17-6	遺構外部東	244.33	1.7	0.0007
NoSK17-7	遺構外部西	207.29	1.2	0.0006
SK18遺構				
NoSK18-1	遺構内上層	218.14	0.9	0.0004
NoSK18-2	遺構内下層	236.14	2	0.0009
NoSK18-3	遺構外北	235.50	4.2	0.0018
NoSK18-4	遺構外東	199.09	3.2	0.0016
NoSK18-5	遺構外部東	224.96	1.7	0.0008
NoSK18-6	遺構外部西	216.37	1.2	0.0006

表 2 - 1 試料に分布するコレステロールとシステロールの割合

試料No	コレステロール (%)	システロール (%)	コレステロール/システロール
NoSK 4 - 1	11.39	25.44	0.3869
NoSK 4 - 2	4.89	77.35	0.0632
NoSK 4 - 3	4.86	38.74	0.1256
NoSK 4 - 4	11.51	44.16	0.2606
NoSK 4 - 5	12.26	41.38	0.2963
NoSK 4 - 6	14.36	38.51	0.3729
NoSK 4 - 7	19.86	32.07	0.6193
NoSK 4 - 8	26.1	21.9	1.1918
NoSK 6 - 1	5.71	76.34	0.0729
NoSK 6 - 2	0	27.13	-
NoSK 6 - 3	5.99	53.44	0.1121
NoSK 6 - 4	4.23	64.9	0.0652
NoSK 6 - 5	5.35	54.85	0.0921
NoSK 6 - 6	13.68	32.59	0.4198
NoSK 6 - 7	25.64	28.13	0.9115
NoSK 6 - 8	27.34	32.73	0.8361
NoSK12 - 1	5.64	45.58	0.1237
NoSK12 - 2	6.39	46.26	0.2256
NoSK12 - 3	4.17	62.35	0.0669
NoSK12 - 4	5	53.78	0.093
NoSK12 - 5	5.53	57.62	0.096
NoSK12 - 6	3.77	64.55	0.0584
NoSK12 - 7	7.55	46.68	0.1617
NoSK12 - 8	31.58	13.16	2.3997
NoSK12 - 9	3.07	64.62	0.0475

表 2 - 2 試料に分布するコレステロールとシステロールの割合

試料No	コレステロール (%)	システロール (%)	コレステロール/システロール
NoSK13 - 1	12.43	56.31	0.2207
NoSK13 - 2	3.6	71.98	0.05
NoSK13 - 3	11.67	35.23	0.3313
NoSK13 - 4	2.26	55.91	0.0474
NoSK13 - 5	6.62	65.52	0.101
NoSK13 - 6	5.97	53.5	0.1116
NoSK15 - 1	2.74	62.36	0.0439
NoSK15 - 2	16.58	46.33	0.2284
NoSK15 - 3	-	37.95	-
NoSK15 - 4	5.05	63.73	0.0792
NoSK15 - 5	10.85	40.63	0.2670
NoSK15 - 6	3.31	42.16	0.0785
NoSK15 - 7	-	38.33	-
NoSK15 - 8	10.9	58.08	0.1877
NoSK15 - 9	7.43	27.74	0.1913
NoSK17 - 1	16.76	34.98	0.4791
NoSK17 - 2	-	25.78	-
NoSK17 - 3	3.70	61.63	0.0613
NoSK17 - 4	14.56	37.57	0.3881
NoSK17 - 5	4.81	31.62	0.1521
NoSK17 - 6	20.64	48.41	0.4254
NoSK17 - 7	21.31	30.64	0.6995
NoSK18 - 1	-	35.16	-
NoSK18 - 2	9.06	26.38	0.3434
NoSK18 - 3	16.28	48.95	0.3326
NoSK18 - 4	10.51	41.09	0.2559
NoSK18 - 5	3.62	73.45	0.0493
NoSK18 - 6	2.63	18.5	0.1433

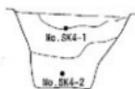
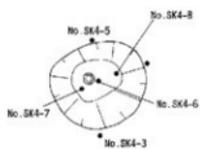


図1-1 SK4遺構内外の土壌試料採取地点

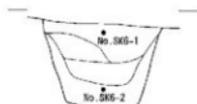
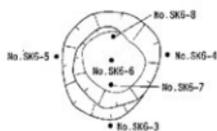


図1-2 SK6遺構内外の土壌試料採取地点

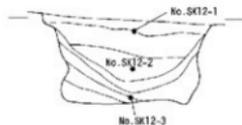
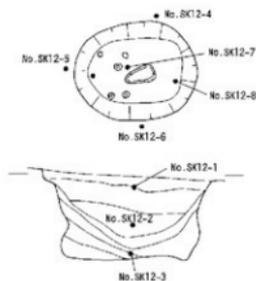


図1-3 SK12遺構内外の土壌試料採取地点

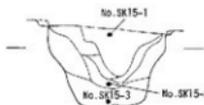
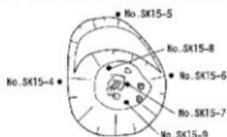


図1-5 SK15遺構内外の土壌試料採取地点

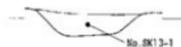
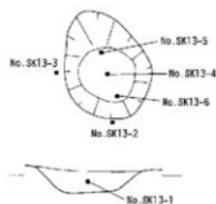


図1-4 SK13遺構内外の土壌試料採取地点

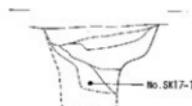
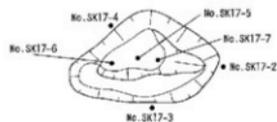


図1-6 SK17遺構内外の土壌試料採取地点

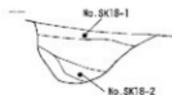
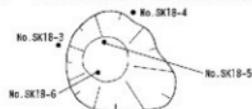


図1-7 SK18遺構内外の土壌試料採取地点

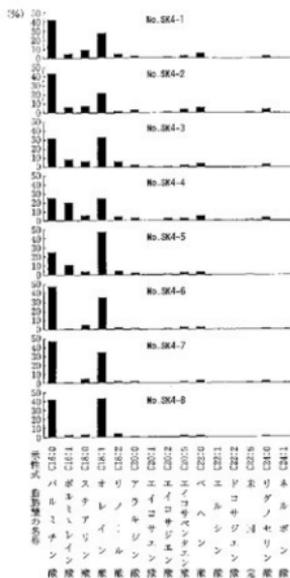


図 2-1 SK4 遺構内外土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成

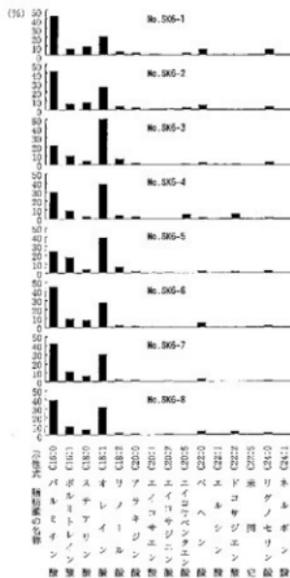


図 2-2 SK6 遺構内外土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成

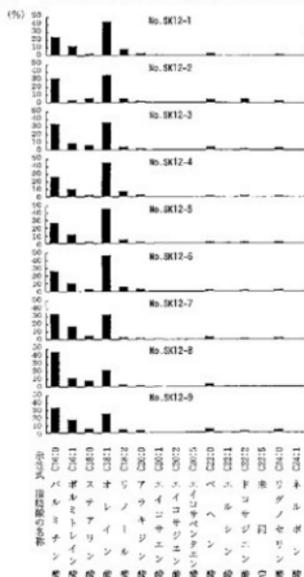


図 2-3 SK12 遺構内外土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成

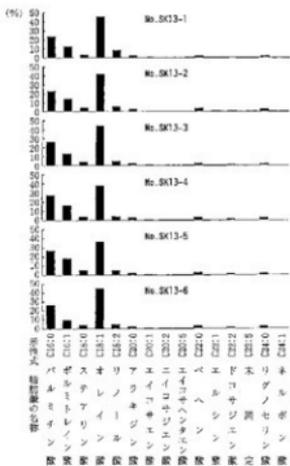


図 2-4 SK13 遺構内外土壤に残存する脂肪の脂肪酸組成

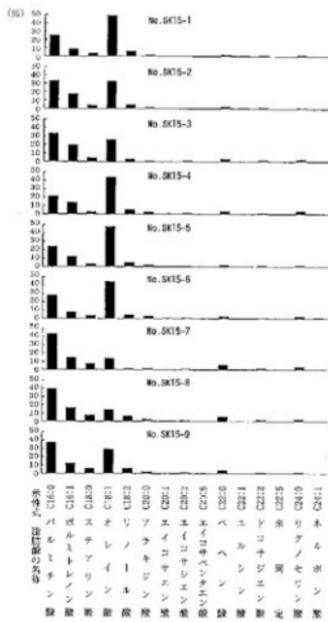


図2-5 SK15遺構内外土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

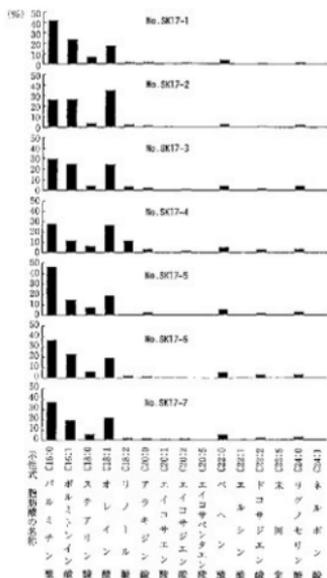


図2-6 SK17遺構内外土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

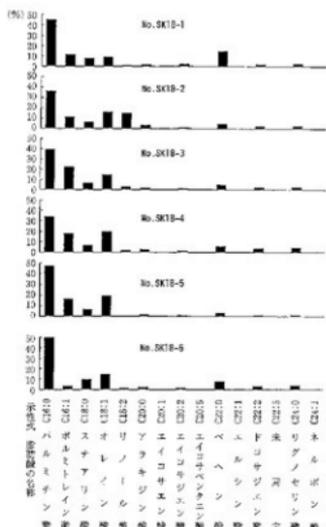


図2-7 SK18遺構内外土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成

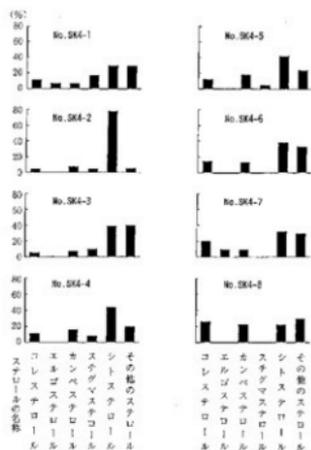


図3-1 SK4遺構内外土壌に残存する脂肪のステロール組成

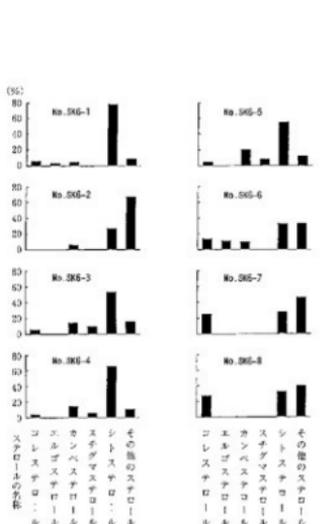


図3-2 S K 6遺構内外土壌に残存する脂肪のステロール組成

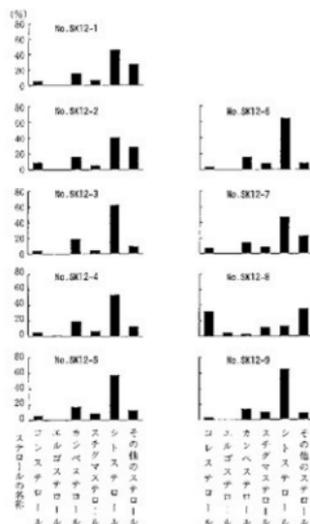


図3-3 S K 12遺構内外土壌に残存する脂肪のステロール組成

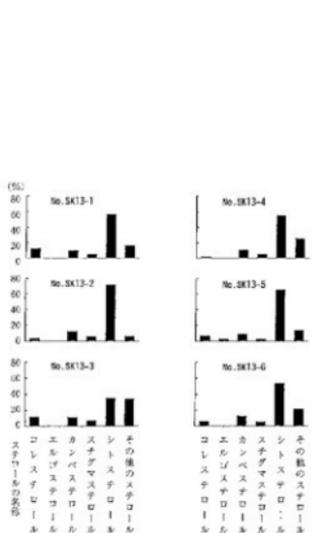


図3-4 S K 13遺構内外土壌に残存する脂肪のステロール組成

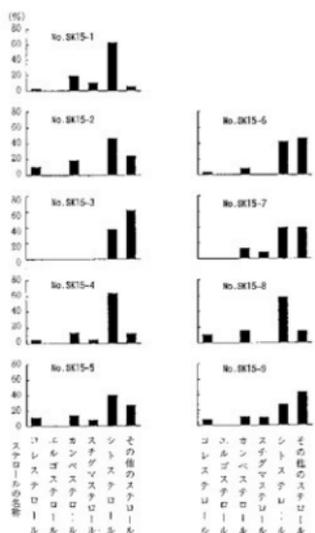


図3-5 S K 15遺構内外土壌に残存する脂肪のステロール組成

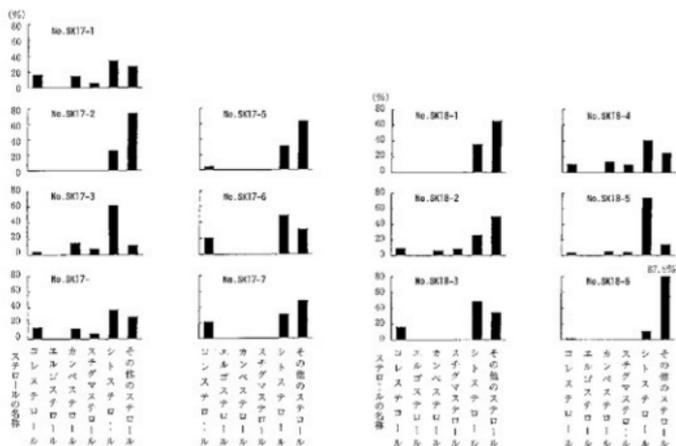


図3-6 SK17遺構内外土壌に残存する脂肪のステロール組成

図3-7 SK18遺構内外土壌に残存する脂肪のステロール組成

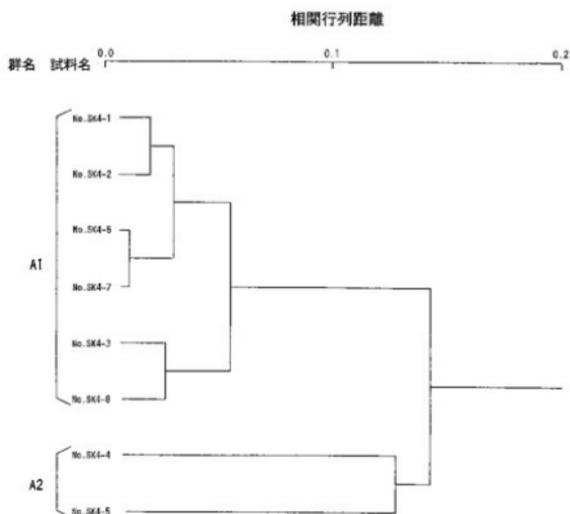


図4-1 SK4遺構内外に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

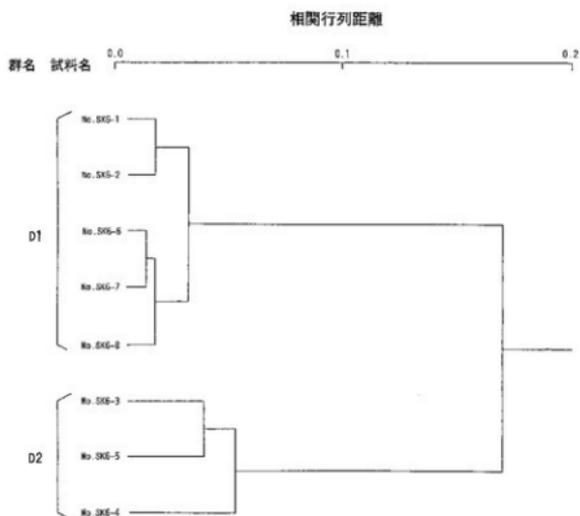


図 4-2 SK6 遺構内外に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

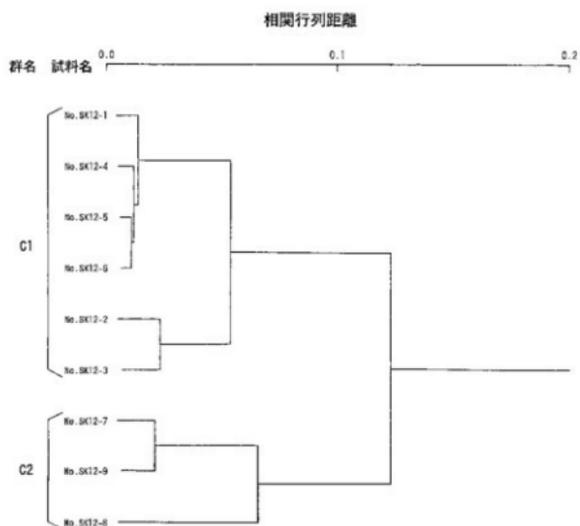


図 4-3 SK12 遺構内外に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

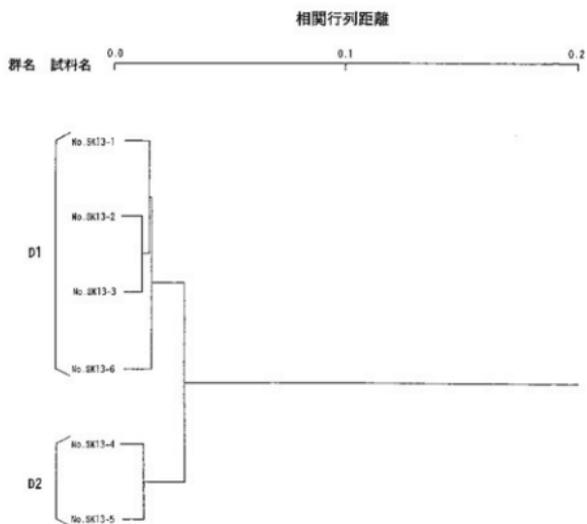


図 4-4 SK13遺構内外に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

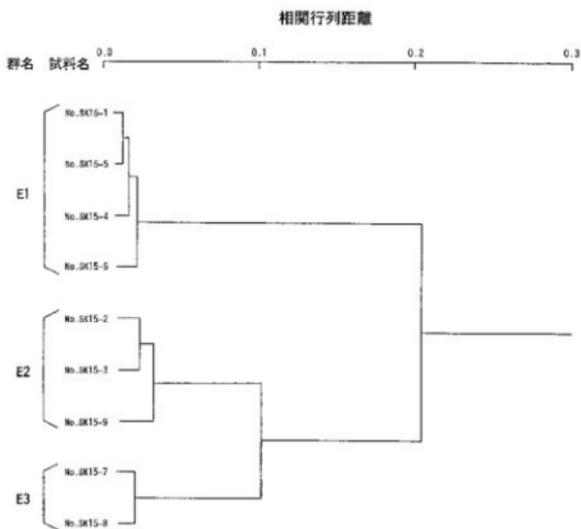


図 4-5 SK15遺構内外に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

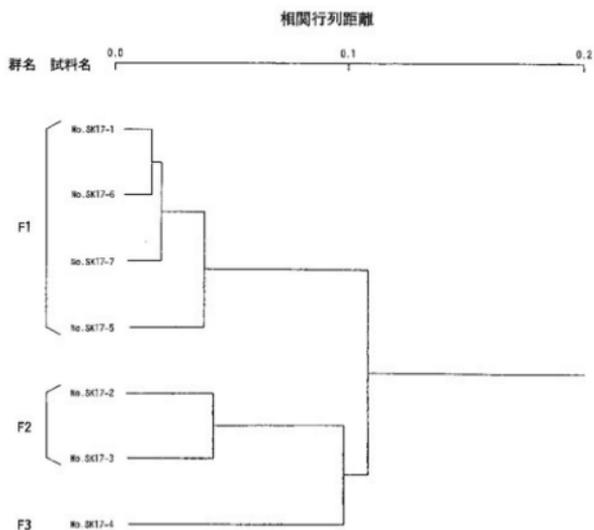


図 4-6 SK17遺構内外に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

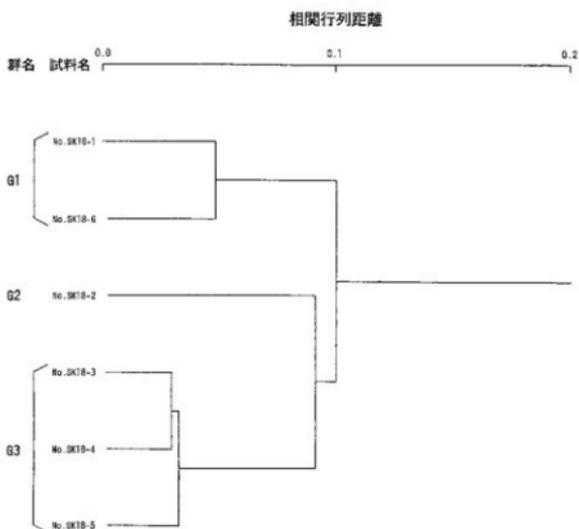


図 4-7 SK18遺構内外に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

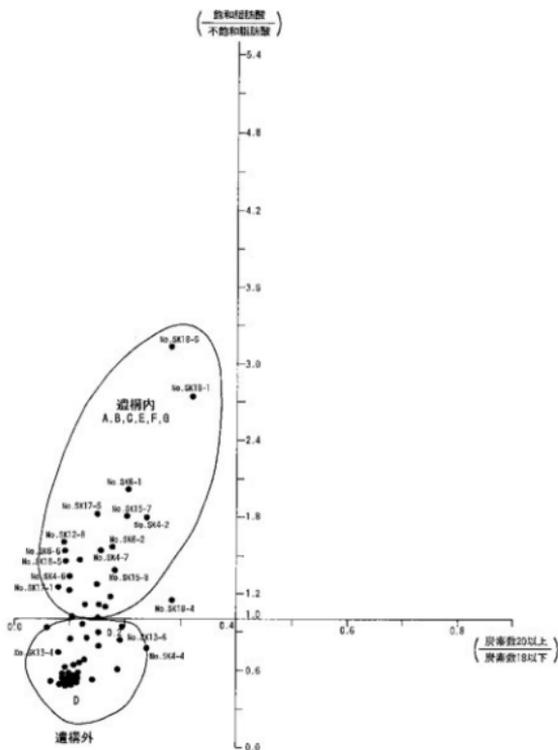


図5 各遺構内外に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

写 真 图 版



昭和62年度調査区 調査前（南東から）



昭和62年度調査区 調査前（南から）

図版 2



昭和63年度調査区 調査前全景（南から）



昭和63年度調査区 調査後全景（南から）



昭和63年度調査区 調査後全景（東南東から）



昭和62年度調査区 調査後全景（南東上空から）

図版 4



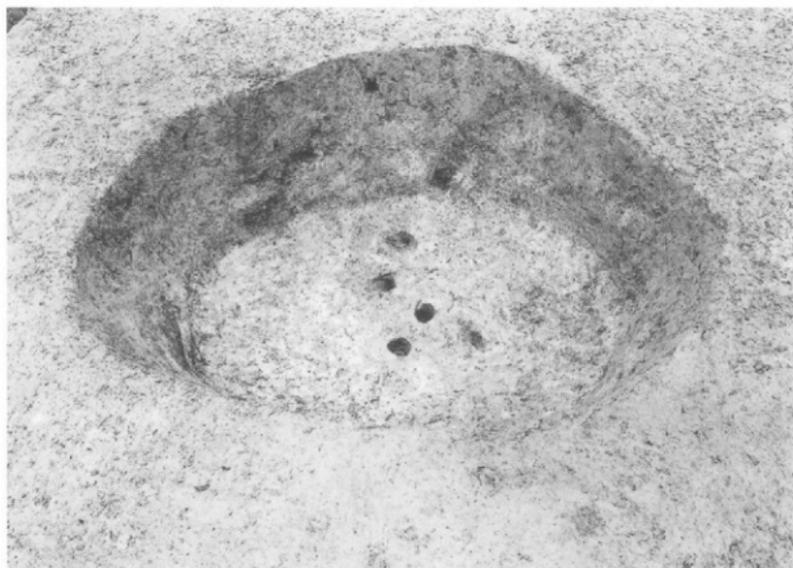
昭和62年度調査区 調査後全景（南西上空から）



昭和62年度調査区 調査後全景（東上空から）

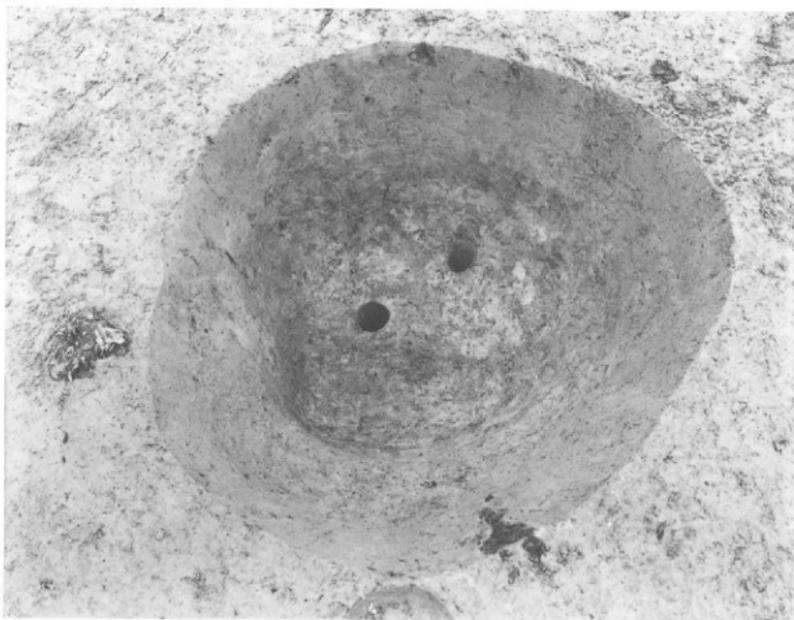


SK-4 (北から)



SK-8 (北から)

図版 6



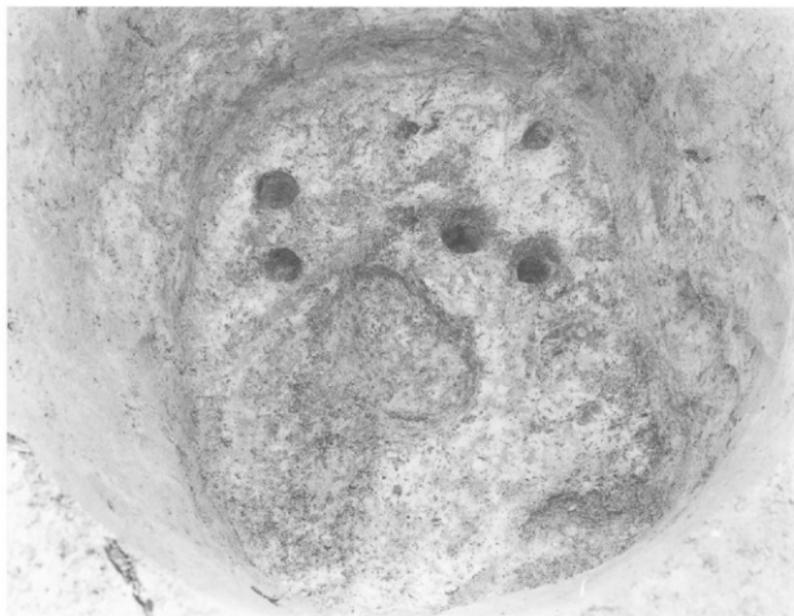
S K-11 (北から)



S K-25 土層断面 (南西から)

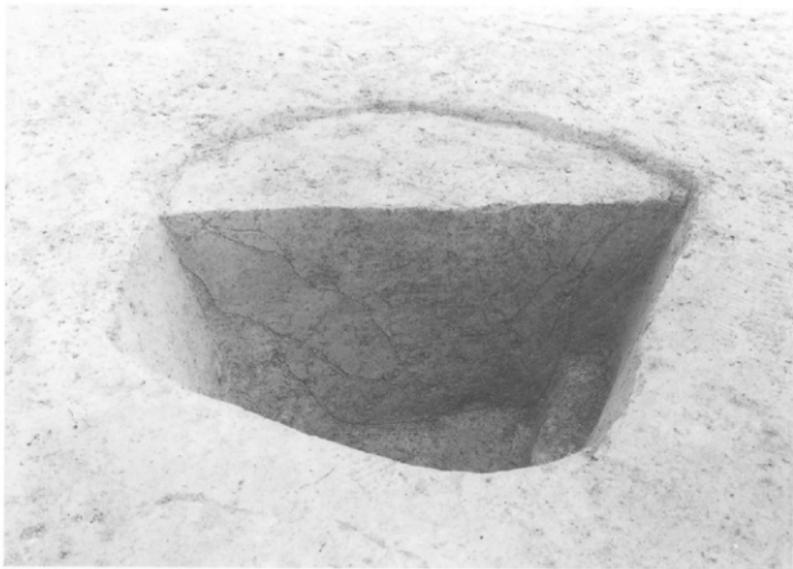


SK-12 土層断面 (西から)



SK-12 底部 (西から)

図版 8



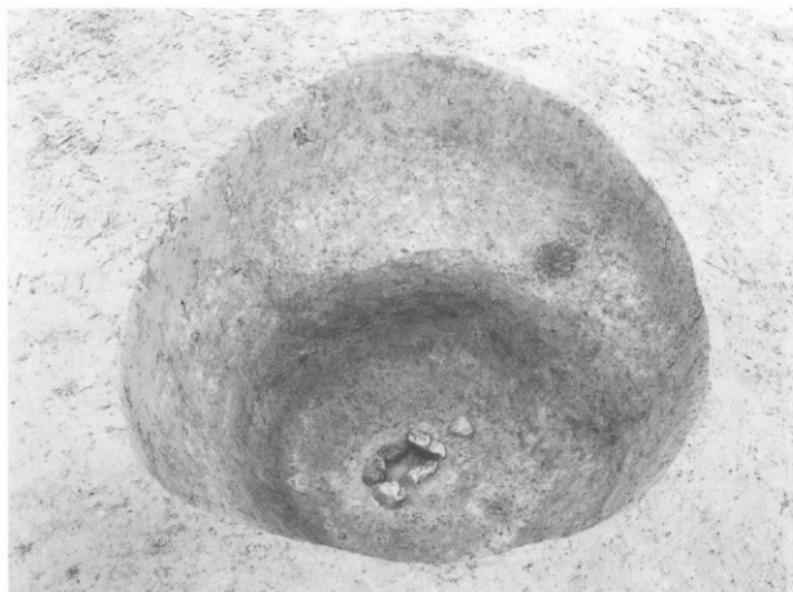
SK-14 土層断面 (西から)



SK-14 (南から)



SK-15 土層断面 (西から)



SK-15 (西から)

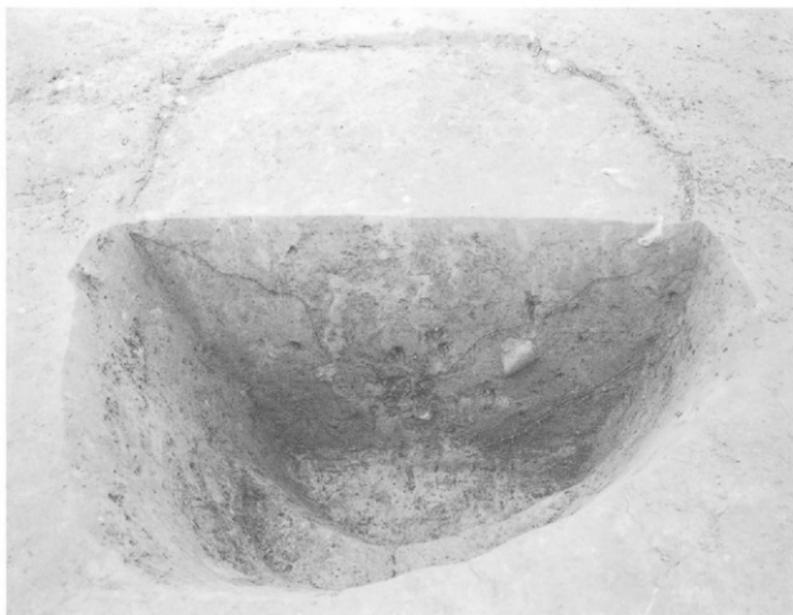
図版10



S K-15 底部 (北から)



S K-27 (東から)

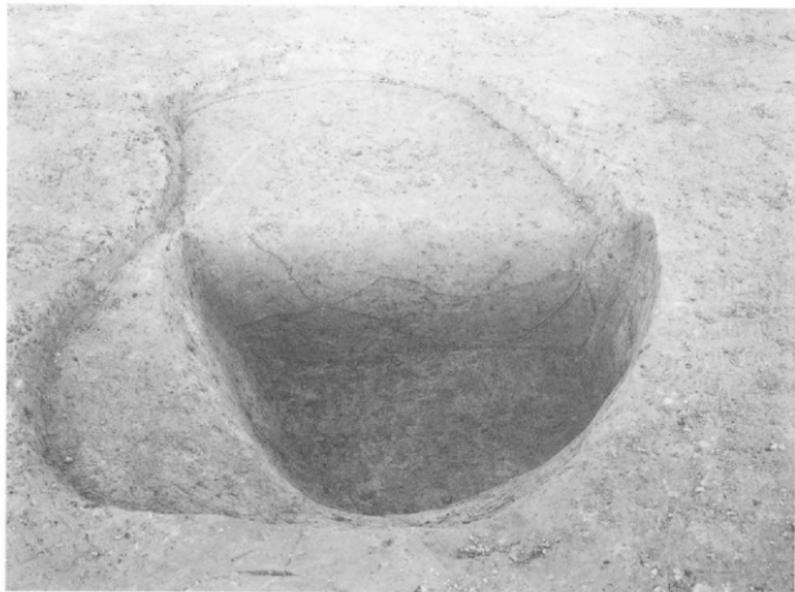


SK-30 土層断面 (西から)



SK-30 (北から)

図版12



S K-31 土層断面 (西から)



S K-31 (西から)



SK-28 (北から)



SK-32 (南から)

図版14



SK-33 土層断面 (北西から)



SK-33 (南から)

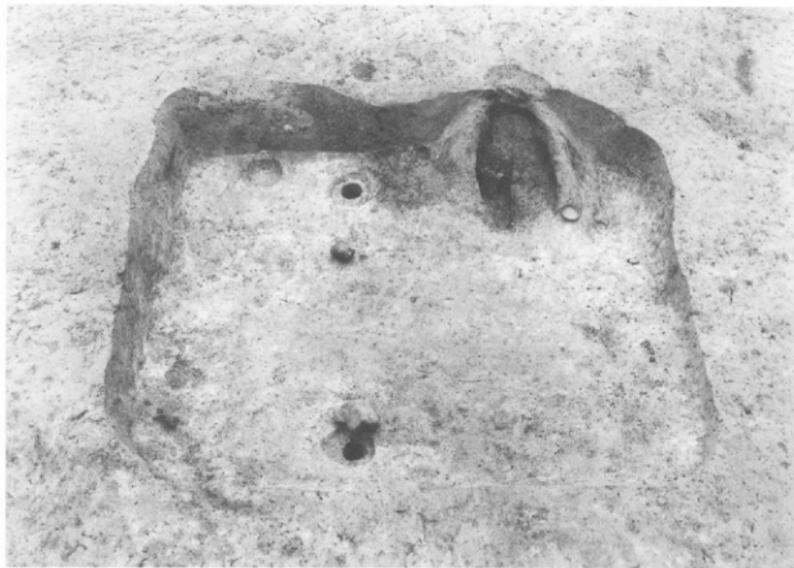


SK-33 底部 (南から)

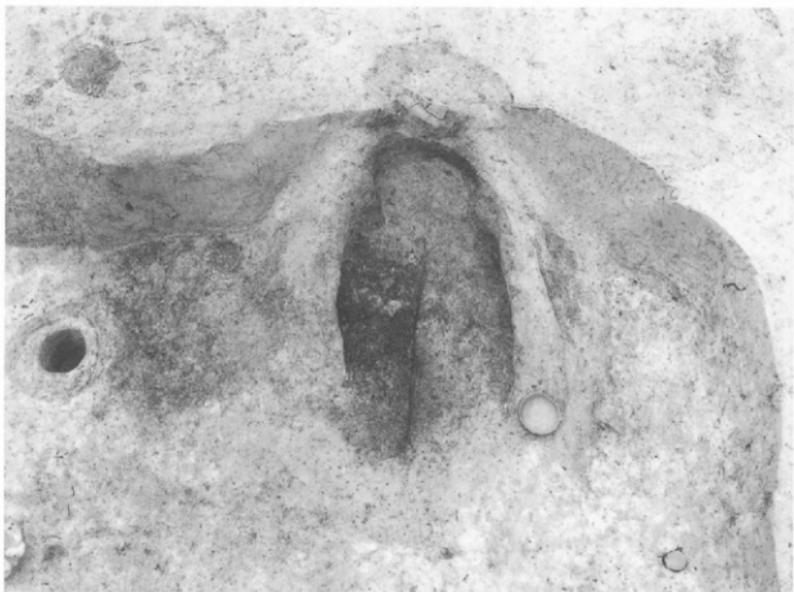


SK-34 (西から)

図版16



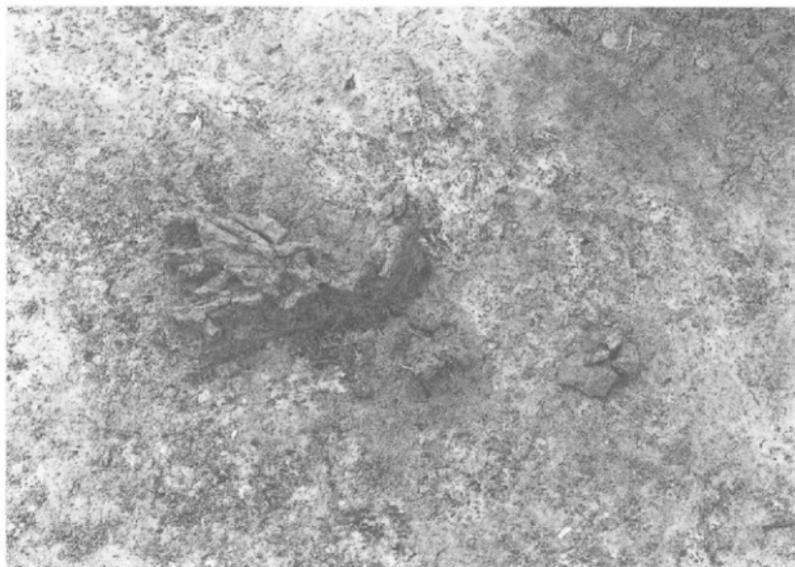
SB-3 (竪穴住居跡) 全景 (南西から)



SB-3 竈 (南西から)



SB-3 竈（南西から）

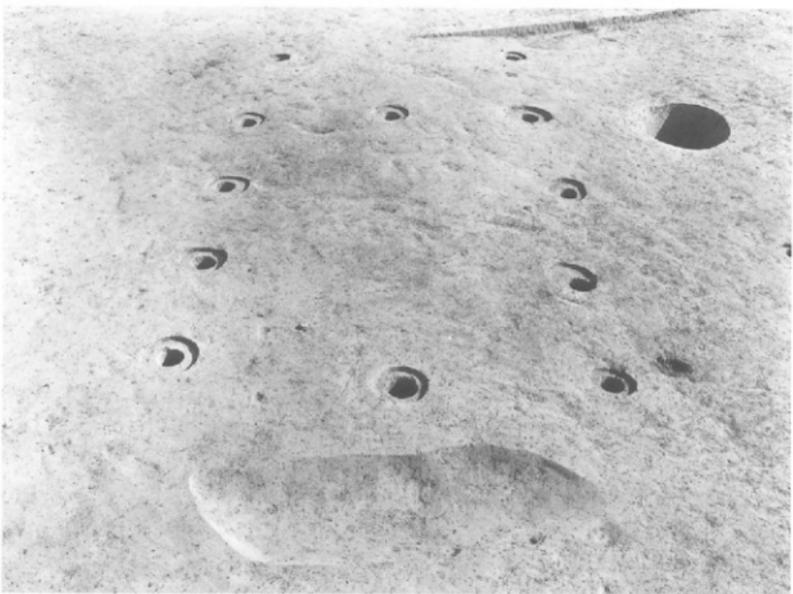


SB-3（竈穴住居） 北西隅 鉄器出土状況（北東から）

図版18



SB-1 (北から)



SB-1 (西から)



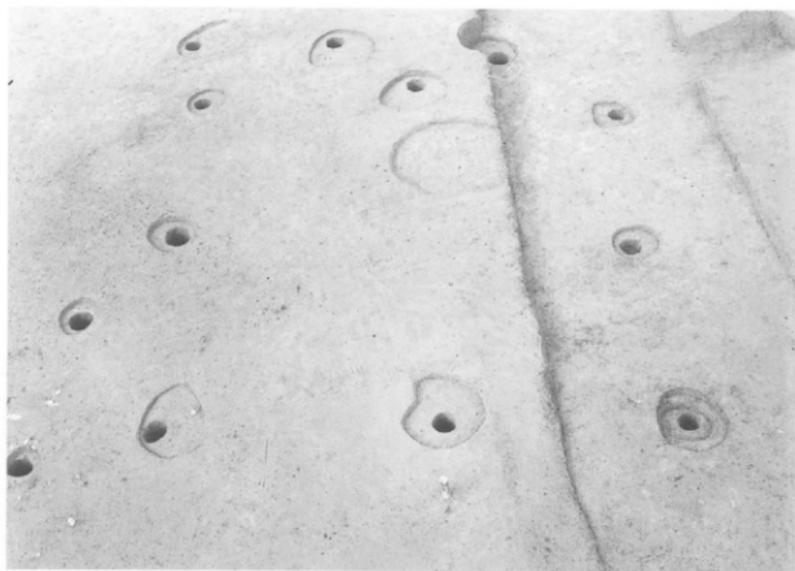
SB-2 (身舎部分)(南から)



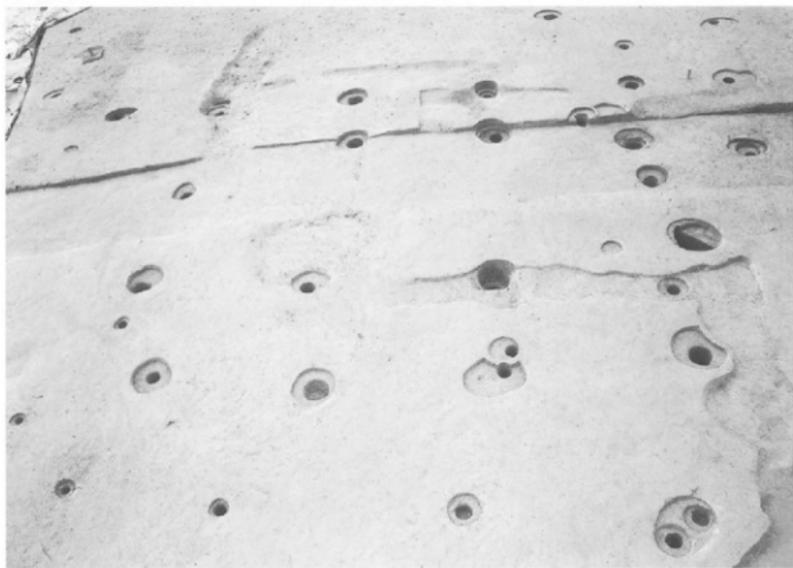
SB-2 (東から)



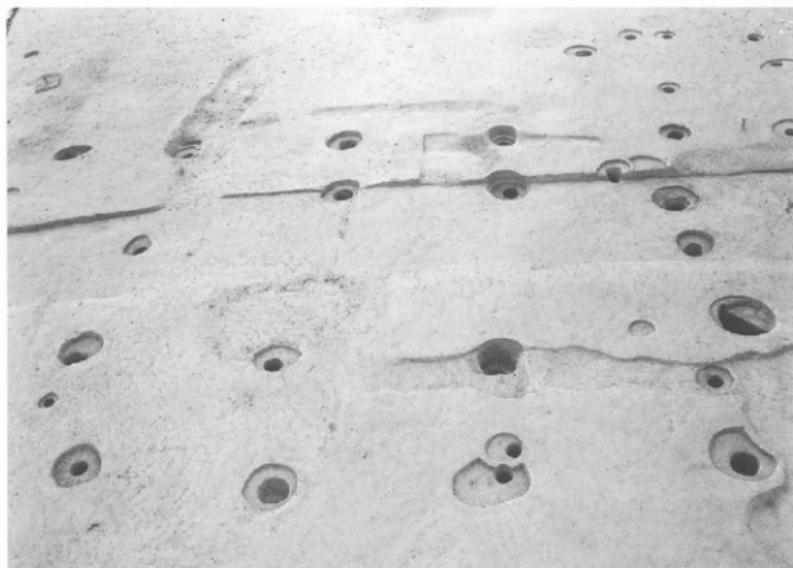
SB-4 (東から)



SB-5 (南から)



SB-6・7 (東から)

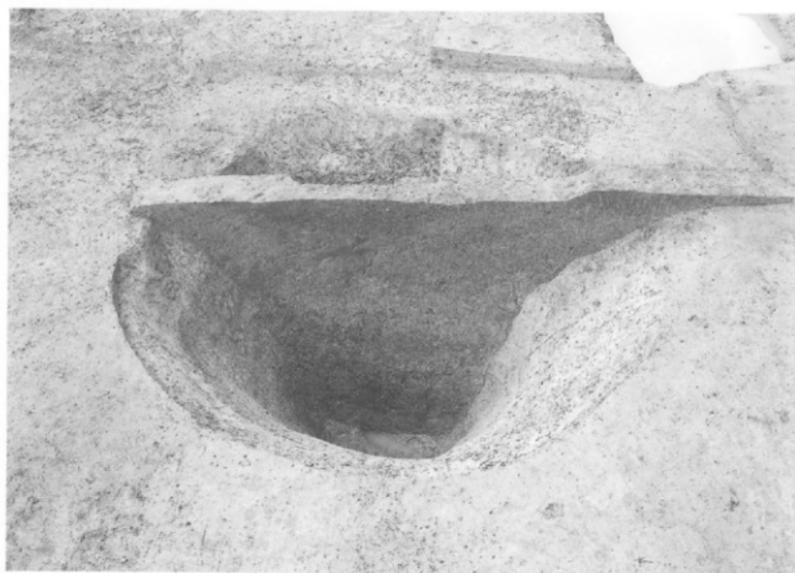


SB-6・7 (東から)

図版22



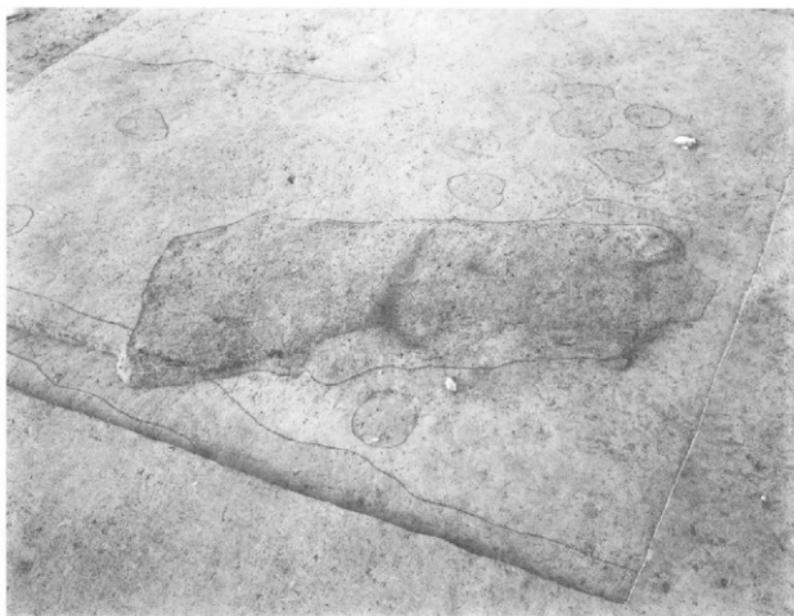
SE-1 (東から)



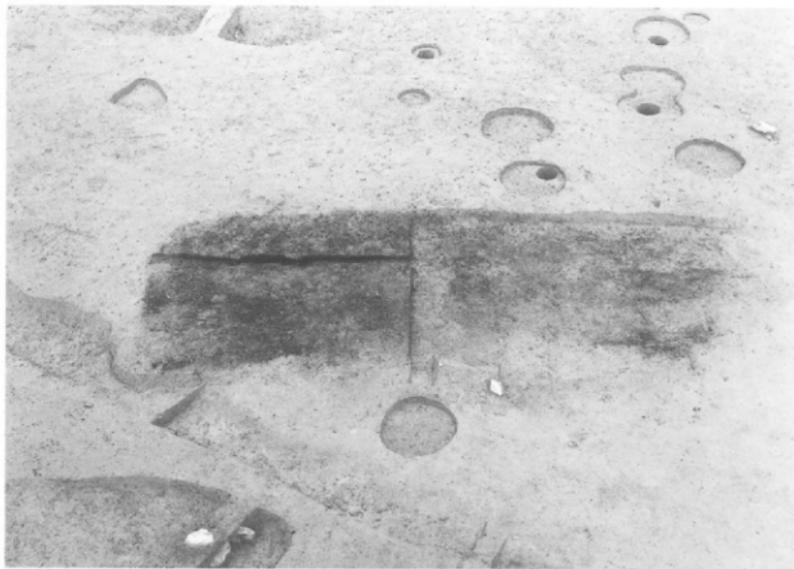
SE-1 土層断面 (東から)



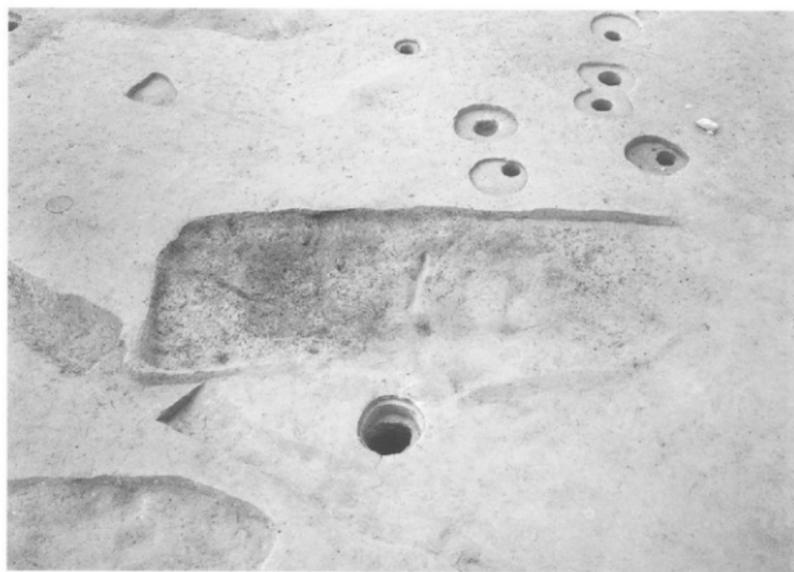
SE-1 周辺 (南から)



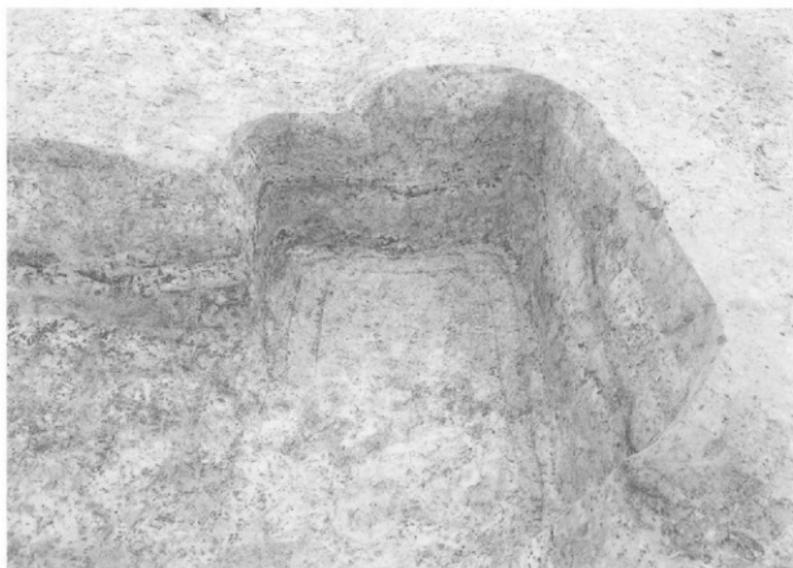
SX-1 検出状況 (南東から)



SX-1 炭堆積状況 (南東から)



SX-1 完掘状況 (南東から)



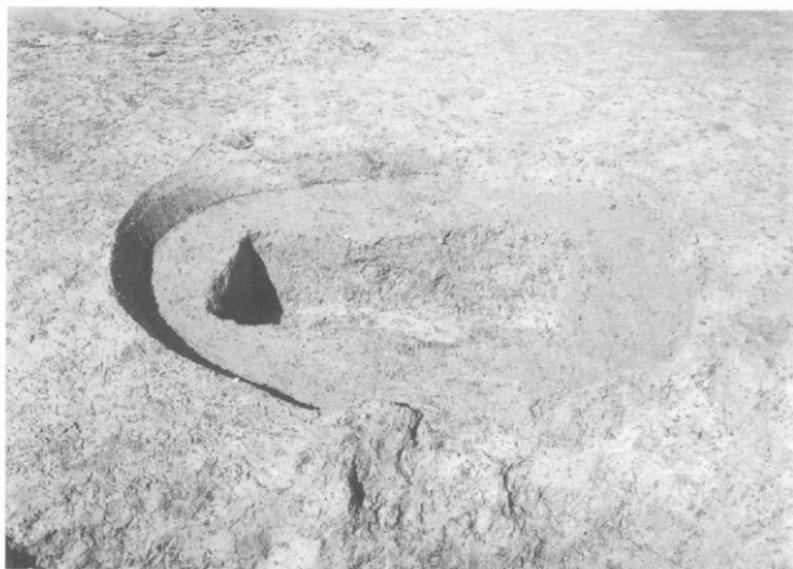
S X-2 (北から)



S X-2 (東から)



S X-3 土層断面 (北西から)



S X-3 (南から)



S X-4 (西から)



S X-4 完掘状況 (西から)



S X-5 (南東から)



S X-5 完掘状況 (南東から)



SD-2 J-J' 土層断面 (南から)



SD-2 I-I' 土層断面 (南から)

図版30



SD-3 北東部土器出土状況と土層断面（西から）



SD-3 北東部土器出土状況（南西から）



SD-5 土器出土状況（東から）

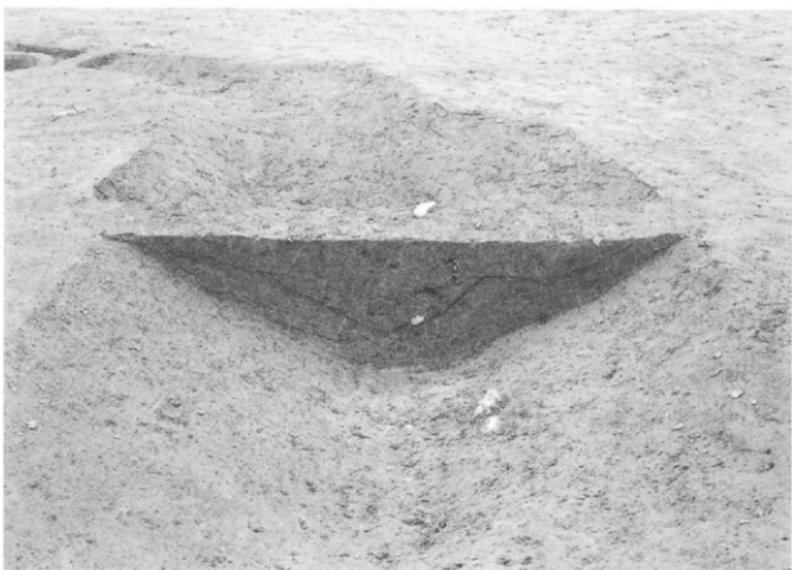


SD-8 土器出土状況（北から）

図版32



SD-10 土器出土状況（西から）



SD-11 土層断面（北から）



谷部全景（南東から）



谷部全景（南東から）

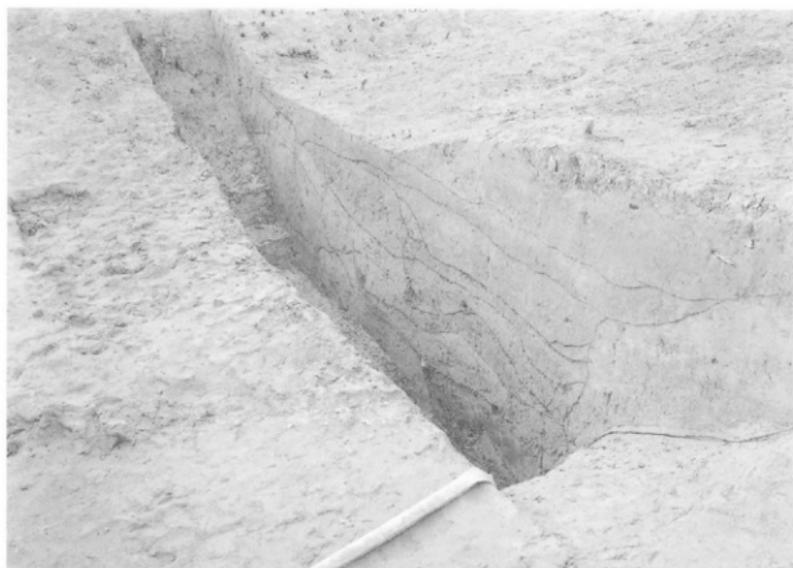
図版34



谷部北端 土層断面 (東から)



谷部A-A' 土層断面 (南東から)



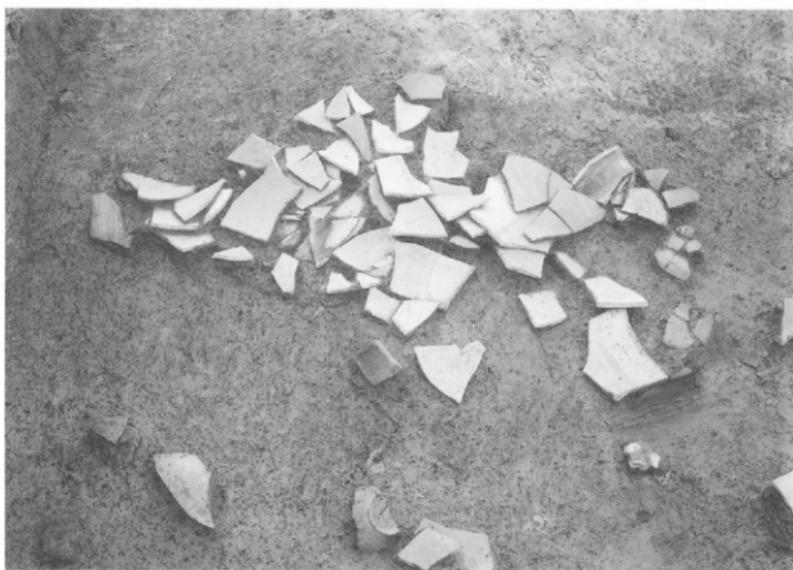
谷部 B-B' 土層断面 (南東から)



谷部 D-D' 土層断面 (東から)



谷部中央 須恵器甕出土状況（東から）



谷部中央 須恵器甕出土状況（東から）



谷部中央 須恵器壺下層土器出土状況 (北西から)



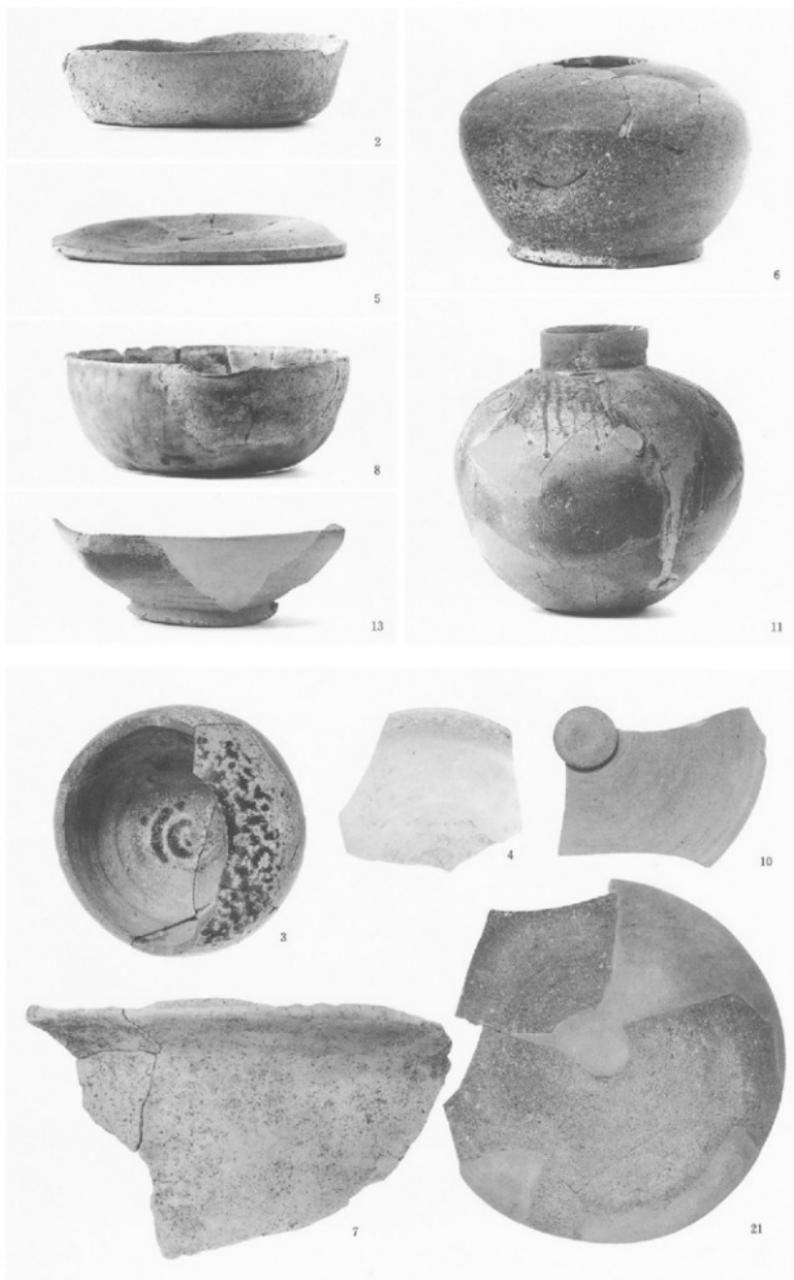
谷部南東 土器出土状況 (南から)

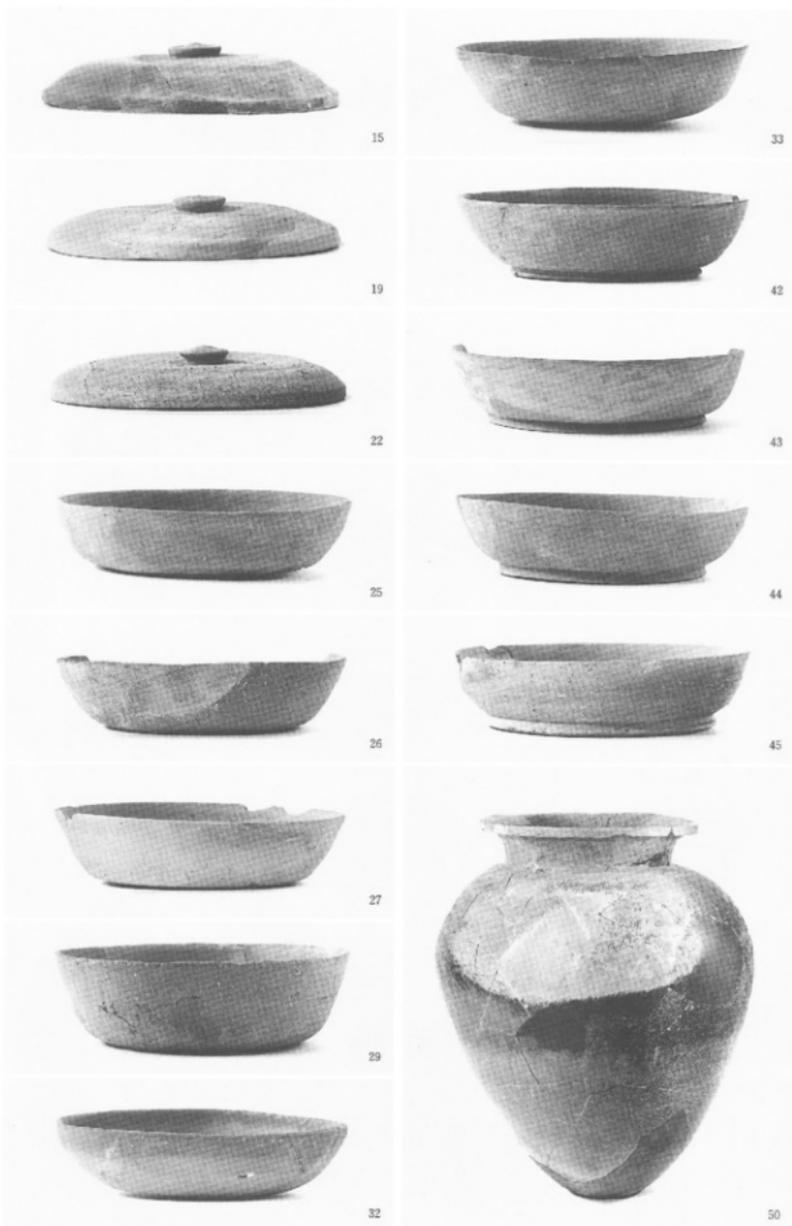


調査区南端 畝状遺構（南から）



調査区 畝状遺構（北から）







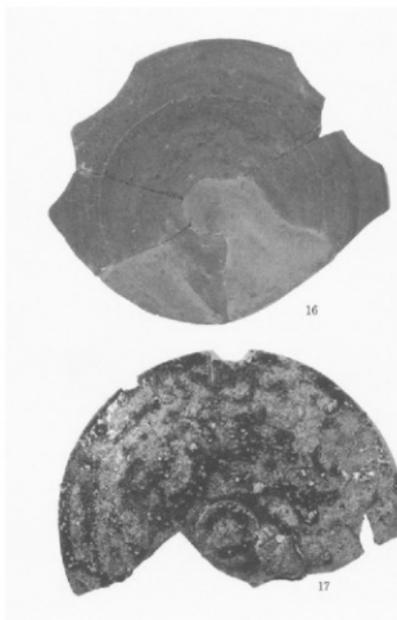
51



54



53



16

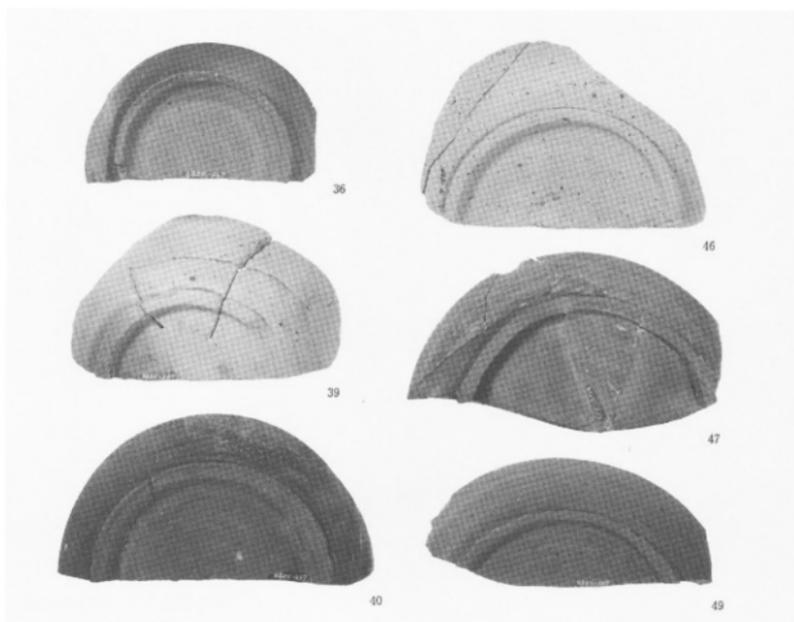
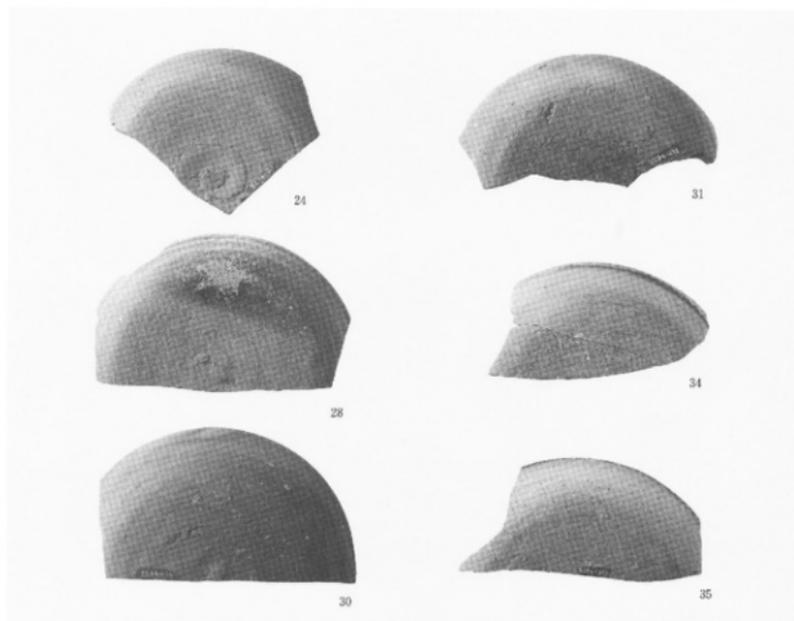
17

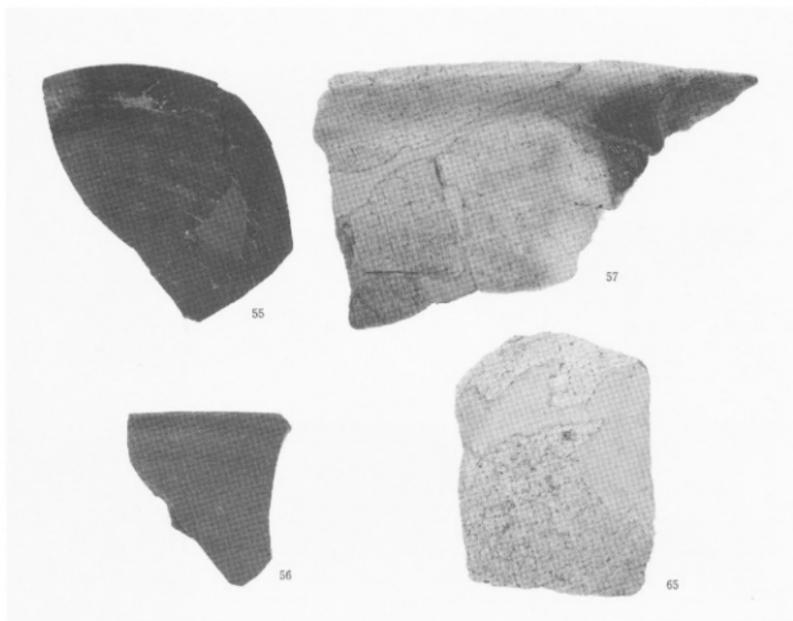


18

20

23

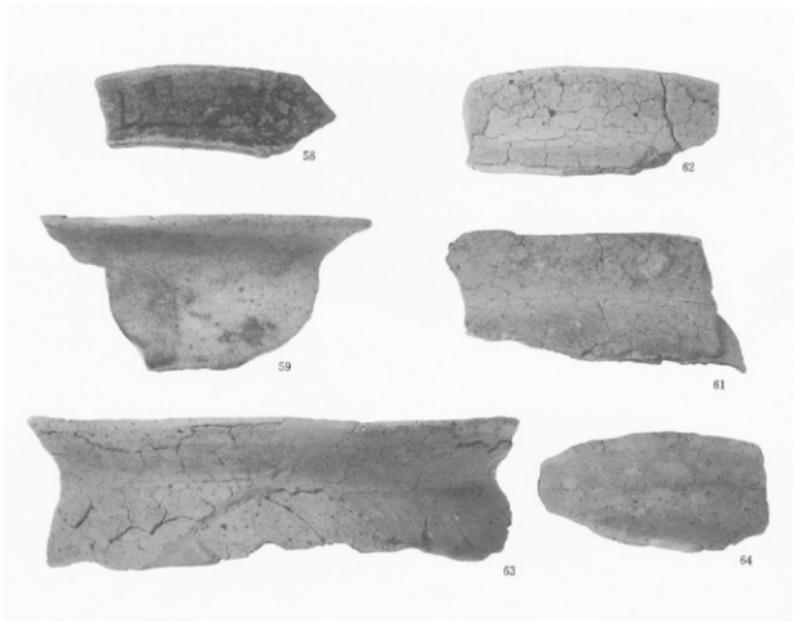




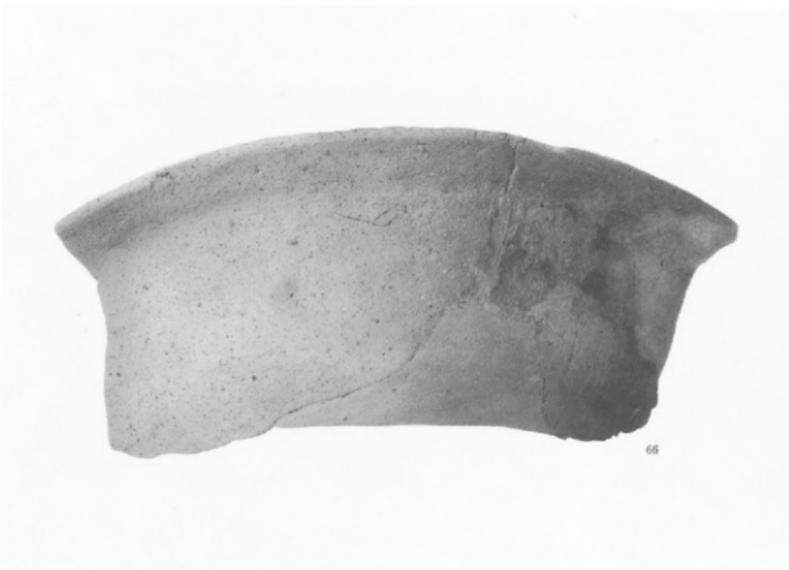
谷部最下層 出土土器



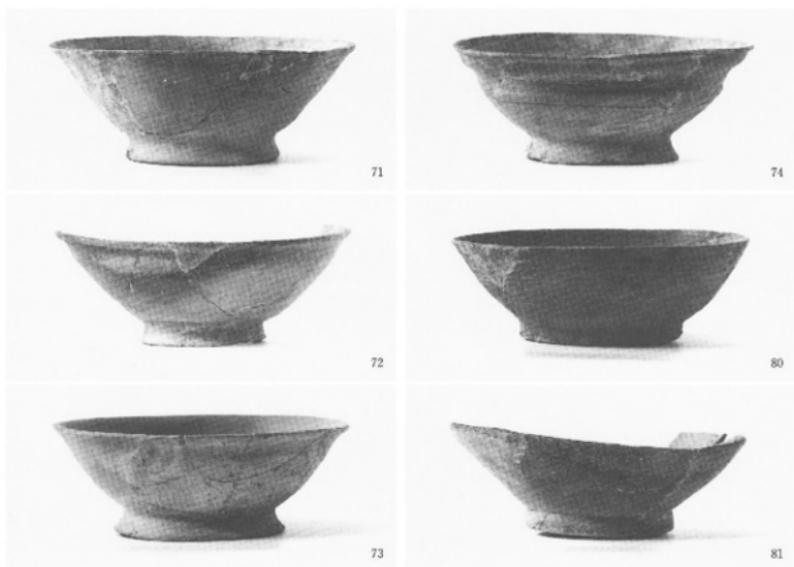
谷部最下層 出土土器 1



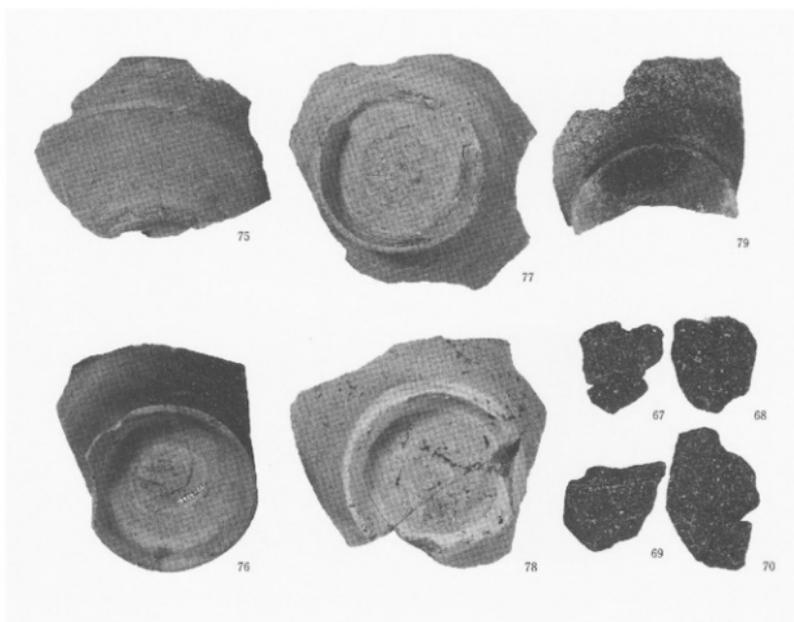
谷部最下層 出土土師器 2



谷部最下層 出土土師器 3

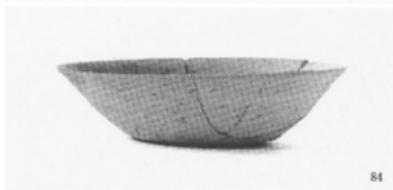


谷部下層 出土須恵器

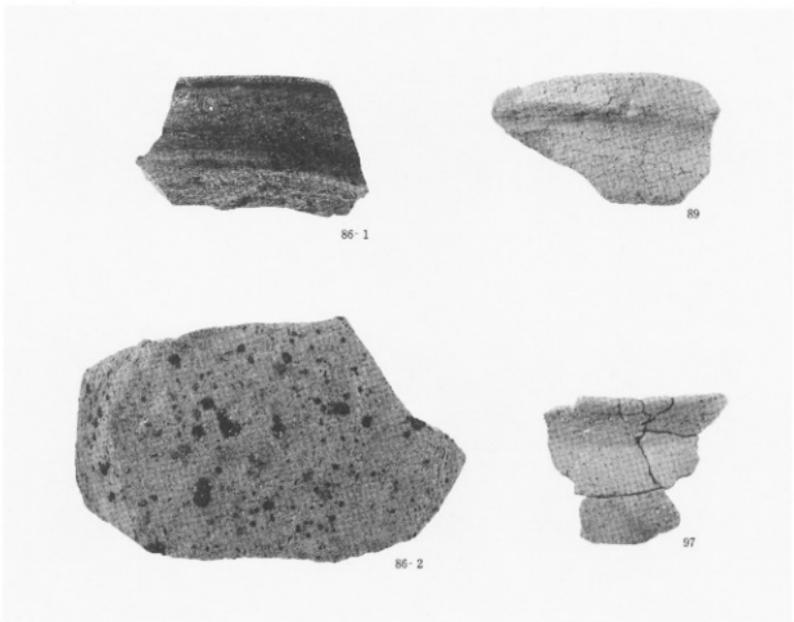


谷部出土土器

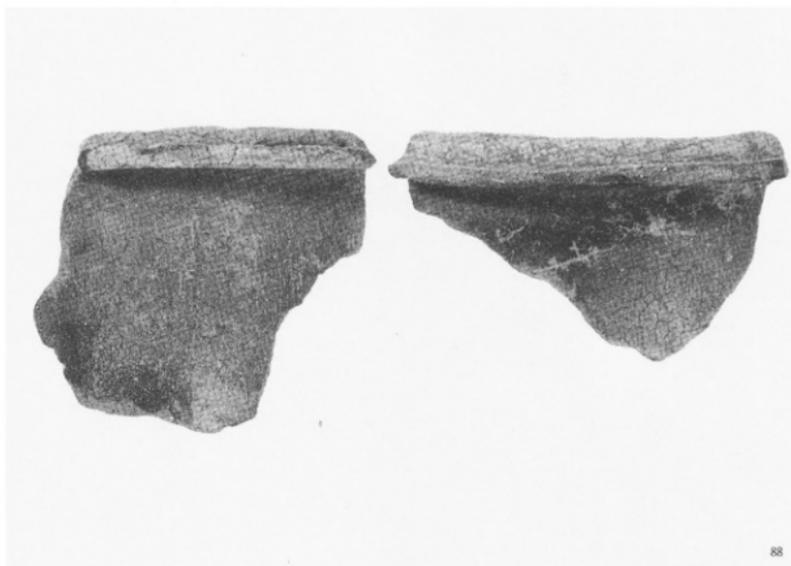
図版46



谷部出土須恵器

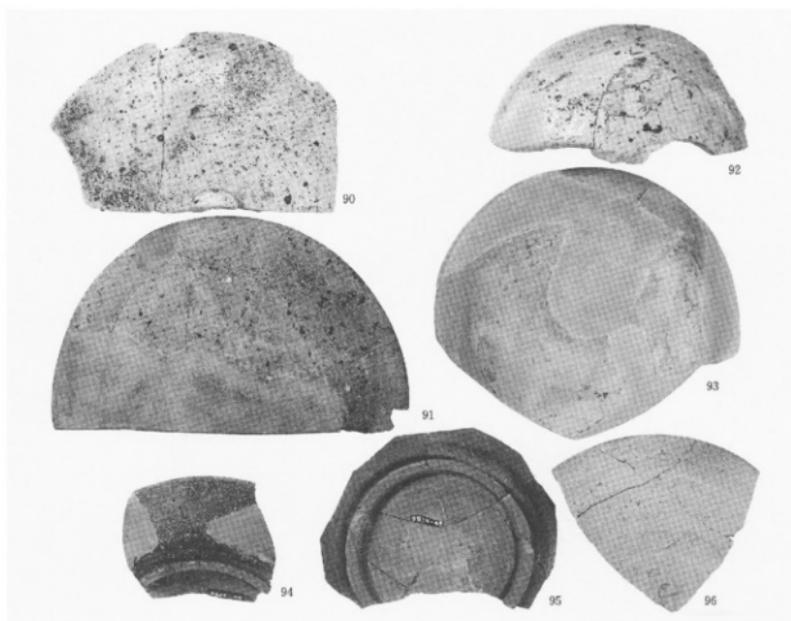


谷部他出土土器

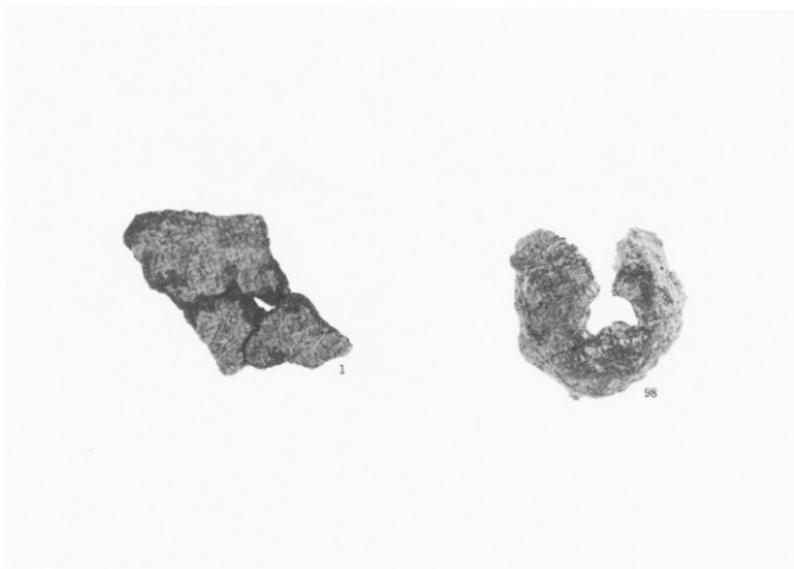


88

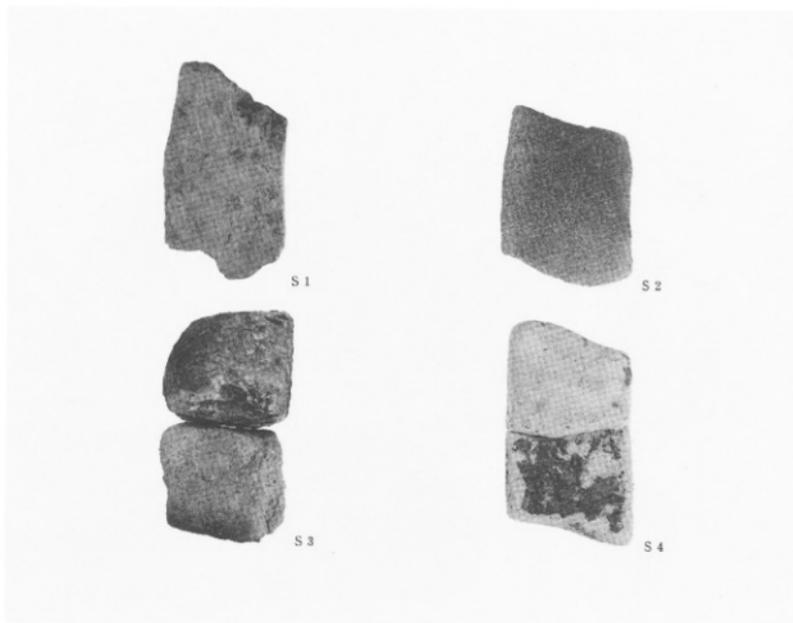
谷部出土土師器



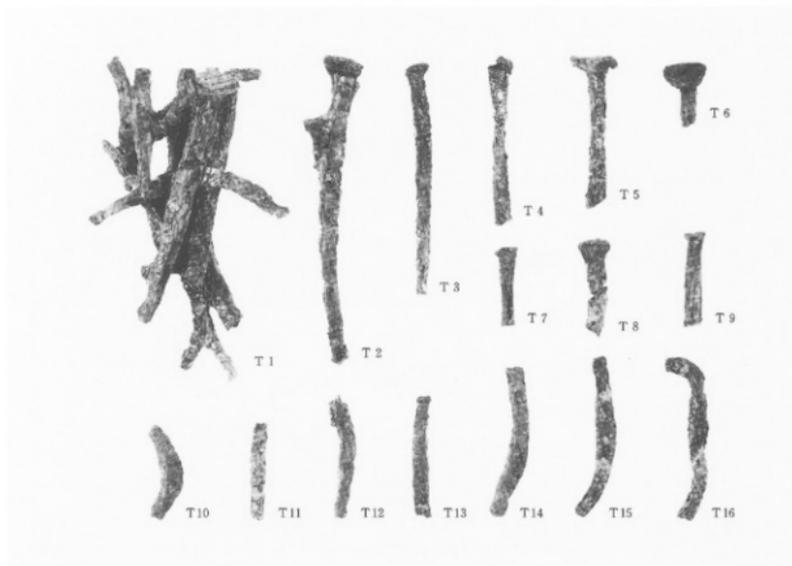
包含層出土須恵器



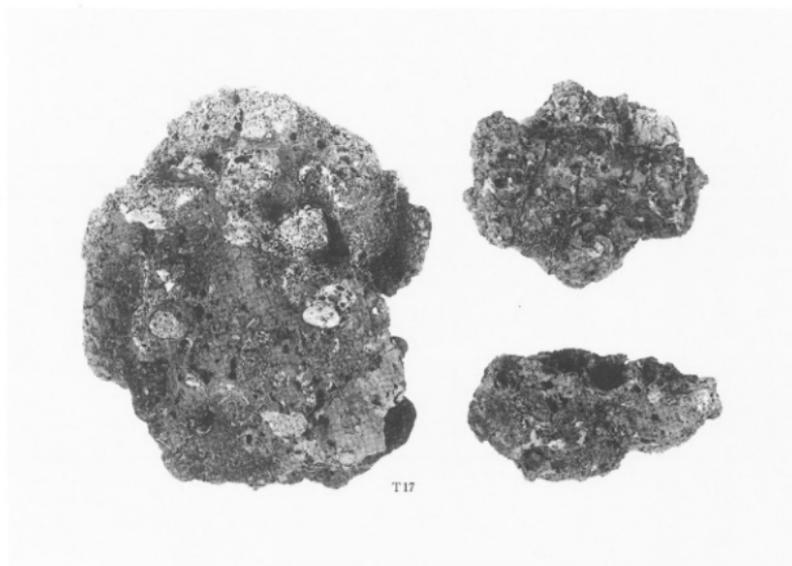
出土縄紋土器・鞆羽口



出土石器



SB-3出土鉄釘



出土鉄滓

報 告 書 抄 録

ふりがな	かじもがたに いせき							
書名	視下ヶ谷遺跡							
副書名	北摂ニュータウン内遺跡調査報告書							
巻次	Ⅷ							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第205冊							
編著者名	岸本一雲・池田正男・森内秀造・村上泰樹・藤田 淳・池田征弘							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL.078-531-7011							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL.078-341-7711							
発行年月日	2000年(平成12年)3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡調査番号					
視下ヶ谷	兵庫県 三田市 すずかけ台 3丁目	28219	870008	34度	135度	1978.12~ 1979.3	確認調査 686㎡	北摂地区 新住宅市 街地開発 事業(中 央地区)
			870049	34分	11分	19870518~ 0626		
			880024	04秒	44秒	19871101~ 19880331		
						19881121~ 19890315		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
視下ヶ谷	生産遺跡	縄紋時代	土塚(簡し穴)					
		奈良時代	竪穴住居跡・掘立 柱建物跡・溝・井 戸・谷・鍛冶炉・ 柱穴・墓	土師器・須恵器・鉄 器・鉄滓・織羽口・ 製塩土器・石器				
	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡					

兵庫県文化財調査報告 第205冊

北摂ニュータウン内 遺跡調査報告書 Ⅷ

梶下ヶ谷遺跡

2000年(平成12年)3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印刷 光印刷株式会社

〒651-2271 神戸市西区高塚台2-10
